
東方 亀兎忍

緑野ボタン 4号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方 亀兔忍

【Nコード】

N5878Z

【作者名】

緑野ボタン4号

【あらすじ】

メスの亀に転生しました。太古の幻想郷世界からスタートです。
(タグ補足：タイトルの設定をちょっと使っていますが、原作キヤラとかは出ません。ガールズラブの描写はギャグの範囲です)

1話「死後の世界」

人は死ぬと、どうなるのか。

肉体の話ではなく、精神はその後、どうなるのか。

有史以前から存在する疑問だろう。

現代日本に生を受け、冠婚葬祭のときくらいにしか信心を発揮しないなんちゃって仏教を崇拝する俺は、死後の世界なんてものに明確なビジョンなど持ち合わせていなかった。

しかし、実際に死んでみるとそうは言っていられない。

俺は交通事故に遭った。乗っていた通学バスが交差点で対向車の大型トラックとぶつかった。何が原因だったのか、今となっては確かめようがないが、起こったものをとやかく言っても仕方がない。俺が生きていれば文句の一つも言っただろう。だが、あいにく俺は死んだ。

事故の直後、大きな衝撃で体が吹き飛び、壁に叩きつけられ、それからの記憶があいまいだ。人間、不思議なものでぶつちぎりの恐怖体験に遭遇すると、妙に達観してしまうものなのか。そのときの俺は自分が死ぬことに根拠のない確信を持ち、その考えを冷静に受け止めていた。

そして、現在に至る。

「ぴー、ぴー！」

俺は気がつくのと、真っ暗な場所にいた。えらく狭く苦しい場所だ。その窮屈さに耐えられず、必死に暴れていると、自分を取り囲んでいた壁が壊れた。

外から入ってくる光がまぶしい。目がよくみえない。まぶたが溶接されてしまったかのようにぴったりと閉じて開かない。体の様子

も何か変だ。まともに立つことができず、腹ばいになって前に進むことしかできない。とにかく、まずはここがどこなのか確かめなければならぬ。

「ぴー！」

幸い、耳はよく聞こえたが、ぴーぴー泣く声しか聞こえない。動物の鳴き声のような気がする。そのとき、盛大な地鳴りが起きた。何事かと驚いたが、そのおかげで目を開けることができた。光の痛さに耐えながら、ようやく周囲を確認する。

そこには、山があった。巨大な岩山だ。それだけならまだよかった。なんと、その山、動くのだ。さつきから響く地鳴りの音、それはこの山の足音だった。

これは何の冗談なのか。振り返ると、俺の後ろにはでっかい卵らしき物が何個もかたまっておいてあった。ほとんどの卵が割れて、中から人と同じサイズはあろうかという子ガメがわさわさ孵化している。そう、亀だ。あの甲羅を持った爬虫類のアレ。

さつきからぴーぴー鳴いている声はこいつらのものだった。それにしても馬鹿でかい。なんの怪獣映画だ。いや、でかいのはそれだけじゃない。俺の周囲に生えている植物。木だと思っていたらどうも違う。これは草だ。バナナの木は本当は草だと聞いたことがあるが、そういう種類ではない。どうみてもそこらへんの道に生えているような雑草が、何メートルもの高さまで育っている。あそこに見えるのはタンポポだろうか。黄色い花は小さい物でも座布団くらいのサイズである。

ここまでくればさすがに気づく。これは周囲の物が巨大化したのではない。俺が小さくなったのだ。信じられないがそう考えるより他にない。どうみてもこれは映画のセットとか、そういう次元に収まるものではなかった。

そして、なぜ小さくなったのかと言うと、それについてもだいた

いの推測はついている。いや、気づかないようにしていたと言っべきか。端的に言つと、俺は亀になっていた。子ガメである。俺の周りでぴーぴー鳴いている奴らと同類である。

「ぴいひいひいっ!？」

とりあえず叫んでみたが、当然人語は話せそうにない。

落ちついて考えてみよう。これは、仏教で言うところの輪廻転生というものではなからうか。魂は死後の世界で新たな生を受け、命は巡る。俺はあの事故で死に、そして次の生を受けてカメになった。しかし、自分で考えたものの、何とも信じがたい説である。

しかも、俺は前世の記憶をもったまま転生したことになる。これはどういふ仏の思し召しか。ヒトに転生できたならいざ知らず、よもやカメとは。カメに人間の心など不要ではないか。

そんなことを考えていると、地鳴りが止んだ。岩山と思っていた存在が動きを止めたのだ。そいつはカメだった。とんでもなくでかい。俺の体が小さいため、大きく見えると言うこともあるが、隣に生えている草の大きさから目算しても普通のカメの域を超えている。ゾウガメとかそういうレベルじゃない。軽自動車くらいの大きさはある。

そんな存在が現れたなら、普通の人間なら恐怖する。俺もその例にもれなかった。カメの本能がそうさせるのか、俺は自分の甲羅の中に引っ込んだ。そんなことをしたところかどうかは思えないが、関係なかった。とにかく怖い。

しばらくそうしていると、落ちついてきた。俺が何かされる気配はない。恐る恐る顔を外に出す。

巨大ガメが俺をガン見していた。

慌てて甲羅に引っ籠る。

『でーてーこーいー』

「ぴっ!？」

今、声が聞こえた。間延びして聞き取りにくい声だったが、確かに意味をもった言葉だ。それも、頭の中に直接響いてくるような、不思議な声だった。これは、巨大ガメの言葉だろうか。とすると、カメ語？ そんなものが動物の世界にあったとは。

『なーんーでーかーくーれーるー？ おーかーあーさーんーだーよー？』

どうやら、この巨大ガメ、俺の母親のようだ。

1話「死後の世界」(後書き)

ウワアアア!

まだ前の作品を完結させてないのに新作を投稿してしまったあああ!

……まあ、誰も見てないだろうけどね……(泣

2話「あつという間に時は過ぎ」

それから俺のカメとして生活が始まった。

はつきり言って、過酷だった。自然界は厳しい。生まれたての赤ちゃんなど、他の動物にとってかっこうの獲物である。常に捕食の危険にさらされているのだ。子ガメたちは、親ガメの足の下にずっと隠れていなければならぬ。

幸いにもうちのビッグマザーは、この付近の生態系の中でも上位にいるらしく、天敵と呼べる生き物はいないようだった。名前があるようで、迂木というそうだ。母ちゃんが腰を据えている内は安全である。その甲羅の下に潜んでいれば敵に襲われる心配はない。

しかし、ずっとその場にとどまっていることはできない。エサを確保する必要がある。カメの生態について詳しくはないが、爬虫類だから授乳はしないのだろうな。どうやら、俺たちは雑食のようだ。大人になると草を食べて生きていけるようだが、子どものうちは肉しか食べられないらしい。迂木は子ガメたちのために狩りをする。

意外なことに動きの遅い迂木にも狩りはできた。しかし、その方法が常軌を逸している。あるとき、水場に集まっていた野ウサギ目がけて口から光弾を発射したのだ。まさに怪獣である。なんでも、妖力という不思議エナジーを使っているらしい。うちの母親は妖怪だった。前からおかしいと思っていたが、どうもこの世界は俺が昔いた世界とは違うのかもしれない。

ただ、相手も俊敏な野生動物である。そういった狩りはほとんど失敗に終わった。とにかく、迂木は動きが緩慢なのだ。それに、光弾は発射されれば一直線にターゲットに向かって飛んでいくが、禍々しい妖気の気配があふれ出すので、危険を感じ取った動物たちはたちどころに逃げてしまう。

なので、俺たちが動物の肉を食う機会と言えば、運よく漁られて

いない死体を見つけたときくらいのものだ。いつもは虫を捕まえて食べる。地面に埋まっているイモムシなどを食べることが多い。迂木が妖気をこめて足をふみならずと、びっくりして地表に出てくるのだ。アリの巣なんかも狙い目である。

ただ、こうして今では死体だの虫だのと平然と語れるが、最初はやはり相当の抵抗があった。現代日本で暮らしていた俺にとって、そんなゲテモノを食べるなんて無理だと思った。しかし、食わなければ飢えて死ぬ。まともにエサが取れない時期だってあるのだ。いつも十分にすべての子ガメにエサが行きわたるわけではない。子ガメたちもそれがわかっていているから、他の奴らを押しつけてでもエサを独占しようとする。遠慮していたのは最初だけだった。バーゲンに群がる主婦がごとく、俺はエサをむさぼった。

俺はエサを独占するようなことはなく、収穫が少ないときは最低限自分に必要な分だけを食べたが、他のカメはそうではない。弱い子ガメは衰弱し、力尽きていった。それに、移動中はどうしても他の動物に狙われる危険が高い。迂木は必死に俺たちを守ってくれるのだが、いかんせん動きがトロすぎる。さっと飛び出してきた狐に啜えられていった子ガメが何匹もいた。一瞬の間隙について空から飛びかかってきた猛禽類に連れ去られた子ガメも何匹もいた。

『くーそー！ まーてー！』

迂木は子ガメたちに愛情を注ぎ、死んでしまったり食べられたりしたときは怒り、悲しんでくれる。が、それはごく短い間だけだ。

『まー、いーやー』

思うに、迂木はアホなのだ。一応、人間に近い感情らしきものはあるが、基本的に動物の本能に忠実に生きている。俺たちの種は多産型である。子を多く残して、次世代に命をつなぐ。子が多く死に、

わずかな生き残りしか大人になれないことは始めからわかっているのだ。迂木は例外的に長生きだったので妖怪化したようだが、もともそう強い種というわけではないようだ。俺も長生きできれば妖怪化するのだろうか。いや、こつやって人間の記憶をもっている時点ですでに妖怪のような気もするが。

ところで、俺は雌ガメとして生まれてしまったようだ。ただ、雄とか雌とか以前にカメだしな。確率二分の一の結果だ。いまさらどうしようもないことである。

迂木は二百年くらい生きているらしい。たまに俺らと同種のカメと会うのだが、どのカメよりも巨大だ。長く生きれば生きるほど、体内の妖力が成長して強い妖怪になれるという。他の雌カメは、一度の子育てで最後まで育て上げることができるとは数はいたい一匹か、2匹といったところである。迂木はさすが妖怪、優秀であり、今のところ俺を含めて7匹の子ガメが残っている。

『カーシーカーシーのー』

迂木は俺のことを『かしこいの』と呼ぶ。まだ、名前をつけられてはいない。他の子ガメたちも『ちつこいの』とか『すすべの』としか呼ばれない。

この迂木の言葉は“念話”という妖術らしい。テレパシーみたいなものだ。実際にしゃべっているわけではない。どういうわけか、俺は念話を使える。普通は妖怪化するくらい長生きしないと使えないそうだ。しかし、たまに生まれつき知能が高い突然変異のような固体がいるらしく、それかもしれないと言われた。迂木とは辛うじてコミュニケーションがとれるが、兄弟子ガメはまったく反応してくれない。

そうそう、能力と言えば、どうも俺には特別な能力があるようなのだ。それは『程度の能力』と呼ばれている。これは、妖怪であるとかそういうことは関係なしに、先天的にもつ裏ワザ的なチカラだ

という。実は迂木も『身を守る程度の能力』というものを持っている。そのおかげで長生きできたそうだ。

『程度の能力』を持つ者は、自ずとその効果と使い方を知る。俺の持つ能力は『注目を集める程度の能力』である。まじで使えない。以前俺が生きていた世界でなら使い道があつたかもしれないが、今の俺はただのカメ。いたずらに注意を惹くようなことをすれば肉食動物の餌食になってしまう。

そんな殺伐とした野生ライフを送っていた俺は、ある日、ついに迂木から名前をもらった。

『かーしーこーいーのー。おーまーえーのーなーはー……』

葉裏。葉っぱの裏と書いてヨウリと読む。俺の甲羅の色が濃い緑色だったのでそう名付けられた。日の光を浴びる明るい表側の色ではなく、暗くどんよりとした深い緑だったので葉裏である。

他の子ガメたちも立派な名前をもらった。意味を理解できていないようだが。カメ社会に名前なんて不要である。迂木は妖怪として知能を持っていたために、自分の子ガメたちに名前を与えるということをしてみたようだ。俺以外の兄弟たちはなんのことかわかっていない様子である。

迂木はアホなりに一生懸命名前を考えてくれたようなので、俺もこの名前を大切にしたいと思う。

『じゃー、きょーかーらー、ひーとーりーだーちーしーてーねー』

え、なんですか？

3話「沢の巨木」

俺の体長は15センチくらいになっただろうか。ミドリガメくらいの大きさである。どうやら、カメ社会ではこのサイズになると独り立ちする決まりらしい。

マイビッグマザーからの突然の宣告に、茫然とする俺。兄弟たちは歩み去っていく迂木をピーピー鳴きながら追いかけた。向こうもカメだがこちらもカメ。両者ともに足が遅いが、圧倒的な歩幅の違いで迂木は森の奥へと消えていった。

それからの俺たちは死に物狂いだっただけ。日々、外敵から襲われる恐怖におびえて暮らした。カメ並みの脳みそしかもたない兄弟たちがうらやましい。俺は下手に人間の感性を持つせい、毎日がハツピーバーステイ気分だよ。

のろまなカメが群れていたのでは敵の目につきすぎてしまう。俺たちは散り散りに別れた。それが、俺たち兄弟の別れだった。その後どうなったのかはわからない。

俺は森の中を少しずつ移動していった。いつもハラヘリ状態だった。改めてマイビッグマザーの偉大さがわかる。この体では虫一匹捕まえることも困難だ。草をたべたべ飢えをしのいだ。

そして、ある日転機は訪れた。

鷹に強襲されたのだ。見つかったと思ったときにはもう遅い。俺は慌てて甲羅に引っ込む。鷹は俺を捕まえると空高く飛び上がった。

(まずい！ 死ぬうっ！)

俺の自慢は甲羅のかたさだ。クチバシで突かれたくらいじゃ壊れない。しかし、鷹もそれをわかっている。迂木に教えてもらったことがある。上空から捕えたカメをわざと落っこし、地面に叩きつ

けて甲羅を粉碎するのだと。そんなことされたら死んじゃうつてば。絶体絶命のピンチ。容赦なく鷹は爪を放した。重力の赴くまま自由落下の恐怖を堪能する俺。これまでの人生、いやカメ生が走馬灯のように脳裏をよぎった。俺はまた死ぬのか。願わくは天寿をまっとうしたかった。

俺が次の転生先はどうか人間でありますようにと祈っていると、甲羅に走る衝撃。だが、それはかたい岩場の感触ではなかった。ごぼごぼと体が沈んでいく。水だ。俺を捕まえた鷹はドジっ娘属性でも有していたのか、うっかり俺を水場に落としてしまったようである。

(ふう……なんとか助かった)

それにしてもここの水はきれいだな。森の奥深く、河川の上流域にまで来てしまったようだ。澄み切った美しい沢の中心に、天を突くような巨木が一本、立っていた。

この木はただの木ではないと、直感が告げていた。大きな力を感じる。しかし、それと同時に弱っていることがわかる。木は枯れかけていたのだ。病気だろうか。これほどの大きな木となると、何千年という樹齢があるかもしれない。

『だれ……か……たすけ……』

そのとき、念話が聞こえたような気がした。いや、間違いなく聞こえた。その声はなんと目の前の巨木から聞こえてくる。この木が助けを求めているのだろうか。もしかすると、この木は妖怪なのか長生きすると妖怪になるのなら、植物にだって当てはまらないとは言えないだろう。

(どうしたんだー！)

俺は念話で話しかけてみたが、答えがない。こちらに気づいていないようだ。俺が小さすぎて感じ取れないのかもしれない。そうだ。こんなときこそ俺の能力『注目を集める程度の能力』を発揮すべきときだ。

俺は能力を使いながら再度呼びかけてみた。

『あな、たは……？』

今度はこちらに気づいたようである。

『ちいさきものよ……わたしは、やまいにおかされた……もうじき、しぬでしょう』

この妖怪は迂木よりも頭がよさそうである。俺の予想通り、病気のようだ。枯れている部分は幹の深くまで浸食しており、もう助かる見込みはないとのこと。

『しかし、いちまんねんをいきつづけた、そのあかしをのこしたい……わたしの、ちから、を、あな、た、に……』

そう言うと、木は生気を失った。なんとなくだが、わかる。この木は死んだのだ。依然としてその姿は壮観なものだが、すでに亡骸となった。そして、遙か高みにある枝から一つの実が落ちてきた。ちようと俺の前で止まるようにしてころころと転がってくる。

その実は琥珀色に光っていた。文字通り、輝いているのだ。圧倒的な妖力を感じる。極限まで練り上げられた妖力の渦がクルミほどの大きさの実の中に閉じ込められている。これは、この木の力のすべてが詰まった物だ。一万年分の成長した妖力が余すところなく凝縮されている。

え、これって、ものすげー、タナボタじゃね？

(木さん、ありがとう！ キミの死は無駄にはしない！ パクツ
……うめええええ！)

というわけで、おいしくいただいた。前世も含めて、今まで食べてきた物すべてを超えるほどのおいしさだった。あつという間に果汁の一滴も残さずに完食した。

その直後だ。俺の体の中にとんでもない量の妖力がみなぎってきた。この力さえあれば、もう何も怖くない。捕食者の存在に怯える必要もなくなる。これで俺も妖怪に……あれ？ なんだか、体の調子がおかしい。手足が動かない。どうなってるんだ。

『あは、あはははは、あはははははっ！ ばかね、わたしのちからが、ただでてにはいるとおもったの？ もう、あのからだは、つかえなくなってしまった。こんどは、あなたをなえどこにして、せいちようするわ』

(ナニイイイ!?)

ですよ。そんなうまい話、あるわけないか。

どうやら、病気で死にそうになった巨木さんは、自分の体を捨てて新しい種を俺の体に仕込んだらしい。莫大な妖力の影響によって、種は俺の体の中で急成長を始める。

(いたい、いたい、いたいイイイ!)

体中に激痛が走る。俺の腹の中で異物が大きくなっていく。根が内臓に食い込み、四肢の末端まで浸食される。普通ならとつくに死んでいるだろう。だが、俺は死ぬことも許されず、終わらない激痛

に苦しみ続ける。俺の体内に張り巡らされた根っこは完全に根付き、俺は全身を支配されてしまった。

それが終わると、次は“芽吹き”が始まる。腹の種が膨れ上がる。やばい。今度こそ死ぬ。ミシミシと音を立てて俺の自慢の甲羅が悲鳴をあげる。

(いぎやああ、ああ、あがあああっ！)

『あはは、あはははっ！ わたしのえいようになってね』

ついに俺の甲羅は砕けた。内側から押し上げてきた種の芽が、俺の背中から飛び出す。逆に腹側からは根っこが飛び出し、地面の奥深くへと伸びていく。そして、俺の意識は静かに暗転していった。

4話「目覚め」

『タスケテ！ タスケテ！』

だれかの声がある。この声はどこかで聞いたことがある。

さて、俺はだれだったっけ。そうそう、葉裏だ。

俺が見た最後の記憶。できれば思い出したくないほどグロテスクな死に様だった。ということは、俺はまた転生したのだろうか。そういうえば、この声は何だ？ 脳内に響いてくる。

『タスケテ！』

(だれだよ、あんた。俺は眠いんだ)

ここは暗い。体も動かない。意識だけが鮮明だ。そして、俺の体の中に熱い何かが流れ込んでくる。そこで気がついた。熱い。体が焼けるように熱い。

(あちっ、あちちち！ なんだ、なにが起こってるんだ？)

俺の目が覚めたのも、この熱さのせいだ。血管に溶けた鉄を流し込まれているような感覚である。もうこんな拷問はたくさんだ。確かに俺は前世で徳を積むようなことはしなかったが、こんなひどい目に遭わされるような業も積んだ覚えはない。

『ニンゲンガクル！ コロサレル！』

この声、どこかで聞いたことがあると思ったら、俺に寄生しやが

った巨木妖怪じゃないか。俺はまだ生きているのか？

俺は自分の意識を集中させる。ここは、俺の体だ。体中に木の根が張り巡らされている。なんだか、成長しているような気がするな。俺は寄生されながらも生きていた。いや、巨木に生かされていたのか？

俺の背中からは幹が生えている。意識は俺の体を離れて、そこをずっと上に登っていくことができた。今の俺はヤドリギと一心同体になっているのだろう。現在のヤドリギは、俺が最初に見たときの姿よりもずっと立派に育っていた。あれからどのくらいの年月が経ったんだ？

「ようやくたどり着いた。これが噂に名高いあの『見られずの霊樹・六島苞』か……」

「ああ、周辺の森に張ってあった結界は厄介だったが、なんとかなってよかったぜ。見るよ、この大きさ、超一級品だ。こいつは金になるぜ」

ふと、幹の下あたりに意識をやると、人間がいた。久しぶりに会ってみた方がいいが、なんか悪人臭がするな。素直に喜べない。どうやら、この木を切り倒すつまりらしい。なるほど、それで巨木妖怪の奴は慌てているのか。

六島苞なんてかつこいい名前と呼ばれているようだけど。結界とか張って人間対策はしていたようだが、破られたみたいだ。ざまあ、と言ってやるう。さっさと切り倒されるがいい。

それで、六島苞の奴はさっきから何をしているんだ？

『コノカラダハ、モウダメダヨ！ タネヲノコサナイト！』

この体はもうダメだ。種を残さないと……って、こいつもかし

て！？

俺は自分の体に意識をもどした。案の定だ。こいつは、自分の持つすべての妖力を俺の体に集めている。あのときと一緒だ。樹木という体を捨て、すべてを果実に結集させて逃げようとしているのだ。体が熱かったのは、妖力を流し込まれていたせいだ。

（おい、こら！ 人の体に何してんだ！？ 俺は芋じゃねえぞ！）

『ジヤマシナイデ！ “ミ”ハ、デキタ。アトハ、“タネ”ヨイレルダケ……』

実はできた、後は種を入れるだけ、ってどういうことだ？

そのとき、幹の上部に俺の意識が違和感を感じ取った。今度は何だ。意識を向けると、そこにコブのような物ができていた。それが、だんだんと根元に向かって降りてくる。

よく調べてみると、それはなんと六島苞の命の結晶だった。そうか、これが種なんだ。実は果肉と種でできている。果肉には妖力がこめられており、種には六島苞自信の魂が宿っている。果肉の妖力を養分にして六島苞は成長するのだ。実を食べる者は、言うなれば土壌。そこに果肉の養分を振りまき、最上の苗床を作り出す。

前の六島苞と比べて、今は格段に妖力が上がっているのがわかる。そのあまりにも膨大な妖力は、枝に実らせることができないほど強大なため、地下に存在する俺の体を芋代わりにして妖力を蓄えていたらしい。あくどい。

つまり、種である“コブ”が俺の体に到達してしまえば、“実”が完成することになる。それだけはやめさせなければならぬ。っーか、やめろ！

（とまれー！）

『ワッセ！ ワッセ！』

だが、俺は無力だった。俺と六島苞とでは、生命としての格が違うようである。俺の意識と違って、六島苞の意識は“コブ”という形で実体化している。現に幹の中を移動しているコブを、実体のない意識の集まりでしかない俺が止めることはできない。俺自身の体もいまや六島苞の根っこに絡みとられて支配されてしまっている。抵抗はできない。

残す可能性として、実体のある連中に止めてもらおうしか他に道はない。つまり、人間たちに木を切り倒してもらおうのだ。種は幹の中をゆっくりと下降している。根にたどりつく前に切り離してしまえば俺の勝ちだ。

『人間たちよ！ 俺の声を聞けい！』

「な、なんだこの声は！？」

俺は念話を通じないか試してみた。うまくいったようだ。人間たちは動揺している。

『俺の結界を破ったことは褒めてやろう。だが！ お前たちの思い通りにはならんぞ！』

「もしかして、六島苞がしゃべってるのか？」

「これは妖怪が使う念話という術だ。なるほど、こいつにも自我というものがあるようだ」

よし、次は俺の能力を使って、注目を集める。俺と六島苞は一心同体。つまりは、俺の能力の適用範囲に六島苞もいることになる。

俺は六島苞の魂が宿る結晶に“注目を集めた”。

「ん？　なあ、何か感じないか？」

「お前もか？　そうだな、存在感、とでも言えばいいのか……あのあたりに強い気配を感じる」

「おお！　オレもそう思ってたんだ！」

「私は靈感があまり強くないのだが、それでも感じ取れるほどの大きな存在だ。幹の中に何かいるのか？　ん？　しかも、幹の中をゆっくりと……下に向かって移動していないか！？」

ここまでくれば、後は俺の演技次第だ。頼むから、早く伐採してくれよ！

『な、何を言っているのだ！　下等な人間風情が！　俺は何も隠してなどいないぞ！』

「なんだ、こいつ動揺し始めたな。はーん、そうか、わかったぞ」

「なにがわかったんだ？」

「これだけの存在感、おそらくこれは妖怪の“心臓”だ」

「なんだそれは？」

「妖怪の核、魂みたいなものだ。こいつ、心臓をとられまいと地下に隠そうとしているのさ」

「なんだと!? じゃあ、さっさと切っちまわねえとな!」

その調子だ! やれ、ひとおもいにやってくれ!

だが、問題は時間だな。ゆっくりではあると言っても、確実にコブは降りてきている。早く切らないと手遅れになってしまう。

そこで、人間たちはチェンソーを取り出した。ブオブオとエンジンをふかせる。よっしゃ! 文明の利器最高! これならいける!

『さて! まつてくれ! 頼むからそれだけは……!』

「こつちにも都合があるんでな。悪いが、それはできねえ相談だ!」

ブイイイイギユアアアッ!

とうとう幹に刃が入った。その振動は、俺にも痛みとなって伝わってくる。まだ、俺と六島苞はつながったままなのだ。痛みも共有している。しかし、ここで弱音を吐くことはできない。これも荒療治だ。我慢我慢!

『ヤメテ! キラナイデ! イタイ! タスケテ!』

……ちょっと、可哀そうな気もするけど、お前も俺にとんでもないことしてくれたからなあ。自業自得だ。

チェンソーはさして抵抗もなく、ずぶずぶと幹に食い込んでいく。自分の体の一部を切り離される感覚はぞつとしない。目の前で腕をぶつ切りにされているようなものだ。痛みを気絶しそうになる。耐える、俺……!

そして、メキメキというきしむ音がしたかと思うと、どずっつん

と木が倒れる音が響いた。俺は自分の体の中に六島苞の存在を感じない。

（勝った……！）

俺は勝利の味を噛みしめた。

5話「妖怪化」

「うわ、なんか幹から出てきたぞ。つかまえる！」

「これが六島苞の心臓か。研究所に高く売れるぞ！」

地上では、人間たちの喜ぶ声が聞こえる。俺もおめでとつと一声かけてやりたいが、体がまだ動かないのでじつとしておこつ。しかし、ほどなくして辺りが騒がしくなってきた。

「なんだ、どうした!？」

「妖怪だ! 森の妖怪たちが出てきやがった！」

「ちっ! 妖怪封じのシールドがもたなかったようだな」

「どうする、まだ六島苞の木材を切り出してないぜ!？」

「……諦めよう。今の装備じゃ、やりあうのはきつい」

「ちくしょう、せつかくここまで来たつてのに!」

「いや、収穫ならあったさ。六島苞の心臓を手に入れた。これだけでも目ん玉が飛び出るくらいの金になるぜ！」

人間たちは逃げるように帰って行った。六島苞は研究所というところに売られるらしい。元気だな。

その後、何かの気配がぞろぞろと俺の上に乗ってきてるのを感じ

た。妖力を感じる。ということは、こいつらが人間がさつき言っていた妖怪か。こんなに大勢の妖怪と接するのは初めてのことだ。今までに会った妖怪は、迂木と六島苞だけだからな。

「六島苞様が切られてしまったぞ！」

「なんとということだ……これでは、森を守る結界がなくなってしまっ
まっ」

「おのれ、人間どもめ！」

あれ？ もしかして、六島苞って結構慕われてたのかな。こんなに多くの妖怪に悔やんでももらえるなんて。そういえば、結界を張ってたのは六島苞だったな。ということは、間接的にこの森の妖怪たちを守っていたということになるのだろうか。

あと、この妖怪たち普通に人語が話せるんだな。妖怪ってみんな
念話で話すのかと思ってた。

「……いや、待て！ 何か地中にいるぞ！」

「本当だ！ とてつもない妖力を感じる。これは六島苞の妖力だ
！」

あれあれ？ まずいぞ、俺のことがばれてる。

言われて気づいたが、俺の体にはとんでもない量の妖力がため込まれていた。六島苞の芋にされていたせいだ。俺の体に六島苞の全妖力が結集されていることになる。

「切り株の下から感じる。六島苞様！ そこにおられるのですか
!?!」

どうしよう。返事したほうがいいのか。それはそれでややこしくなりそうだし。

「六島苞様が我々に何か残してくださったのかもしれない。掘り起こしてみよう!」

うわあ、結局面倒なことになりそうだな、おい。

* * *

それから大勢の妖怪たちが集まって、切り株を引っこ抜く作業が始まった。俺の体は相変わらず動かない。念話を使えば土の中からも呼びかけることができるのだが、何と声をかければいいのかわからず、困り果てていた。そもそも六島苞とこの妖怪たちの関係ってどんなものだったんだ。

掘り起こし作業は難航したようだ。そりゃこれだけデカイ木である。切り株もでかい。根も広大にひろがっている。昼も夜も休みなく、妖怪たちは働いた。

三日目にして切り株の周りの土を取り除いていく作業がようやく終了し、それから引っこ張り上げるため、奮闘しているらしい。話を聞いていると、てこ原理で持ち上げてロープで引きずりだす算段のようである。

「オーエス! オーエス!」

まるで祭りのような熱気で作業は続けられた。そして、5日目。ついにお披露目である。

「これが六島苞様の根っこか……」

「でっけえ岩がからまってやがる。だからあんなに重かったのか」

「さて、この岩から妖力を感じるぞ」

岩？ 今の俺は岩に見えているのだろうか。

それより、問題なのはこれからどうするかということだ。依然として体はがっちりとかに拘束されるように固まっていて、ピクリとも動かせない。さすがに俺も焦ってきた。このままずっと固まったままとか、ないよね。まさか、六島苞の呪いとか？

妖怪たちには、俺の姿はでかい岩に見えるらしい。絡みつく木の根を取り払い、水で洗ってきれいにしてくれたようだ。あざっす。

「さて、取り出してみたはいいものの、これが何なのかさっぱりわからないな」

「翡翠のように綺麗な緑色だな。欲深い人間たちならば、途方もない価値で扱っだろう。もしかして中に何か入ってるんじゃないか？」

「……壊してみるか？」

「バカな！ 六島苞様のバチがあたったらどうする!？」

「もう根っこも掘り出しちゃったんだし、今さらじゃねえか」

『いやさてさて!』

「」「」「!」「」

しまった！ 妖怪たちが物騒なことを言いだすから、つい念話で話しかけてしまった。

「これは念話……！ ということは、六島苞様なのですか!？」

『あー、なんだそのー……俺は六島苞だっ!』

しまった！ 勢いに任せてつい口から出まかせを言っちゃった。

「おお！ 六島苞様は生きておられたんですね!？」

『い、いや、俺はまあ、六島苞であって六島苞ではないというか』

「どういふことでしょうか？」

くそう、ここまできたら出まかせで全部押し切るしかない！

『六島苞と呼ばれた物は、俺の表層にすぎん。俺は強すぎる力を自ら封じ込めるために、あえてあのような姿をとっていたのだよ！ 人間たちが表層部分を刈り取ったため、封印が解けてしまったよ
うだな』

「なんと！ そうでありましたか！ さすがは六島苞様です！」

半分以上嘘だが、いいや。どうせ、ばれやしないさ。

だが、いつまでも六島苞様と呼ばれ続けるのはさすがに嫌だな。

『その六島苞という名だが……それはあくまで俺の表層につけられた名前だ。俺の名前は葉裏という』

「そうでしたか。失礼いたしました、葉裏様」

『うむ。それで、俺は長らく眠りについていたので、最近の事情について疎い。というか、ぶっちゃけあんたら、だれですか？』

「ええ！？ 我々のことを覚えてないのですか？」

『お前たちと接していたのは、表層だからな。俺自身は眠っていたのだ。まず、俺がどれだけの間眠りについてたのか知りたいな』

「さようですか。しかし、そう言われましても、六島苞……葉裏様は我々のような有象無象の妖怪とは一線を画する存在であります。どれだけの悠久の時を生きてこられたか、我々には想像だにできません。少なくとも数千年はくだらないではないでしょうか」

どうも、かなりの時間、俺は冬虫夏草状態だったようだ。

でも、確か前に六島苞に会ったときは、一万年生きてたって言ってたな。少なくとも、それだけ分の妖力が俺の中にあるということになる。

『で、人間がいるようだな。奴らとはどういう関係なのだ？』

「はい！ 人間は我々妖怪の宿敵です！ 傲慢なる人間は我々のすみかを脅かし、無秩序に森を切り開き、河を汚します！ 駆逐すべき存在です！ あるいは、葉裏様に手をかけようとするとは、何と不屈きな……」

『俺が結界を張っていたはずだろ？ それはどうなった？』

「葉裏様の結界は永らくこの森を守護してくださいました。人間どもも、手出しができないほどの強力なものです。我々は油断していました。人間はカガクという恐ろしい術を使います。おそらく、葉裏様の結界は人間のカガクの力によって破られたのではないかと思われます」

妖怪の妖術と人間の科学が対峙する世界なのか。六島苞つてめっちゃ強い妖怪なんだろう？ その力を無効化するとか、人間側強すぎじゃないか？

『結界を破られた原因はわかったのか？』

「はい。この森の結界は葉裏様の“小株”によって形成されています。一か所だけ、小株が枯らされていました。何かの薬を使って小株を攻撃したでしょう。人間の薬は植物に多大なる被害を与えます。普段は小株を見張る妖怪がいるのですが、警備の隙を突かれました。面目次第ありません」

なるほど、六島苞の小株で結界は作られていたのか。なら、あの人間たちは草枯らしでもまいたのだらう。植物系妖怪の弱点を突いたわけだ。

『六島苞……俺の表層は強かっただろ？ 人間たちに対して結界以外の対抗策はなかったのか？』

「ええ、六島苞様は確かに強大な力をお持ちでしたが、それは守りの力でした。この森は人間の都に最も近い妖怪の拠点です。人間の都から発せられる“カガクブツシツ”によって、通常なら枯れ果ててしまうはずの森を、六島苞様が結界の力で浄化されていたのです。我々がここに住めるのも六島苞様の結界のおかげでした」

六島苞の妖術は戦闘向きではなかったようだ。拠点を作るのには優れているが、一度内部に侵入されると手出しがでなかつたのだらう。

なんかやばい気がしてきた。六島苞、性格は悪いけど、妖怪の社会に貢献してたんだな。どうしよう、あっさり死んじゃったよ。

「そういうわけでして、今、この森には結界がない状態なのです。お目覚めのところ、申し訳ありませんが、なにとぞ新しい結界を葉裏様に作っていただきたいのですが」

『え？ あー、結界？ ハハツ！ 結界ね、結界！ ……ちよつと、無理かなー、なんつて』

「え……」

妖怪たちの顔は見えないのだが、辺りがざわざわと騒がしくなる。それもそうだ。いきなり自分たちの住む森が安全ではなくなると言われたのだから、動揺しないわけがない。

「な、なぜなのです！？ 警備を怠つた我々への罰でしょうか！？」

『いや、そうじゃない。あの結界を張っていたのは確かに俺の表層だが、その表層である六島苞が死んだのは事実だ。今の俺には結界を張る術が使えない』

これは正直に話すしかない。使えないものは使えないのだ。嘘をついてもすぐにわかる。妖怪たちは絶望したかのような悲鳴を上げ始めた。ど、どうしよう……

「で、では、この森はもうおしまい、なのでしょうか……?」

『……』

「このまま人間に追い立てられるがまま、ここを立ち去るしかないとおっしゃるのですか!?!」

『……』

「葉裏様! 我々はこれからどうすればいいのですか!」

『……』

「ああ、六島苞様が生きていらっしやったのなら、こんな思いはしなくてもすんだのに!」

『……』

「もしかして、葉裏様は六島苞様と同一の存在ではないのではありませんか?」

『な、なにをコンキヨにソナナこという!』

「そうだ、六島苞様と葉裏様が同じ存在だというのなら、どうして同じ結界の術が使えないんだ! おかしいじゃないか!」

『だから、それは俺の表層がだな……』

「表層、表層ってオラたちには意味がわかんねえよ! もっとわ

かるように説明してくれ！」

「そうだ！ ちゃんとした説明をしろ！」

「あなたはこの森を守る存在ではなかったのですか！？」

「俺たちはあんたのことをずっと信じてきたのに」

ええい、うるさい。なんだこいつらは。政治家にクレームをつけるプロ市民か。

妖怪たちの訴えはだんだんとただの罵声になっていく。いい加減、俺も頭に血が上ってきた。好き勝手に言いやがって。俺に何の責任がある。俺はただ生きようとしただけだ。だいたい、お前たちが文句を言うべき相手は俺じゃないだろ。お前たちの敵は人間じゃないのか。

『かーーーーーっ！』

俺は能力を使った。それまで怒鳴り声をあげていた妖怪たちは、ぴたりと声を止めた。一斉に俺に視線が集まる。皆が俺に“注目”した。

『ピーピー泣きわめくんじゃねえよ、お前らは生まれたての子ガメか！？ いつまでも六島苞様が守ってくれるからこの森は安心だあ！？ 甘ったれるんじゃねえ！ お前らはいつまで六島苞のすねをかじる気だ！？ 妖怪なんだから！ 強いんだろ！？ だったら、立ち向かえばいいじゃねえか！ 人間どもをブツ潰してやればそれで済む話だろが！』

俺はマイビッグマザーを思い出した。小さな俺たち兄弟を残して

去って行った迂木。俺たちや所詮畜生だ。ボンボンおぼっちゃまじやあるまいし、泣きわめけば誰かが助けてくれるなんて考えること自体が間違ってる。

「で、でも、俺たちだけじゃ人間には勝てない……この森に妖怪が住めるのは、結界があつたからで……」

『六島苞は俺だつて言つただろ。あいつの力は、今、俺の中にある。あいつは結界術を使えたが、俺が使える力は違うのさ』

「葉裏様は、どんな力が使えるのですか！？ もしや、かつての六島苞様を上回るほどの力が……」

『さあな。使つたことないからわからん』

「……ズコー！」「」

なんだお前ら、ノリノリじゃん。

『だが、俺が強力なチカラを持っていることは確かだ。だったら、対策はいくらでも立つ。そうだろ』

妖怪たちは静かに俺の話に耳を傾けていた。俺の説得は無駄ではなかったようだ。徐々に気力を取り戻していく様子がわかる。

『人間なんてとるに足りねえ！俺ら妖怪の底力を見せつけてやるんだよ！ わかつたか、野郎ども！』

「……ウオー……」

こうして、俺はこの森をまとめる妖怪の親玉になった。
って、なんでだよ!?

6話「人化」

ちよつと熱くなりすぎたと思つたら、いつの間にか俺は妖怪のリーダーになつていた。

もともとそんな気はこれっぽっちもなかったのだが、乗りかかった船に乗らされてしまった感が否めない。まあ、六島苞に対する罪悪感も少しはあつたのかもしれない。この力はもともといつのだ。あいつはこの力をこの森を守るために使つていた。それはもちろん打算があつたと思うが。力は持つだけで責任を生む。俺にはこの森の妖怪たちをあおつた責任もあるのだ。その言質くらいきっちり自分で面倒みたいと思うのだ。

はつきり言つて、六島苞の力を奪つたことを後悔なんてしていない。奪われた方が悪いのだ。もともと自分の力ではないからと言って遠慮する気もない。これは紛れもなく、今の俺の力に他ならないのだから。そして、六島苞の背負つてきた物を俺が引き受けなければならぬ義務感なんてものは微塵も感じていない。

正直な話、これはただの傲慢なのかもしれない。俺がちっぽけなカメだったころ、生きること必死でそれ以外のことなんて考えている余裕はなかった。しかし、今はこうして何の因果か有り余るほどの力を手に入れた。その余裕があるから、なんとなく、妖怪のリーダーという重役を引き受けてしまったのだらうか。

まあ、そんな俺の気持ちの話はさておいて、妖怪の森は人間との決戦に向けた準備に入つていた。元人間として、妖怪と殺し合うことにためらいはあるのかという……ない。不思議なものだ。人を殺すことに嫌悪を感じない。善良な人間を進んで殺したいとは思わないが、その程度の感情だ。妖怪にとって、人殺しは種族的な禁忌ではない。むしろ、人間は科学が発達する以前まで妖怪の食糧にされていた。俺はやはり、身も心も妖怪になつてしまつたということ

だろうか。

結果がなくなって森はじわじわと化学物質による汚染を受け始めている。早急に都を襲う作戦を立てなければならぬ。

だが、その前に……

(いつになったら、俺は動けるようになるんだ?)

俺が親玉に就任してから三日、いまだに体を動かすことができない状況が続いている。妖怪たちには、封印が解けたばかりで慣れていないだけだと言いつつ来たが、さすがにそれも限界だろう。

この三日、俺は自分自身の体を徹底的に調べていた。そして、わかったことがいくつもある。

まず、俺が動けない理由。それはそう苦労せずに判明した。原因は甲羅の重さだ。なぜか、俺の甲羅がめちゃくちゃ巨大化している。全長10メートルくらいである。そのせいで重すぎて動けないのだ。

さらに、甲羅の大きさは巨大化したのに、肝心の俺の体そのものは大きくなっていないのである。いや、正確には大きくなっていないわけではない。15センチのミドリガメだったころと比べれば格段に成長している。1メートルちよつとくらいにはなっているような気がする。しかし、それでも甲羅の大きさと比較すれば極小と言わざるを得ない。したがって手足が外に出せない。体がすっぽり甲羅の中に埋もれてしまっている状態なのだ。

なぜ、こんな体になってしまったのか。その原因も自分なりに仮説は立った。

マイビツグマザーは妖怪だった。二百年生き続けて妖怪になった。もし、俺の妖力成長率が迂木と同程度だとすれば、俺は確実に二百年を超えて生きていると計算できる。それほどまでに俺の妖力は成長していた。迂木の体の大きさは軽自動車くらいあったが、俺の体はせいぜい1メートル。確かに体長で言えば迂木の方が大き

かったが、内包する妖力の量では俺がまさる。かつての記憶と照らし合わせて見ても、明らかに俺の妖力の方が大きい。

それは、六島苞の妖力を取り込んだのだから当然だと言われそうだが、少し待ってくれ。さっきの話は六島苞の妖力を抜きにした話である。つまり、俺自身が一つの個体として長い年月を生きただめに得ることができた妖力についてのことだ。

では、六島苞の妖力はどこにいったのかというと、それが問題である。なんと、すべて俺の甲羅にため込まれていた。すなわち、俺の肉体は俺自身が得た妖力で成長したが、俺の甲羅は六島苞の妖力を詰め込まれた結果、ぱんぱんに膨れ上がってしまった、というわけである。そのため、肉体と甲羅との間の成長に不均等が生じたのだ。

この不均等を解決するため方法は一つしか思い浮かばない。甲羅の妖力を俺の肉体に移し替えるのだ。そうすることで甲羅は縮小し、ちょうどいいサイズにもどる。

六島苞の妖力を自分の体に取り込むことについては問題なかった。長い間くっついていたせい、取り込んでも違和感はない。しかし、大変だったのはその量である。とにかく、甲羅の中の妖力が多い。どれだけ肉体に移し替えても小さくならない。いくら拒絶反応が出ないからと言っても、常時輸血状態ではさすがに気持ち悪くなってくる。しかも、このエネルギーは熱力学の法則に忠実なようで、エネルギーが高い方から低い方へと移動しやすい性質があった。そのため、気を抜くとドンドコもっさり妖力を甲羅から肉体へ送りつけられてしまう。妖力の移動は細心の注意を払って少しずつ行わなければならなかった。

「なんだか、葉裏様の体が小さくなっていないか？」

「え？ た、確かに心なしか縮んだ気がする……葉裏様、いかがなさいましたか！？」

『だ、大丈夫だ、気にするな……ゲフツ!』

その後も順調に移し替えは進んだ。確実に甲羅の大きさは小さくなっていく。だが、なぜか俺の肉体の方はどれだけ妖力を吸っても肥大化しなかった。妖力の多さが体長と比例しているわけではないのか。

どんどん小さくなる俺を見て、妖怪たちが心配している。とりあえず、動きやすいように姿を最適化していると言っておいた。

そして七日目。俺はついに日の光を拝むことになる。

「う、うっ……」

「葉裏様!」

妖力の摂りすぎで頭がくらくらする。俺の周りには妖怪たちが集まっているようだ。

「なんとか、外に出られたみたいだな……あれ? 俺、人語を話せるぞ?」

カメだったときは当然、人の言葉など話せなかったが、妖怪化した影響だろうか、ちゃんと言葉を発音できる。まあ、喋れて困ることはない。

「どうだ、これが今まで封印されていた俺の真の姿だ!」

今の俺は、きっとマイビッグマザーのように美しいカメにバージョンアップしているはずだ。妖怪たちもあまりの神々しさに絶句して……

「「「……」」」

絶句している。なんだ？ 思っていた反応と違う。俺の姿はどうなっているんだ？

少しずつ光に慣れてきた目で、自分の姿を確認する。甲羅は暗緑色で宝石のように輝き、手足は真っ白くすべすべでぷにぷにした肌である。

「えっ！？ ちょっと待て！」

俺は二足歩行で駆け出し、近くの水辺へと向かう。そして、水面に映る自分をその目で見た。

少女だ。美少女がいる。甲羅と同じ深い緑色の髪に瞳で、整った顔立ち。肌は陶器のように白くなめらか。そして、何より目立つのは甲羅だ。体がすっぽり甲羅の中に収まっており、それぞれの穴から頭と手足が出ている状態、つまり、ガメラの着ぐるみでも着ているかのような格好なのだ。

「なんじゃこりゃあああああ！？」

俺の精神はかつてない大ダメージを受けてしまった。

7話「戦いどころじゃない」

整理しよう。

聞くところによると、長い年月を生き、妖力が高まった妖怪は元の姿とは異なる形へと体を変化させることが多いらしい。これは自分の種族の普遍的な形状という範囲に固定されていた肉体と、妖力によって強靱になった精神の間で乖離が生じ、その違いを中和するために起こる現象のようだ。人型に体が変わる者は割と多い。だから、俺の体が人間っぽくなったことはそう珍しいことではない。

どうして、美少女に変化したのか気になったが、そういえば俺は雌ガメだったし、さらに言えば、実は前世でも子ども頃はこんな容姿をしていた。小さいころはよく女と間違われたものだ。もうとてつもなく昔の記憶なので、すっかり忘れていた。

そこまではいい。納得できる。問題は、俺が完全に人化しなかったということだ。甲羅が残っている。非常に間抜け。

「だあああ！　ちくしょおおお！」

「葉裏様、落ちついてください！」

想像してほしい。幼い少女がカメの甲羅をすっぽり着用している姿を。かっこ悪すぎる。すごくかっこ悪い！　俺はどうしても我慢ならなかった。どうして、100%人間か、100%カメの体になかったのだ。なぜ混ぜたし。そんなハイブリッドは要らない。そういえば、前世の世界のアメコミに、忍者で亀のミュータントが登場する作品があった。あれの中途半端なコスプレ状態である。

さらに、この甲羅、クソ重いのである。ものすっごい肩が凝る。俺がプレスをきめると、地面が陥没する。軽く歩くだけでズシンズ

シンと音がする。少女姿の俺がトコトコ歩くその擬音がズシンズシンだぞ。能力なんて使わなくても視線を一人占めだ。そんな物を背負って肩が凝るくらいくらいですむのだから、俺も強くはなっていないのだろう。しかし、それとこれとは話が別。俺はこの甲羅をなんとかできないか必死に模索した。

だが、うまくいかなかった。甲羅は背中側と腹側の二つのパーツがあり、どうにか分離できないか試してみたが、だめだ。この甲羅も体の一部である。引っぺがすことはできそうにない。甲羅の妖力をもっと吸い取って小さくできないか試してみたが、一向に変化がない。それに俺の現時点での肉体の容量では、これ以上妖力の移し替えはできそうになかった。妖力の飽和状態で吐きそうになる。それ已然の問題として、甲羅が小さくなったところで取り外すことができないければ意味がない。まったくの無駄骨だった。

しかし、俺は諦めていない。何が何でもこの甲羅をはずしてみせる。それから、俺は人間との戦いなどそっちのけで、甲羅との戦いを繰り広げることになる。

検証その1：高所からの落下

「いくぜっ！ おらああああ！」

俺は高い崖の上から躊躇することなく飛び降りる。一瞬の浮遊感。そして、急速落下。地面に激突する前に、手足と頭を甲羅の中に引っ込める。ちなみに、どういうわけか甲羅の中は質量保存の法則を無視するかのような無限スペースになっている。どう考えても人体では構造上不可能な動きでにゅるんと甲羅の中にもぐりこむことができた。手に物を持ったままでも中に入れる。しかも、その物を甲羅の中に入れておきしておくことができるのだ。まるで、四次元ポケット。便利である。

そして、崖から飛び降り甲羅の中に避難した俺は、見事崖下に着

地する。すさまじい地響きがおき、隕石でも落下したかのようなクレーターができる。だが、甲羅は無傷。

検証その2：崖上から岩を落とす。

「こいやっ！ おらああああ！」

今度は妖怪たちに協力してもらい、崖の上から巨大な岩を転がして落してもらった。その崖の下に俺がいるという寸法さ。

岩は俺の甲羅に直撃した。殻の中に引っ込んでいた俺には、岩が落ちる音は聞こえたが、直撃を受けたというのに何の衝撃も感じない。むしろ、生き埋めになったことの方がこまったが、その岩は片手で持ち上げることができたので、無事脱出できた。甲羅に比べれば断然軽い。

検証その3：火あぶり

「やけやっ！ おらああああ！」

妖怪の中には、妖術によって火を起こせる奴が何匹かいた。そいつらにありったけの炎を出してもらい、甲羅を焼く。これがほんとの甲羅干しだ。

甲羅の中にいる俺はまったく熱さを感じなかった。10分くらいこんがり焼かれたが、やはり無傷。先に妖怪たちの妖力の方が尽きた。俺の背中のマイホームは、安心の耐火設計のようである。

他にも様々な苦行を自らに科したが、甲羅の防御力はそのことごとくに耐えきった。六島苞の妖力が詰め込まれた結果、妖力が結晶化して金属をも超える硬度になってしまったみたいだ。美しい緑色の光沢は色褪せることがない。

ところで、妖怪たちは俺のマゾ苦行を見て、なぜか士気があがっ

ている。検証によって様々な攻撃をことごとく跳ね返した行為は、俺の力を見せつけるパフォーマンスになったようである。事実、防御面に関しては今のところ不安はない。攻撃面でも以前に増してかなり強化されている。少女の見た目からは想像もつかないほどの怪力を発揮できる。この森には俺より強い妖怪はいないようだった。

尊敬のまなざしで見られるのは面映ゆいところだが、なんにせよ士気が高まったのはいいことである。甲羅については、現状では手出しできそうにない。そろそろ、人間たちとの戦いに備えて本腰を入れていくか。だが、俺は絶対に諦めない。いつか、この甲羅を脱ぎ捨ててやる！

8話「妖怪四天王」

人化してから、俺は衣服を着ていない。はだかんぼうである。甲羅のせいで着物を着ることができないのだ。まあ、妖怪なんて大半が素っ裸の連中であり、別におかしくはない。甲羅のせいで露出している部分は頭部と四肢だけだし。だが、立ち上がると常にガニ股猫背の姿勢を強要されるのはいただけない。まるで四股を踏む相撲取りのごとくである。すべて甲羅のせいだ。忌々しい奴め。二足歩行は早く移動できて便利だが、甲羅の重さが尋常でないので長時間立ちっぱなしでいるのはきつい。なので、いつもは寝っ転がっている。

そのうち、寝たまま移動する手段はないものかと考えつき、手足をひっこめた状態で転がりながら走る“甲羅ローリング走法”を編み出した。坂の上から転がると、障害物をなぎ倒しながら進むことができ、爽快である。攻防一体のなかなか使える技だ。

それはさておき、人間との戦について。とりあえず、情報を集めることが先決だ。人間の都がどのような防備を持っているのか知らないとは掛けることもできない。鳥型の妖怪を編成し、偵察部隊を作ってみた。彼らが集めた情報によると、都は“シールド”と呼ばれるもので守られているらしい。これは結界のようなあやかしの技ではなく、科学的に作られたエネルギーフィールドであるようだ。科学と妖術の相性は悪い。物理法則によって徹底的に理論武装された科学技術は、妖術のようななんだかわからない曖昧な力を強く拒絶する。妖術でこのシールドを破壊することは難しいという結論に至った。

シールドを破るためには、物理的な方法で攻撃するしかない。幸いにも、シールドは対妖術に重点を置かれた設計になっているのか、強い衝撃に対してはそこまでの耐久力を持たない。なぜ、シールド

の性質がわかるのかというと、以前、森に入ってきた人間が個人用の簡易シールド形成装置を装備していたことがあつたらしく、そのときの経験から推測できたという。力押しに弱いようだ。

人間側は妖術さえ無効化できれば、妖怪など恐るるに足りないと思っているようだ。まあ、その考え方はもつともである。妖術を封じられれば、あと俺たちに残された手段といえば怪力くらいのものしかない。例外的に、『程度の力』に関しては、シールドの防御効果も薄いという。だが、能力持ちは数が少ない。俺も含めてこの森に、5匹くらいしかいなかった。それに、必ずしも戦闘に役立つ力ばかりではない。俺みたいにな。

となると、後は兵の数を集めて正面突破するくらいしか方法はなわけだ。人間側もその手は十分に予想できるので、対策もされているに違いない。詰んでないか、これ？

「うぬー、だめだ。うまくいかない」

今、俺は人間に対抗するための兵器が作れないかと模索している。といつても、この森にある資源と言えば木材しかない。さすがに鋳脈が都合よくこの地にあるということもなかったし、砂鉄があるとしてもそこから精製するなんてやり方も俺は知らない。木でなんとかするしかない。

とりあえず、俺は投石機が作れないか試案してみた。だが、俺は投石機の詳しい構造なんて知らない。なんとなく形は思い浮かぶがそれを現物にすることは話が別だ。まずは小さな模型を作っているところだ。それが完成したら、本格的な製作に取り掛かるつもりである。

しかし、うまくいかない。どうやって作ればいいんだ？

「葉裏様、何を作っているのですか？」

「ん？ これは投石機といってな。大きな岩を遠くに飛ばすための道具だ。これをたくさん作れば、遠くからシールドを破壊することができるかもしれないだろ？」

「ほう、そのような道具があるとは知りませんでした」

「いや、俺も詳しく知らないから、今試算中なんだ。というか、煮詰まっている。手を貸してくれ」

そう言ってみたが、妖怪は難しそうな顔をするばかりだ。

「葉裏様、まことに言いにくいのでありますが、その投石機というものは人間の作る道具ではありませんか？」

「確かに、そうだな。それがどうした？」

「“道具を作る力”は人間の領分でございます。我々妖怪には、複雑な人間の道具を作ることはできません」

人間と同程度の思考力を持っていれば道具の作成くらいいけないと思っていたが、どうも違うらしい。妖怪は種族的にモノを作るといふ行為が苦手なのだそうだ。実におかしな感覚だが、言われてみれば確かにも思う節がある。かれこれ数日は投石機の製作に頭を悩ませていたが、一向に良い案が浮かばないのだ。これは妖怪の性分なのか、それとも俺の頭がアホなのか。

妖怪は便利な道具を手に入れようと思ったら、人間から奪うことでしか得られない。中には鍛冶が行える妖怪などもいるそうだが、それでも都のような科学技術には到底及ばない文明レベルの品である。この妖怪の不器用さが、人間にすみかを追われる敗因になったのだろう。

これでは、仮に投石機の設計図が完成したとしても、妖怪たちを動員して量産させることなんて到底できそうにない。投石機は諦めるしかないか。

「それだと、本当に正面突破しか他に方法がなくなつたな。援軍の要請はどうなつた？」

この森にいる妖怪の数はせいぜい1500匹程度である。それに対して、人間の都にはその規模から見ても1万人くらいはいると思われる。圧倒的に数が足りない。妖怪一匹の強さは容易に人間一人を上回るが、それにしたつて少なすぎる。それに、人間には高度な文明によつて生み出された兵器がある。武装した兵士なら、十分に妖怪とも渡り合える。そこで、援軍の要請は急務だつた。

求めた先は、妖怪四天王と呼ばれる連中である。なんか、逆に弱そうに聞こえるがそんなことはないらしい。六島苞もその一匹だつたとか。後の三匹も強豪揃いのようで、この森のようにそれぞれが拠点を構え、多くの妖怪を従えているそうだ。今回の戦いに協力してくれるかどうか、打診してみた。

「はい、それが……色よい返事をいただけしたのは、東の猪々獄様のみでございました」

「まあ、そんなもんか」

妖怪だから人間との一大決戦をやると言えば、血の気の多い連中が集まるかと思つたのだが、現実は厳しい。一匹集まつただけでもよかつたと言える。はたして、猪々獄とやらがどれほどの軍勢をひきつれて来てくれるのか、期待してまつしかないだろう。

9話「気になるアイツはイカしたブタ面」

さて、それからしばらくした後、援軍がこの森に到着した。

その様子は圧巻だった。なんとその数、5000匹である。百鬼夜行どころの騒ぎではない。地を埋め尽くさんばかりの妖怪たちがこの森へとやってきたのだ。正直、ここまで数をそろえてくれるとは思っていなかった。嬉しい誤算である。

遙か東の地から旅をしてきた彼らを、森で受け入れ、休ませた。

妖怪の森はかつないほどのにぎわいを見せている。これだけの数が集まったということは、おそらく人間に知られているだろう。5000もの妖怪の行軍を隠すことなんてできない。軍を動かす以上、しかたのないことだ。六島苞が死んだことは人間側も知っているはずなので、拠点を失う危険を感じた妖怪たちが決起することは、向こうも予測していた可能性だろう。人間側も、妖怪たちが吊い合戦に来ると踏んで、戦いに備えていると考えていた方がよさそうだ。

俺は森の深部、六島苞の切り株が残る沢にいた。協力者である東の妖怪四天王、猪々獄に挨拶をするためだ。これだけの妖怪を引き連れて来てくれた彼には、感謝しなければならぬ。到着からほどなくして、猪々獄は現れた。名前からなんとなく予想がついていたが、ブタの妖怪である。

「よく来てくれた、猪々獄よ。俺はこの森をまとめる妖怪、葉裏だ。このたびの戦いに手を貸してくれることを深く感謝する」

「……お前は誰だブヒ？ この森の長は北の妖怪四天王、六島苞ではなかったのかブヒ？」

猪々獄の見た目は、猪八戒のような感じと言えばわかるだろうか。

人間とブタを掛け合わせたような容姿をしている。背中には5本の
大槍を担いでいた。腹周りはだぶついているが、腕の筋肉はモリモ
リだ。しかも、その体格はかなりのもので、背は5メートル以上あ
りそうである。見かけ倒しではなく、妖力もすごい。さすがは四天
王を名乗るだけのことはあり、六島苞とタメを張るくらいの実力が
あると一目でわかる。妖力の多さで言えば、俺の方が勝っているよ
うだが、戦闘力で言えばどちらが上かわからない。
でも、語尾にブヒをつけるのはやめてほしい。

「六島苞は俺の異称だ。これからは葉裏と呼んでくれ」

「ふん、クソでかい木の妖怪だと聞いていたが、実際会ってみれ
ば、なんともまあちびっこい亀妖怪だブヒ。こりゃあ、人間にやら
れるわけだ！ ブヒヒヒヒヒ！」

猪々獄の挑発とも取れる軽口に、援軍の妖怪たちが合わせて笑い
だす。それを見たこの森の妖怪たちは、自分たちの親玉を馬鹿にさ
れ、怒り心頭といった表情になっている。ここで喧嘩させれば土気
にも影響がでる。俺は怒り出す妖怪をなだめた。

「まあ、そう言うな。これからともに人間と戦おうと言うのだ。
仲良くやっていこうじゃないか」

「人間をぶつ殺すことに関しちゃ、異論はねえブヒ。そのために
俺様のかわいい手下どもをあつめてやったんだからな。だが、戦の
前にはつきりさせておきたいことがあるブヒ。それは、俺様とお前、
どちらが大将にふさわしいか、ということだ」

なるほど、それはもつともだ。トップが二人いたのでは、指揮系
統が混乱する。混合軍を形成する以上、どちらの長の命令が優先さ

れるか決めておかないといけない。

猪々獄は、背中から槍を一本抜きとり、ぶんぶんと振り回してその槍先を俺に向けた。

「俺様と勝負しろブヒ！ 勝った方がこの軍の指揮をとる。どうだ？」

俺としては、指揮権を猪々獄に譲ってやってもいいと思っているが、この戦闘狂にそんな話は通じないだろう。それにここであっさり負けを認めると、それはそれでこの森にもといた妖怪たちの士気が下がりそうだしな。

「いいだろう。受けて立つ！」

「ブツヒツヒ！ そうこなくっちゃなあ。おら、お前は武器を構えなくていいのか？」

武器ねえ。正直、この森で調達できる武器なんて石器の斧くらいしかない。こん棒は俺の筋力をフルパワーで使って振ると一瞬で壊れてしまう。石器はそれよりも若干マシといった程度なので、使えるものがない。素手で殴った方がまだいい。

「俺の武器はこの体一つさ！」

「上等だブヒ！ 俺様は東の妖怪四天王、猪々獄！ いざ、尋常に勝負っ！」

名乗りを終えた猪々獄は剛速の槍を突きだしてきた。はい！俺は反応できずにモロに突きを食らってしまった。俺の腹の甲羅装甲がその攻撃を防ぐが、突きの威力はすさまじく、体が後方に吹き

飛ばされる。

「ぐっうう！　なんて衝撃だ……！」

槍を食らった腹のあたりがジンジンと痛む。初めて肉体にダメージを通された。相変わらず甲羅に傷はついていないが、衝撃が内部まで届いている。このブタ、やりおる。

「……驚いたブヒ。まさか俺様の槍を無傷で防ぐとは！　それに、その体の重さ、はんぱねえブヒ。俺様の手の方が痺れちまったブヒ。妖怪四天王の名は伊達じゃねえってことか。ブヒヒヒヒヒ！　こいつは面白くなってきたブヒ！」

今度は俺の方から仕掛ける。さっきは猪々獄の突きに対応できなかったが、それは俺の経験不足が原因であって、やろうと思えば素早く動ける。俺は猪々獄の懐に踏み込み、拳を放つ。

「くらえ！」

「はあ！　なんだその攻撃は！　遅すぎるブヒ！」

「なに！？」

脂肪でたぶたぶの巨体のくせに、こいつは俺の拳を難なくかわした。確実に俺より速く動ける。それを認めなければならぬ。拳を突きだした俺の体勢は隙だらけだ。そこに鋭い槍が連続して襲いかかってくる。

「ちいいいっ！」

俺は甲羅ガードで猛攻を耐える。ぐおう！ モーレツウ！

甲羅で防いでも自転車とぶつかったくらいの衝撃は通る。地味に痛い。

パンチが届かないとなれば、他の手で攻めなくては。俺は妖力弾を放った。迂木が使っていた技と同じものだ。妖力をたんまりもっている今の俺なら何発でも打ち出すことができる。妖力弾は確かに速い。しかし、威力が弱かった。猪々獄に当たっても全然ダメージを与えた様子はない。相手も高い妖力を持っているので、当たる直前に相殺されているのだろう。それにほとんど避けられている。

「ふぬっ！ その甲羅は厄介だブヒ。ならば！ 甲羅以外の場所を狙うブヒ！」

今度は甲羅から露出している手足を狙ってきた。ま、当然だよな。こちらもその手は読んでいた。右腕目がけて突きだされた槍。俺は右腕を甲羅に収納する。

「な、なんだブヒ！？」

「はっはっは！ そう簡単にやられるか！」

猪々獄は予想外の動きをされたことに驚いている。そこにわずかな隙ができた。今だ！

俺は甲羅の中に入れていた木の実を取り出す。これは、散歩中に見つけた物だ。蜜柑のような見た目をしているので、食べられるのかと思つて少ししかじつてみたところ、壮絶な辛さに悶えることになった。これは何かの武器に使えるかもしれないと思つて甲羅の中に大量に入れておいたのだ。

それを空中に放り、妖力弾で打ち抜いて炸裂させた。

「なんだこれは、うわあああ！ 目がしみるうつつ！」

果汁が周囲に飛び散り、猪々獄の目に入った。俺は頭を甲羅に引っ込めて回避した。よし、この隙に攻撃だ。

頭を収納しているので前が見えないが、前方に感じる猪々獄の妖力はわかるので位置は特定できる。そこ目がけて渾身の蹴りを入れる。

「ぐふうつ！」

やわらかい肉を蹴る感触がした。頭を出すと、腹を押さえてよめく猪々獄がいた。追撃しようとする、さっと後ろに飛び退ってかわされる。そう何度も奇襲は通用しないか。

「はあああ！ やってくれたな、子亀妖怪！ もう容赦はせんブヒ！」

今の一撃は効果があったようだが、猪々獄を倒すには至らなかった。タフな奴だ。目潰しのせいで涙目になって見えない視界もすぐに回復するだろう。

「当たり前だ！ 最初から容赦なんかすんじゃねえ！ 全力で来い！」

これは長期戦になりそうだな。

10話「バトルの末に」

それから戦いは三日続いた。まして。

猪々獄は執拗に俺の露出部を狙ってくるので、俺は甲羅に完全避難し、甲羅ローリング走法で戦った。手足を引っ込めているので、殴る蹴るの暴行ができない。転がって体当たりしても避けられるのが目に見えているので、ちまちまと妖力弾を撃って攻撃した。たまに激辛蜜柑攻撃を織り交ぜたりしたのだが、二度も通用する相手ではなかった。

その攻防が三日も続いたのである。観戦していた妖怪たちは、最初の一日は固唾をのんで見守っていたが、今ではこの泥仕合の有様に呆れて退屈しているようだ。

戦いは俺が守りで猪々獄が攻めという形で延々と続いた。それにしても、猪々獄のやつ、なんて諦めが悪いんだ。疲労困憊でふうふう息をつきながらも、まったく手を休めることがない。5本あった槍もすでに4本が苛烈な攻撃の負荷に耐えきれず折れている。俺は甲羅に閉じこもって妖力弾を撃ち続けられただけなので、楽なものだ。この際なので、甲羅ローリング走法を練習してみた。今では自由自在にブイブイいわせることができる。さすがに猪々獄の動きはそれより速いので、攻撃は当てられてしまうのだが、うまい衝撃の受け流し方がわかってきたので、今では食らってもそんなに痛くない。

「なあ、猪々獄。もうそろそろ俺の勝ちってことでいいじゃないか？」

「いいや！ はあ、ふう、まだまだブヒ！ まだ終わらんブヒ！
ふひー！」

「だったらお前の勝ちってことで、もういいからさ」

「黙れブヒ！ 俺様は負けないブヒ！ 今に見ている！ こんな甲羅、粉々に砕いてやるブヒー！」

パキン！

そのとき、何かが割れる音がした。最後の一本の槍も折れてしまったのか。

いや、違う。

「ちょよ、ちょっと待ってくれ、猪々獄！」

俺は甲羅ローリング走法で距離を取り、頭と手足を外に出した。猪々獄の方を見れば、その手に持つ槍はまだ折れていない。では、さっきの音は何だったのか、恐る恐る甲羅を確認する。

猪々獄の攻撃に耐え続けた甲羅は、以前と変わらぬ傷一つない美しさで光っている。だが、背中側と腹側の二つのパーツのつなぎ目に違和感があった。そこに手を当て、思いっきり引っ張る。

パカア！

「……開いた……」

まるでドアでも開くようにすなりと動いた。どさりと甲羅が俺の背中から滑り落ちる。俺は自分の体に目をやる。男だったころいた相棒はなくなっており、胸はほんのりとふくらんでいる。いや、そんなことより俺はその少女のおなかを見ることができたことに歓喜した。それはつまり、俺の苦しみからの解放を意味する。

「とれたーーーーー！」

天に向かって手を広げながら嬉しさのあまり絶叫した。全裸で。これで、もうかっこ悪くない。普通の人間と同じ姿だ。普通って、すばらしい！

「ぶ、ブヒヒヒ！　とうとう俺様の攻撃がお前の自慢の甲羅を砕いたようだな！　もうお前を守る盾はないぞ！　くらえええ！」

俺が幸せをかみしめていると、猪々獄が槍を突きだしてきた。なんて無粋な奴だ。しかし、今の俺は確かに防御力が落ちている。あんなぶつとい槍を食らったら、さすがにただではすまないだろう。猪々獄が放つ渾身の一撃。俺はなんとかそれをかわそうと横に飛ぶ。

「……………！　な、なんだ！？」

ぎりぎりで槍をかわし、牽制の拳を繰りだそうと思っていた。だが、自分の思惑とはまったく異なる事態が起きていた。回避のために行った横っ跳びによって、十メートルほど移動していたのだ。

（体が軽い……………！）

どういうわけか、体が羽のように軽い。そうか、甲羅を脱ぎ捨てたからだ。甲羅分のウエイトがなくなった今、俺は以前以上のスピードで動くことができる！

俺と猪々獄のスピードは互角になった。しかも、相手は疲労している。勝機が見えた。妖力弾で猪々獄を足止めし、その隙に素早く後ろへ回り込む。

「これで終わりだ！」

「ぐぼう！ へばぶっ！ ぐあああああ！」

俺のラツシユが猪々獄をとらえた。そして、長きにわたる戦いにようやく決着がついたのであった。

* * *

こうして、妖怪軍の最高指揮官は俺に決まった。猪々獄は副指揮官である。いかに妖怪四天王の一匹といえども、三日の死闘の疲労は色濃く、戦いの後はダウンして動けなくなっていた。

それから、甲羅について調べてみた。冷静になって考えると、もしかしてブツ壊れてしまったのではないかと不安になったが、そんなことはなかった。なぜか俺の体と分離しても妖力を失わずにいる。背中側と腹側のパーツが、二つにカパツと開く仕組みは便利なもので、これにより、甲羅は着脱可能になったのだ。甲羅の中を覗き込んで見たが、光を当てても真っ暗で何も見えない。手を入れると、ずぶずぶとどこまでも沈んでいく。中に何か入っていたので取り出してみると、激辛蜜柑だった。腐っていた。そつと中にもどした。どうなってるんだ、この甲羅。

俺は甲羅を抱えて沢の水の中に入った。やっぱり甲羅がないと動きやすい。肩も凝らない。実に気分爽快である。体を洗っていると、改めて女になったのだなあと実感した。だが、特に感慨はない。周りには妖怪たちがわんさかいるのだが、その中で全裸で水浴びしても、羞恥心など起こらなかった。姿形は人間に似ているが、今の俺は似て非なる者なのだ。前世の頃の俺の感覚と、今の俺の感覚ではかなり違いが出ているのかもしれない。自分では、はっきりとわからないのだが。

全裸森ガールとなった俺が、仁王立ちで体を乾かしていると、猪

々獄がやってきた。

「おう、体はもう大丈夫なのか？」

「ブヒヒヒ！ 俺様はそんなにやわじゃねえブヒ。それにしても、まさかその甲羅が脱げるとは思わなかったブヒ。俺様の負けだな。お前、強えじゃないか。見なおしたブヒ」

猪々獄にさつきまでのトゲはない。自分が認めた相手には心を開くタイプなのだろう。戦いを乗り越えて友情が深まるというやつか。

「いや、違うな。惚れなおした、言った方がいいかもしれんブヒ」

「は？」

「俺の女になれブヒ。俺の子どもを孕めブヒ」

美少女とブタの化け物のカップリングって、それなんてエロゲ。ドン引きだよ。もちろん、丁重にお断りした。拳を鳴らしながら、丁重に、な。

11話「人妖大戦」

いよいよ、人間たちとの決戦の日が来た。俺たちは妖怪の大軍を率いて都を目指す。

俺と猪々獄はその先頭に立っていた。俺も妖怪だ。後ろでふんぞり返っている気はない。

「葉裏」

「なんだ？」

「この戦いが終わったら俺様と結婚してくれブヒ」

「嫌だ。あと、そのセリフは死亡フラグっぽいぞ」

猪々獄は、あれからずっと俺に求婚してくる。うざい。

「それより、昨日話した作戦はうまくいきそうか？」

「ああ、あれか！ まったく、葉裏は面白いことを考えるブヒ！」

妖怪軍の作戦は突撃の一択である。それ以外にやりようがない。シールドは360度死角なく都を覆い尽くしている。戦力を分散させてシールドの突破に手間取るより、一か所穴を開けてそこからなだれ込む方がいいだろうと、先日会議で決めた。人間側は1万の数がいるが、そのすべてが兵士というわけではないはずだ。妖怪側は6500。ぎりぎりなんとかするのではないかという目算だ。

ところで、俺は昨日、猪々獄の能力について話を聞いた。猪々獄

は『槍を遠くまで投げる程度の能力』を持っているという。その能力を聞いて、少し思いついた作戦があった。名付けて『槍と一緒にかつとびましよう作戦』。猪々獄の大槍に妖怪をくりつけ、投げてもらう。すると、あつという間に都のシールドを突破して中に侵入できるのではないかという作戦だ。妖怪ミサイルである。

結論からして、それは難しいと言われた。投げた槍はすさまじいスピードで飛ぶので、並みの妖怪では耐えられず、目的地に到着と同時ににはじけとび、死んでしまいうらしい。しかし、例外的に並みの妖怪にとどまらない防御力をもったタフガールがいる。俺だ。俺ならおそらく着地の衝撃にも耐えられるし、孤立しても自分の力できるとかやっつけていけるだろう。そのため、俺の背中にはいつでも投げてもらえるように、すでに槍がくりつけられている。

森から出て、都を前にする平野で俺たちは一時停止した。都の方から何かが近づいて来る。こちらに向けて無機質な声で何か言っている。

『警告します。妖怪たちは直ちに引き返しなさい。これ以上、都市に接近した場合、武力を行使して対処します』

いくつもの銀色の塊がこちらに向かって走ってくる。とうとう、向こうからも兵が放たれた。躊躇してなどいられない。俺は声を張り上げた。

「全員、突撃いいいい！！！」

オタケビをあげて妖怪たちが走りだす。銀色の物体はロボットだった。ロボット兵だ。人間たちはこんな物を作り出していたのか。

俺は焦った。確かにこんなSFチックな科学技術を持っている奴らだ。ロボット兵くらいいてもおかしくはなかった。だが、もはや引き返すことなどできない。戦いは始まった。

ロボット兵は近づいてきた妖怪たちに向けて銃を撃つ。妖怪はひるまなかった。ちょっとやそつと腕とか足とかもげても平気な連中である。鉛玉を数発ブチ込まれたくらいじゃ死なない。俺と猪々獄は猛然とロボット兵の只中へと飛び込んでいった。

そこでわかったが、このロボット兵は銃を撃つしか能がない。接近戦に入れば木偶の坊も同然だった。

「ブツヒヒヒヒ！ まったく手ごたえのない奴らだブヒ！」

俺が妖力弾を乱射し、猪々獄が槍を一振りするだけでゴミのようにロボット兵は壊されていく。これなら他の妖怪に任せても大丈夫だな。

「猪々獄！ あの作戦、いくぜ！」

「そうか、ここは俺様たちに任せるブヒ！」

猪々獄が俺の背中の中の槍をつかむ。『槍と一緒にかつとびましょう作戦』のお披露目だ。

「うぐおおおお！？ お、おもいいい！！！」

「しっかりしろ、猪々獄！ それでも妖怪四天王か！」

「ふぬぐぐぐぐうっ！」

なんとか俺を担ぎあげた猪々獄は、ゆっくりと助走を始める。ずしんずしんと地面にくつきり足跡をつけながら、スピードをあげていく。前に立ちふさがるロボット兵は猪々獄の突進を止めるすべなどなかった。

「それじゃあ、俺は一足先に行ってくるぜ」

「いづくぞおおおおっ！ はあああっ！ ふんぐっ！」

槍が猪々獄の手を離れた。その瞬間、周囲の光景が急速に後ろに飛び去っていく。これは風速で皮膚がはがれそうだ。俺はたまらず甲羅に隠れた。

甲羅の中にはゴオオオという風の音しかなくなる。そして、何かにブチあつたような衝突音。これがシールドだろうか。音はすぐに止んだ。おそらく、シールドを突破したのだ。槍のスピードはさつきより落ちた気がしたが、それでもまだ速い。そして、さっきのシールドにぶつかったときとは比較にならないほどの音が甲羅の中に響き渡った。耳が痛い。

これは無事に着地できたということか。俺は外に顔をだそうとした。だが、目の前にある壁が邪魔して頭が出せない。どうやら、頭から地面に激突してめり込んでしまったようである。しかも、俺がめり込んだ先は何だか金属質な構造物のようで、がっちりと穴に甲羅がはまり込み、抜け出すことができない。ど、どうすれば。

「なんだこれは！ どこから入ってきた!？」

やべ、見つかった。

「妖怪の仕業でしょうか。まさか、シールドを突破して攻撃を与えてくるとは」

「ロケットの打ち上げは間もなく行われる。万が一に備えて警備を強化しろ」

「はっ！」

俺の姿は謎の物体として捉えられたらしく、特に警戒もなく、人間たちは立ち去っていた。攻撃に使用された武器としか思われなかったようだ。まあ、まさかこんな壁にめり込んだ意味不明の物体を妖怪とは思わないか。

それにしても、ロケットってなんだ？ 人間たちは何をしようとしているのだ？

『全妖怪どもに告げる』

そのとき、大きな声が響き渡った。さっきのロボットのような無機質な声ではなく、肉声を拡声器で大きくしたような響きである。

『我ら人間は、穢れきった地上を捨て、新天地に人間の文明を築く。これより、我らは月の世界へと旅立つ』

穢れきった地上？ 月の世界？ 何のことだ。

『さらばだ！ 低俗なる妖怪どもよ！』

そして、大地が揺れた。轟音とともに振動は大きく膨れ上がっていく。

『さらば、地球よ！ いざ行かん、月の世界へ！』

まさか、いや、そんな馬鹿な。人間は宇宙へ向かおうとしているのか！？

12話「宇宙に行ったカメ」

超展開すぎる。なんで宇宙。人間がそんな暴挙に出ることなど、予想できるはずがない。最初から宇宙に逃げることを計画していたのか。だから、あんな足止めにはかならないようなロボット兵しか前線に出さなかったのだ。結局、戦にすらならないまま妖怪と人間の戦争は終わった。

そして、俺は今、宇宙にいる。地球は本当に青かった。もはや茫然とするしかない。

あの大地震はロケットの発射音だった。思いのほか甲羅がめり込んでしまった俺は、死に物狂いで脱出を試みた。だが、時すでに遅し。なんとか抜けだしたときはすでに、地上は遥か眼下に小さく遠ざかっていた。俺が槍に乗って突き刺さった場所は、都市を丸ごと一つ運び出す超巨大ロケットの一部だったのだ。

今、自分がロケットのどの部分にいるのか見当がつかないが、外装の狭い隙間にもぐりこんで振り落とされないように必死に耐えている。大気はほとんどなくなっており、息苦しくてしかたがない。このまま宇宙空間に出たら窒息する。内部に行けば空気があるのだろうが、入口がどこかわからない。普通に入口から入っても、壊して中に入っても、人間に見つかるとは必至である。さすがにこの逃げ場のない状況で人間に捕まったら俺でもおしまいだ。

ロケットの飛行速度はとんでもない。考える間もなく宇宙空間に出てしまった。息ができない。苦しい。もうそろそろ死ぬんじゃないかという苦しさが1分続き、5分続き、10分続き……

（あれ？ 意外と長くもってるな）

息苦しさはあれど、いつまで経っても死ぬ心配がない。まあ、俺

は妖怪なので生物の範疇を超えているのかもしれない。現に30分くらい経過したあたりから、呼吸の必要性を感じなくなった。妖怪は息をしなくても死なないらしい。

さて、俺はこれからどうすればいいのだろう。ここでロケットをつかむ手を放せばスペースデブリの仲間入りだ。いや、地球の重力にひっぱられて落下するだろう。摩擦で燃え尽きて死ぬ。甲羅の中に入っていれば持ちこたえるかもしれないが、試す勇氣はない。

したがって、人間と一緒に月まで同行するしかない。というか、月なんて不毛の土地だろう。どうやって開拓する気だ。正気とは思えない。この人類はかなりSF色が強めだから、オーバーテクノロジーでなんとかするのかもしれないが、わざわざ地球を捨ててまで月に行くことになんの意味がある。確か、穢れがどうか言っていたが、意味がわからない。俺たち妖怪からしてみれば、汚染物質を垂れ流す人間の方がよっぽど穢れの元凶じみている。

ロケットは地球の衛星軌道に乗ると、そこでいったんエンジンを停止させた。確か、この軌道上を動く運動を利用して燃料の節約をするんだっけ。すると、またもやロケットが大きく振動を始める。今度は何をやる気だ。

しばらくしてわかったが、ロケットの三分の一ほどの部分が本体から切り離されていた。この切り離された部分に俺も乗っている。二つに分かれたロケットはどんどん離れていく。燃料をパージしたにしては規模が大きすぎる。もしかして、向こうの三分の二残った方を宇宙ステーションにして、こっちの小さい方を先に月に送るということが。

そして、俺がへばりついたロケットは月に到着した。小さい方とは言っても、その大きさは考えるのも馬鹿らしくなるほどだ。月に着くと、ロケットから無人探査ロボットが出てきた。俺はロボットに見つからないようにロケットから離れる。

(さて、いよいよ月に来てしまったな)

ため息を吐こうとしたが、うまくいかない。そういえば、空気もなかった。これでは言葉を話すこともできないな。話す相手がいないので困らないか。

人間の精神なら、たった一人仲間もなく身一つで月に放りだされれば、動揺なんてものじゃすまないだろう。しかし、妖怪の俺はなんだか気楽なものだった。社会という群れの中でしか生きていけない人間との種族的な違いというものだろうか。

とりあえず、俺も月を歩いて調べることにした。月面歩行は楽しい。悪いが人類より先に月の地面に足跡をつけさせてもらう。強く踏み込んでジャンプすると5メートルくらい浮き上がる。ふんよふんよして歩きづらいことこの上ないが。甲羅を脱ぐともっと高く飛べる。甲羅自体もかなり軽くなっていった。それでも手を放すとポトンと落ちるが。

人間だったら宇宙服着てないとここは歩けないよな。紫外線、直に浴びちゃってるけど、妖怪だから大丈夫だね。甲羅も脱いで脇に抱えているので、全裸状態である。昔、宇宙は空気がないから内圧と外圧の差で体が爆発するって聞いたことがあるけど、あれは嘘らしい。

昔の人の伝承と言えば、月のウサギを思い出した。夜空に輝く月の模様は餅をつくウサギに見えるとか。地球には妖怪がいたんだし、月にウサギがいるなんてファンタジーがあってもいい気がする。よし、月のウサギを探してみよう。

『そこにいるのはだれです!?!』

だが、探すまでもなく、俺は月のウサギ第一号に遭遇してしまっただようた。

13話「うれしくないウサ耳」

目の前に現れたそいつは、人間の男に近い形をしていた。最初は人間に見つかったのか慌てたが、どうやら人間ではないらしい。妖力を感じた。こいつは妖怪だ。

顔立ちもなんだかヨーロッパの人っぽい彫りの深い感じだ。アングロサクソン系というのか。都にいた人間たちは純日本風の顔立ちだったから新鮮だ。金髪碧眼のイケメンである。ただ、残念なことに頭頂部にウサギの耳らしきものがくっついていた。バニーガールの耳を想像していただきたい。あれがもつとリアルになったみたいなの。ピクピク動いてるし、偽物ではなさそうである。

月のウサギがイケメンウサ耳男とは、非常にがっかりだ。腐女子なら喜ぶのだろうか。

『あなたは何者です！ その、どうして裸なのですか！？』

そういえば、この月ウサギは服を着ていた。妖怪の森にいた連中はあんまり人型の者がいなかったし、居ても人外っぽいのはわかりだったので、服を着るといふ慣習がなかった。せいぜい、腰布としてぼろきれを巻く程度である。俺は甲羅を脱ぐと完全な人型の妖怪だが、常にフルヌード生活を送っていた。月ウサギは、なんとというか中世ヨーロッパの兵士のような格好である。こいつらには服を着る文化があるのだろうか。

確かに見た目年頃の少女がすっぽんぽんなのは、健常な感覚からすれば色々とまずいな。だが、顔を赤らめて視線をそらすイケメン月ウサギの様子がなんかむかついた。警戒は解かないが、直視はできず、頬を赤く染めながら初心な少年の甘酸っぱい思春期模様を体現したかのようなその表情。そんなサービスはいらねえんだよ。

『悪い悪い、服着るから』

俺は服、というか甲羅を着る。ナチュラルに念話で会話したが、空気がないのだからそれも当然か。念話は音を媒体にせず、相手の頭の中に直接言葉の概念を伝えることができる妖術なので、月ウサギ語がわからない俺でも意思疎通ができる。

『変わった服装ですね。それに、どうしてあなたには耳がないのですか？』

『俺はウサギの妖怪じゃないからな。もともと耳はない』

『??？何を言っているのかわかりません。あなたの言葉の概念が理解できません』

『あー、俺は月の妖怪じゃないんだ。信じられないかもしれないが、俺は地球から来た』

そう言っつて、俺は空に見える地球を指差す。だが、月ウサギは苦笑いをするばかりだ。

『からかっているのですか？アースからここへやってきたなんて、おとぎ話ではあるまいし』

やはり、簡単には信じてくれないようだ。俺はどう説明しようかと頭を悩ませる。

『それよりも、ここに居ては危険ですよ。昨日、この付近でデスフロッグとの戦闘が行われました。もしかすると、狩り残しがいる

「かもしれません」

「ですふるつぐ？　なんだそれ？」

「はあ……デスフロッグを知らないなんて、どこの箱入りお嬢様ですか？　とにかく、ここは危険なので、村に避難して……」

そのとき、俺はわずかな殺気を感じ取った。妖怪の殺気は、妖力が微量にこめられるのでわかりやすい。どこから来ているのかと耳を澄ます。

「どうしました？」

「静かに！　近くに何かいるぞ！」

月ウサギの方は気づいていないようだ。俺が警戒の声をかけた瞬間、それは現れた。なんと、地面を突き破って。

「な、なに！？　下から！？」

何か巨大な影が地中から飛び出してきた。まったく、気づかなかった。そうか、音で接近を探ろうとしていたが、そんなことをしても無駄だ。ここには音がない。

出てきたのは、でっかいガマガエルの妖怪だった。緑と紫が混じったマーブル模様の体皮、ぶつぶつと飛び出たイボとギョロ目、人間なんて一口で平らげてしまいそうな大きな口、間違いなく妖怪である。

「ガマアアッ！」

『デスフロッグ……！　ここは僕が注意を引きつけます。その隙にあなたは逃げてください！』

イケメン無理すんな。妖力から見て、実力はあちらの方が上手だ。ただ、月ウサギは両刃の西洋剣を装備していた。見たところ立派な剣である。武器があればなんとか対抗できるかもしれない。しかし、それでもこちらに分が悪い闘いになるだろう。

妖怪ガマエルはデスフロッグという名前らしい。気持悪い動きでびよんびよん飛びながらこちらに向かってくる。無音なのがシユールだ。

『来い、デスフロッグ！　僕が相手だ！　はあああつ！』

月ウサギが剣を構えて踏み出す。その動きは予想外に速かった。一足で敵の側面に移動し、その太い足を切りつける。球状に丸まった血がぽこぽここと飛び散った。

『ガツ、ガマアアアツ！？』

意外に強いな。動きのキレが違う。苦戦するかと思われた闘いは終始、月ウサギの優勢が続いていた。ただ、見た目通りデスフロッグは体力があるようだ。月ウサギの攻撃は、致命的なダメージを与えるに至らない。

『どうして逃げないのですか！？　早く逃げて！』

はっ、俺は他人ごとのようにその場に突っ立ったまんまだった。俺も加勢した方がいいよな。せつかく出会った月ウサギに死なれては困る。色々聞きたいことがあるのだ。

『ガマツ!』

そこで、やられっぱなしだったデスフロッグに動きがあった。体表から得体のしれない気味の悪い色をした粘液を分泌し始めたのだ。見るからに毒ですと主張している色あいだ。これには月ウサギも手が出せないのか、後ろに下がって距離を取る。

しかし、デスフロッグはその隙を見逃さなかった。大きな口をかぱりと開くと、そこから勢いよく長い舌が飛び出す。カメレオンのように伸びた舌は月ウサギの足にからみついた。

『しまった!』

『ガマアツ!』

月ウサギがデスフロッグの口の中に引きずり込まれようとしている。これはまずいな。俺はすぐさま伸びきった舌に向けて妖力弾を撃ち出した。

『ガファツ!?!』

獲物を仕留めた気になっていたデスフロッグは、思わぬ攻撃を受けて動揺した。焦りで月ウサギをつかんでいた舌を放してしまう。月ウサギはその一瞬で逃げ出すことができたようだ。

しかし、デスフロッグは次に俺を標的に選んだらしい。こちらにビシビシ殺気を放ってくる。口をかぱりと開いた。これはカメレオン攻撃がくるな。俺は横に飛んでかわそうとした。

『あ、あれ? 体がうまく動かせない』

しかし、ここが月だということをしつかり失念していた。体が軽

すぎて地面を蹴っても浮遊感が邪魔して思うように移動できない。さっきの月ウサギの戦闘を見ていたせいで感覚がおかしくなっていた。どうして月ウサギはあんなにシャープな動きができたんだ？

『やばっ!?!』

『ガマアアアッ!』

避けられなかった。舌が俺の胴体に巻きつく。そのまま踏ん張ることもできず、デスフロッグの口へと運びこまれる。

『やめろ!』

月ウサギが叫ぶが、デスフロッグが言うことを聞くはずもない。俺はとっさに甲羅の中にもぐりこむ。まあ、これで食われてもなんとかなるだろ。

ごっくんされた俺はデスフロッグの胃に収まった。それじゃあ、カエル爆竹花火ごっこを始めるとしよう。

『妖力弾、回転掃射!』

俺はデスフロッグの胃の中で甲羅ローリング走法を行う。ついでに妖力弾のおまけつきだ。内側からの攻撃には、さすがに耐えられない。

『グエエエエエエッ!』

おなががパーン!

断末魔の悲鳴とともにデスフロッグは破裂したのであった。

14話「夢のウサ耳ランド（棒読み）」

『うわ、べつとべとだなこれ』

俺はデスフロッグの胃袋から生還を果たすことができた。ぐちよぐちよの粘液と飛び散った臓物で甲羅が汚れてしまったが。

『……………』

さて、俺がふと視線をやると、月ウサギが剣を振りかぶった体勢のまま固まっていた。信じられない物でも見たかのような表情だ。

『おーい、大丈夫かー？』

『はっ！？ それはこちらのセリフです！ あなたは無事なので
すか！？』

『見ての通りだ』

デスフロッグの妖力は俺の足元にも及ばない。妖怪の森にいた仲間たちを基準すれば、下の上くらいの強さだ。せいぜい毒が気持ち悪いところくらいしか厄介な点はなかった。

そんな俺の様子を見て、月ウサギは呆れている。

『本当にあなたが何者なのか気になります』

『俺の名前は葉裏だ。さっきも言ったが地球の妖怪だ』

『ヨウリさん、ですか。僕はロバートと言います。あなたには聞きたいことがたくさんあるのですが……とりあえず、移動しましょう。ついて来てください。村に案内します』

村があるらしい。妖怪の村、というのはなんかひっかかる言い方だ。村とは人間が作るものである。妖怪は群れをつくることはあるが、その住処はせいぜい“巣”といったところだ。まあ、今のところ友好的に受け入れてくれているようなので、おとなしくついて行くことにしよう。

* * *

月ウサギの村は地下にあった。月のクレーターを中心にカモフラージュした巣穴の入り口がある。その中に入って行くと、そこには別世界が広がっていた。

地下の空間はかなりの広さがある。光源は火ではなく、青白く光る石だった。驚いたことに植物が生えている。水もないのにどうやって生きているのかと思っただが、どうやらこの植物、ただの草ではない。妖力を感じた。これも妖怪の一種なのか。もう何でもありだな。

村には結構な数の月ウサギの姿があった。大人も子どもも男も女も、みんな頭にウサ耳が生えている。これは妖怪っていうか宇宙人って言った方がしっくりくるな。地球の妖怪と違って、実に人間らしい暮らしをしているのがわかる。ここに生息している植物も、月ウサギたちが管理して育てているのだろう。

村に入ってきた俺を、月ウサギたちは興味深そうに見つめてくる。不思議と警戒はしていない。もっと排他的な雰囲気があると思っただが、よそ者である俺のことを拒絶する様子はない。それよりも好奇心の方がまさっているといった感じだろうか。

ロバートは話しかけてくる月ウサギたちをやりわりとあしらいつ

つ、穴の奥へと進んでいく。奥にはいくつもの横穴があった。その中の一つに入る。

『ロバートです。巡回からもどりました』

『入れ』

横穴のさらに奥に進むと、先がすだれのようなもので仕切つてある。ドアの代わりみたいなものだ。ロバートに続いて俺も奥へと進む。そこには、数人の月ウサギがいた。年配の男ばかりである。無論、こいつらにもウサ耳がある。誰得。

『どうした、何か異常があったのか？ ……その者は誰だ？』

ウサ耳おっちゃんの一人がさっそく俺の方を見て疑問をぶつけてきた。さて、どうやって話をつけようか。

『彼女はヨウリ。巡回中に会いました。その直後、デスフロツグの襲撃を受けたのですが、彼女の協力でデスフロツグを倒すことができました』

『なんと。そうであったか。ロバート一人の力では、デスフロツグを倒すことはできなかつただろう。礼を言う』

『いや、まあ、どういたしまして』

『して、そなたはどここの村の者だ？ この村を訪ねてここまで来たのか？』

『……ちょっと、信じられないかもしれないが、俺の話聞いて

くれ』

それから、俺はここに来た経緯を話した。俺は地球にいたこと。そこで人間と戦ったこと。人間は月へ向かうため、ロケットに乗って宇宙へ出たこと。そして、俺はそのロケットにしがみついて不本意ながらここへ来てしまったこと。

すべてを話し終えた俺に、月ウサギたちが向けた目は怪訝なものだった。

『にわかには信じられん話だ。我々にとってアースは死後の魂が向かう天上の地。仮にそなたがアースからやって来たとなれば、そなたは天上に住まう存在ということになる』

『地球はそんなたいしたところじゃねえよ。まあ、こことはだいぶ違うが、俺はあんたらと同じ妖怪だ』

『わからぬ。ヨウカイとはなんだ？ そなたは玉兔なのか、それとも我らとは異なる存在だと言うのか』

月ウサギの正式名称は『玉兔』というらしい。しかし、なんで妖怪という概念が伝わらないんだ？ 俺もこいつらも肉体に妖力が宿っている。だったら、同じ妖怪なんじゃないのか。

『妖怪ってのは、俺たちみたいな奴らのことを指す総称だ。お前たちは玉兔って言うんだろ？ それも妖怪の一種ってわけ。あと、デスフロッグとか言う奴もな』

『……我らとデスフロッグをいっしょくたにされるとは。なんともおかしい物の考え方をする。やはり、我らには理解できん』

なんか話がかみ合わないな。なんで、こんな簡単なことが伝わらない。

いや、そういえば、『妖怪』って言葉はなぜあるんだ。それって、『人間』と対になる意味があるから成立しているんじゃないか。対立する存在があつて、それぞれにそれを表す名前がつけられただけにすぎない。人間がいなければ、そもそも妖怪なんて言葉は生まれなかったはずだ。

『えつと、ここには玉兔とデスフロッグと、それから他にどんな奴らがいるんだ？ 人間はいるのか？』

『この地には、我々玉兔とその宿敵デスフロッグしかない。ニンゲンという者も聞いたことがない』

なるほど、月には妖怪ウサギと妖怪カエルしかないのか。人間が生活できる環境じゃないからな。だったら、玉兔たちが自分を妖怪と定義しない理由にも納得がいく。しかし、二種類の妖怪しかないなんて、地球と比べるとなんとも多様性がない場所だな。

『すまないが、そなたの話を信じることができん。アースからこの地へ渡る船を作るなど、それこそ神のなせる業だ。そなたは自分がアースから来た存在だと言うが、耳を失った玉兔にしか見えない』

『ウサ耳なんて最初から生えてねーって』

俺は根気強く説明を続けたが、やっぱり信じてもらえなかった。別に俺は自分がどんな存在と認識されようとかまわないし、玉兔の世界観にけちをつける気もないのだが、一つ気にかかっていることがあるのだ。それは、人間についてのことである。

人間は貪欲に環境を食いつぶして成長していく種族である。前世

に俺がいた世界では、侵略する側とされる側、その争いの結果が悲惨なものに終わることは歴史が証明している。人間が月の先住民に敬意を払って接するというのは考えにくいと思ってしまうのが正直な感想だ。同じ妖怪として、玉兔が人間にやられるのを黙止するのは気が引ける。

けど、信じてもらえないのならばかたがない。一応、警告はしたのだ。後は玉兔たちの判断にゆだねよう。

15話「服を着よう」

必死に地球のことについて喋りまくったせいだろうか、俺はおつちやんウサギどもから憐みのこもった視線を集めていた。人を頭のかわいそうな子ども扱いしやがって。しかも、身寄りのない孤児と思われ、この村で面倒を見てもらうことになった。

お世話になるのは、ロバートのウサギさん一家である。最初はさすがに厚かましいと思ったので断ったのだが、ロバートはぜひ家に来てほしいと言ってきた。まあ、力には自信があるので、俺にもやれる仕事はあるだろうし、一方的に養われるつもりはない。手伝えることは手伝おう。たくさんある横穴の一つ一つが各家庭の住まいになっているようで、さっそくお家にお邪魔した。ロバートの家は、父と姉との三人暮らしである。母親は随分前にデスフロッグに食われたらしい。なむ。

『姉さん、ただいま』

『おかえりなさい、ロバート。あら？ そっちの女の子はだれ？』

家で迎えてくれたのは、ロバートの姉のモニカという玉兔だった。ようやくまともなウサ耳女子に会えた。目の保養とは、まさにこのことだろう。

『この子はヨウリ。わけあって、今日からうちで預かることになったんだ』

『ええ！？ほんとに！？』

『どうも、ヨウリです。地球の妖怪です』

モニカはやっていった家事を放りだしてこちらに走って来た。なんだか目をキラキラさせてぶるぶる震えている。そして、何を思ったのか俺にいきなり抱きついてきた。

『か、かわいい〜！』

すりすりと頬ずりしてくる。初対面の相手にこの過激なスキンシップ、気持ち悪い奴だ。まあ、美少女なので許す。モニカの胸がぶよぶよ自己主張しているので、とりあえず揉む。

『おっぱいでかいな、モニカ』

『かわいい〜！』

『ね、姉さん……』

快く迎え入れてくれたようで何よりだ。互いの自己紹介を終えた後も、モニカは俺に抱きついて放れない。暑苦しい。俺は強引にモニカを引き剥がす。

『やんっ！ もう少しだけハグを〜！』

『やかましい。離れろ』

『ちえー。ところでヨウリちゃんのその格好……かわいいんだけど、少し変じゃない？』

それについては同意せざるを得ない。この甲羅スタイルは紛れも

なく変だ。だが、そう正面切って直球の言葉をぶつけられると、反論できなくてイラツとくる。むかついたので、甲羅を脱ぎ捨ててすっぽんぽんになってやった。ロバートが慌てて後ろを向く。

『こら！ ヨウリちゃん、年頃の女の子が簡単に肌をさらしちゃいけません！ 待ってて、服を持ってくるから』

モニカは服を用意してくれた。植物の繊維で編まれたワンピースだ。そういえば、まともな服を着るのはこれが初めてである。ワンピースはごわごわして着心地はあまりよくない。しかし、妖怪が服を作るといふのは、なかなか斬新である。妖怪はおしなべて物作りが下手な奴らばかりだと思っていたが、そうでもないらしい。

『私のお下がりでけど、大きさもちょうどいいみたいね。取っしておいてよかったわ』

『スカートよりズボンの方がいいんだけど』

これだと股部分の布が邪魔で甲羅を装着できない。ズボンなら邪魔にならないのだが。

『そう？ でも、お父さんやロバートのズボンはサイズが合わないだろうし……後で私が作ってあげるわ』

『よろしく。あ、動きやすいように短パンにしといて』

我ながら思うが図々しい。

モニカたちと話していると、家にだれかが入って来た。渋い、いぶし銀のおじさまウサギだった。なんかバーボン、って感じの。ロバートとモニカの父親のようだ。名前はジョージ。俺がこの一家に

世話になるということをロバートが話したが、少しも動じた様子はなかった。二言三言、言葉を交わしただけで後は何も言わない。別に嫌われているようではないので、単に寡黙な性格なのだろう。こうして、俺は月のウサギこと玉兔のとある一家に同居させてもらうことになったのであった。

* * *

それから数日が経ち、俺も玉兔たちの村に慣れてきた。玉兔は人間っぽい暮らしをしているが、やはり妖怪に近い種族である。食事は日に一回、地下の畑で取れた穀物からできるモチのような物を食べる。俺も御馳走になったが、結構つまかった。妖力が豊富に含まれており、これ一個で腹がふくれる。

妖怪に必要なエネルギーは妖力である。妖力は自然界に満ちており、黙っていても体に取り込むことができる。だが、それだけでは足りない。もっと効率よく大量の力を手に入れる必要がある。そのため、妖怪にも“飢餓感”が存在する。空腹が過ぎれば存在が消滅してしまう。

一番手っ取り早い方法は、力ある他者を捕食することだ。新鮮な生命ならなおよい。俺はそれしか妖力を得る方法を知らなかったのだが、森の妖怪たちは別の方法で飢えをしのいでいる者もいた。捕食ができない弱い妖怪は、人間をおどかしてそこに生まれた恐怖の感情を食う。妖力は闇の力である。恐れや怒り、憎しみといった負の感情が生まれると、そこに集まりやすい性質があるのだ。ただ、この方法で集められる妖力は少ない。

そうそう、ところで俺は物を食べなくても死なない体になっていた。六島苞と融合していた影響か、俺は光合成で妖力を生産できるのである。日向ぼっこで甲羅干しすると、お腹が膨れる。俺の甲羅は光妖力合成機能を持っていた。植物の妖怪の特徴なのか、捕食をしなくても生きていける。

玉兎たちは、道具作りが得意な妖怪だった。植物の繊維やデスフロッグの皮を用いて衣服や防具を作り、驚くべきことに熱を使わずに金属を加工する妖術を持っていた。どうやって作るのか気になったが、工房には入れてもらえなかったので、方法はわからなかった。ジョージはこの村一番の武器職人らしく、『金属を加工する程度の能力』を持っているので材料さえあれば、どんな剣でも作り出せるという。

『父さんは一流の剣職人だし、剣術の達人でもあるんだ。僕が目標だよ』

『ふーん』

俺とロバートは巣穴の外、月面に来ていた。穴倉の中にずっと引きこもっているとなんだか元気がなくなる。ひなたぼっこは気持ちがいい。六島苞に寄生されていた時代の名残かもしれない。光合成で元氣ハツラツ。

俺は村の自警団に臨時入団している。最初は玉兎の大人たちに見た目でみくびられていたが、妖力弾をぶっ放して見せると態度が変わった。と言っても、デスフロッグの襲撃は最近あつたばかりなので、今はそこまで忙しい時期ではないようだ。半年に一回くらいのペースで襲撃があるらしい。一応、周辺のパトロールの任務を与えられたので、ロバートと一緒に村近辺を歩いて回っている。

『そうだ、ヨウリ。よかったら、僕と手合わせしてくれないかな？』

ロバートは強くなりたいたいという向上心が人一倍あるようだ。暇を見つけては剣の練習をしているところを見かける。まあ、暇なので少し付き合っただけか。

16話「寡黙なる職人ダンディズム」

試合の勝負はあっけなくついた。俺の負けだ。俺はロバートへ向けて妖力弾を発射したが、それをことごとくかわされ、接近されてしまった。首に剣を突きつけられ、ジ・エンド。まあ、甲羅に引きこもれば俺の勝ちだっただろうが、そんな大人げないことはしない。

『なあ、前から気になってたんだが、なんでお前らはそんなに速く動けるんだ？』

ずっと疑問だった。宇宙空間で身動きすることは、水の中を泳ぐに等しいわずらわしさがある。俺は甲羅を脱いでウエイトダウンしてもロバートのスピードに追い付けなかった。重力が少ないと浮力がつく。すると、踏み込み際に地面から離れる時間が長くなる。宙に浮いている間、自分の体を制動することができない。速く動くようにして強く踏み込むと、そのまま進行方向に吹っ飛んでしまうのだ。かと言って弱い踏み込みでは、コントロールはできても緩慢な動きしかすることができない。

その点、ロバートは違った。まるで、地上を動いているかのようなスムーズな動きで月面を駆ける。いや、それ以上だ。浮力すら利用して空中を泳ぐように移動することができる。

『これは玉兎に伝わる体術だよ。『兎跳』、『兎狩』、『白兎』という三つの技を使いこなす術さ。ヨウリは『白兎』の技に関しては、すばらしい才能を持っているけど、それ以外があんまり得意じゃないみたいだね』

『そんな技を使った覚えはないけど。もしかして、妖力弾のこと

か？』

玉兔は妖力弾のことを『白兔』と呼ぶようだ。玉兔の戦士の中でも、俺ほどの弾幕を張れる奴はいない。言っちゃ悪いが、持っている妖力量の桁が違うからな。

『『白兔』は三技の中でも最も使うことが難しい技とされているんだ。強い“フォース”を持つ者しか使うことのできないからね。僕は才能がないからまだ使えないんだ』

あと、玉兔は妖力のことをフォースと呼んでいるようだ。スターウオズか。

『僕が速く動ける理由は『兔跳』を使っているからだよ。これは足の裏にフォースで足場を作って、それを蹴ることによって自在に動けるようになる移動術だ』

『妖力の足場？ そんなん不可能だろ』

どれだけ緻密なコントロールが必要になるか、想像もつかない。下手をすれば妖力弾で自分を撃ち抜くことになる。

『僕も修行を始めたころはできっこないと思ったけど、なんとか形だけは使えるようになったよ。まあ、全然未熟だけどね……』

ロバートは自虐的なため息をつく。くそ、そんな技があるなら俺も使えるようになりたい。

『もう一つ、『兎狩』って言ってたけど、どんな技なんだ？』

『『兎狩』は攻撃の技だよ。拳にフォースを集中させて、攻撃が当たる瞬間に爆発させ、その勢いを乗せるようにして直接相手にフォースを叩きこむ技さ。うまくいけば、相手の肉体の奥深くにダメージを貫通させることができる。達人になると、剣に『兎狩』の効果を付与させ、強力な斬撃を常に放つことができるんだ。僕はまだ練習中だけど……』

ロバートはため息をついて顔を手で覆う。なんか、こいつの顔を見てるとますます自分も玉兎三技を使いたくなってきた。

『ちつ、このまま負けっぱなしなのは癪にさわるからな。俺にもその体術を教えてくれ』

『え？ あ、うん。僕でよかつたら教えてあげるけど……』

なんで、そこで顔を赤くするんだよ。

* * *

それから数日、俺はロバートから玉兎三技の手ほどきを受けた。

『白兎』に関しては教えてもらう必要がないので、専ら『兎跳』と『兎狩』についてである。全然、できない。まだまだ練習がいるよ。うだ。

今は家族だんらんの時間、食事タイムである。ロバート一家と俺は同じ食卓を囲んで、一日一個のウサギモチをはむはむ食べる。

『ヨウリちゃん、前に言ってたズボンが完成したの。さっそく着てみて！』

モニカお手製の短パンを買った。俺の今の服装は、こわこわした

ベストに、ごわごわした短パン、そして蔓で編まれたサンダルだ。見た目はともかく、動きやすくてよい。モニカには感謝した。お礼に抱きつかせるとせがまれたので、おとなしく抱かれておいた。

『……』

相変わらず、一家の大黒柱であるジョージは寡黙だ。俺はまだ二、三回くらいしか話をしたことがない。コミュニケーション。

ん？ なんだか、ジョージが俺の甲羅をじつと見ている。今は服を着替えたところだったので、脱ぎっぱなしにして床に転がしていた。

『このアーマーは』

おお、ジョージの声を久しぶりに聞いたな。俺の甲羅に興味があるようだ。

『見たことのない素材でできている。さわってもいいか？』

『いいよ』

ジョージは甲羅を丁寧な観察し始めた。膝の上において、くるくる回しながら色々な方向から見ている。

『っ！ 重いな』

気合いを入れて持ち上げると自分の目の高さに合わせて観察する。地上だと並みの妖怪では持ち上げられなかった甲羅だが、月の重力なら玉兎でも抱えられるようだ。だが、それでもきついのか、すぐに地面に下ろして息をついている。

『このアーマーはだれが作った物なんだ？』

『あー……さあな。拾い物だからな』

本当のことを言っても信じてもらえなさそうなので、適当にごまかす。ジョージはそれつきり口を閉ざしたが、視線はチラチラと甲羅の方ばかり見ている。わかりやすい。

『俺の甲羅がそんなに気になるか？』

『……職業柄、つい、な。こんな金属は初めて見る』

ジョージは武具職人だった。『金属を加工する程度の能力』という力があれば、まさに天職だろう。自分の知らない素材に興味をもつことはわからないでもない。

あれ、そういえば、さっきジョージはなんて言った？ 「こんな金属は初めて見る」って言わなかったか？

『それは、金属なのか？』

『ああ、俺が能力を使えば、金属とそうでない物を見分けることもできる。これは、色々と混ぜられているが、金属の性質も持っている』

いつの間に俺の甲羅は金属化したんだ。確かにピカピカ光沢が輝いているけどさ。だが、そこで俺は重大な事実気がついた。

『と、いうことは、もしかしてこの甲羅を加工することができる？』

ジョージの能力があれば、この甲羅の形を変えられる。つまり、このかつこ悪いフォームをどうにかすることが出来る！ 俺はかつこよくなれる！

『……やってみないと、わからないが』

『本当ですか！？ お願いします！ この通り！』

俺は恥も外聞もなく土下座した。この甲羅がかつこよくなるのなら、どんなことだってする。悪魔に魂を売ってもいい。俺の態度が急変としたのを見て、この場にいた玉兔ファミリーは啞然としていた。

『しかし、このアーマーの形は確かに無骨だが、防具としての機能性は悪くない。改善する点などない気がするが』

『かつこよくしてください！ とにかく、かつこよく！』

ジョージは俺の要望に驚いているようだ。しかし、すぐに相好を崩し、ニヒルな笑顔を浮かべた。

『わかった。やってみよう』

『ありがとうございます！』

ジョージさん、まじダンディー。惚れたぜ。

17話「戦いの狼煙」

それから俺は毎日、ジョージの工房へ足を運んだ。毎日二回も行った。衝動を抑えきれず、三回行った日もあった。俺の甲羅の加工はとても難しいようだ。ジョージはまるで生き物と接しているようだと言った。

『このアーマーは生きている。そして、これは自身の形が変わることを望んでいるように思う。もし、このアーマーが俺の能力を拒絶していたなら、加工は不可能だった』

俺と甲羅は離れていても心は一つ。頑張つて素敵なメタモルフォーゼをとげてくれ。ジョージは職人の遊び心というやつか、製作途中の甲羅を見せてくれなかった。完成したら見せるという。ジョージの野郎、俺の心をもてあそびやがって。だが、その焦らし、嫌いではない。

『そうだ、アーマーの中を点検していたら、こんな物が出てきたのだが』

しなびた激辛蜜柑だった。捨てておいてくれと頼んでおいた。

『ほら！ また集中が途切れてるよ！ もっと体内のフォースを感じて！』

そして、俺は日中のほとんどの時間を玉兎三枝の鍛錬にあてていた。講師はロバートである。ロバートは、俺がジョージの工房のことを気にしているそぶりをみせると、なぜかすぐ怒る。口うるさい

ガキだ、まったく。

『全然、フォースの循環ができてないよ。それじゃ、いつまで経っても技は使えないよ』

玉兔はどうしてあんなに少ない妖力で三技という強力な術が使えるのか、不思議だった。その答えは妖力の運用のしかたにあるらしい。玉兔は少ない妖力を体の中で循環させることができる。その回転を徐々に速くしていくことで、体内にエンジンを作り出すのだ。そして、その回転力を極限まで高めたところで体外にバーストすることによって、爆発的なエネルギーを得ることができる。

理屈はわかった。だが、実践はできない。俺にとつて、妖力とは体の中に沈澱して静かにたゆたうモノでしかない。妖力弾はそこからすくった水を投げつけるような感覚で行う。妖力を回転させることはなんとかできるようになったが、ただぐるぐる回るだけだ。濁った汚い水槽の中の水をかき回すかの如くである。そこに爆発的なエネルギーが生まれる余地などない。むしろ、体の中を駆けまわる妖力の渦の影響で気分が悪くなるだけだった。

『おえっ！』

『ちよ、ヨウリ、大丈夫！？』

早くも諦めかけている俺。妖力の循環とか、もしかして玉兔の固有技能なんじゃないか？ できる気がしない。

『今日はこのくらいにしておこうか』

ロバートが俺の背中を撫でながら、帰宅を提案した。疲れた。今日は帰って寝よう。明日から頑張ろう、うん。

『おおーい！ たすけてくれーっ！』

そのとき、どこからか助けを求める声が聞こえた。助けを求める声って、なんだかトラウマなんだよな。見れば、クレーターの丘の向こうから、一匹の玉兎がこちらに走ってきていた。

『なにがあつたんだろう』

必死の形相で走って来た男は、衣服はボロボロで体も傷だらけだった。俺とロバートは警戒を強める。

『た、たすけてくれ！ 俺たちの村が、村がああ！』

『落ちついてください。どうしたんですか？』

『俺は隣村のセルニエスから来た……はあはあ！ セルニエスがデスフロッグに襲われた！』

『この時期に立て続けに襲撃が起こるなんて。それで、被害状況は？』

『全滅だ！ 村が全部、デスフロッグにのまれちゃった！』

『なんですって……！？ そんな馬鹿な！？』

これまでの平穏な日常は音を立てて崩れ去った。事態は急激に転換していく。

* * *

隣村から来たという玉兔の話によれば、現れたデスフロッグの数は100匹以上にのぼるといふ。この数は異常だった。これまでの半年に一回の襲撃では、多くても20匹程度しか現れていない。100匹もの大群で押し寄せた前例などなかった。

村の長老たちは集まって会議を行っている。隣村が制圧されてしまった。もはやデスフロッグたちがこの村へやってくることは時間の問題である。玉兔の戦士たちは戦いの準備を始めた。ロバートとジョージは戦士として戦うようだ。

『ヨウリはモニカと安全な場所にて。デスフロッグは僕たちが食い止めるから』

『いやいや、それには及ばないさ』

『ヨウリ?』

俺も一角の妖怪。外で戦があつていふというのに、穴倉の中でぬくぬくと守られている気はない。

『だめだ! 本当に危険なんだよ!』

『お前は俺の強さを知ってるだろ? 俺はデスフロッグなんぞに負けはしない』

『で、でも……! 父さんから何か言つてよ!』

ジョージは無言だ。じつと目を閉じている。寝てるのかと思つたら、おもむろに動きだした。家の奥から何かを持つてくる。その緑色の輝きを見て、俺の胸が高鳴る。

『あずかっていた物を返そう』

それは、俺の甲羅だった。いびつな流線形の形は整えられ、八二カム型六角形の直角的でメカメカしいデザインに。なんとなく原形は残っているが、甲羅はその姿を一新させていた。

『う、これは……』

俺は高鳴る鼓動を押さえて、甲羅を装着する。従来の甲羅は体を中心に腹側と背中側の甲羅が巻きつくような構造になっていた。それが、重心をほとんど背中側に移し、タンクを背負っているような感覚に変わっている。腹側の側面部分は俺のボディラインに沿うようにすっきりと細くなり脚を出す二つの穴も距離が調節され、ガニ股になることもなくなった。そして、一番変わった点は腹側パーツの構造だ。なんと背中側のパーツのスペースにスライドして収納できるようになっていた。装着するときはパーツを引き出し、さらにそこから観音開きのように蓋が開き、その間に体を収めるようにして着る。これはもはや甲羅ではない。ジョージの言つとおり、“アーミー鎧”だった。

『す、すげえ……』

『いい物を見せてもらった。感謝している。気に入ってもらえたか?』

『すげええええ!! うおおおおお!!』

『よ、ヨウリ!? なんで泣いてるの!? 落ちついて!』

俺はうれし泣きした。まさかここまでの作品を仕上げてくれるとは。感無量だった。確かにまだなんか変ではある。しかし、それでもこれは進化とっていい進歩だ。あのダサイ甲羅がギリギリかっこいいと言えるまでの変化をとげた。これは奇跡だ。

『おおおおお！ これなら負ける気がしねえ！ デスフログなんて100匹まとめてボコボコにしてやんよ！』

俺のリミットは最高潮に達していた。

「18話」と、思ったけどダメでした」

『ヨウリ、村の外から来たお前を、この村の戦いに巻き込んでしまったことは申し訳ないと思っている』

『気にすんな。一食一飯の恩義ってやつだ』

ジョージはいつにもまして辛気臭そうな顔をしている。

『これは饞別だ』

渡された物は短剣だった。ナイフと言うには少し刃渡りが長く、剣と言うには短い。鞘から抜くと、刀身は漆黒色に鈍く光っていた。

『地下深くで採れたルナタイトを使った。手入れをせずとも、錆びず、刃こぼれはしない』

剣なんて使ったことがないが、もらえるものはありがたくもらっておこう。俺は腰のベルトに短剣の鞘を通してさげる。

『あー！ 父さんずるい！ ぼ、僕もあとで何か贈るからね！』

『まあ、ロバートったらヤキモチ焼いちゃって』

ロバートとモニカが何か言っている。なにかにつけて、ロバートは父親に対抗意識を燃やしているな。めんどくさい奴だ。

『長老からの通達だ！ 村の者は全員、穴の外に集まれ！』

遠くでだれかが叫んでいた。集会でもやるのだろうか。俺たちも他の玉兔のたちの流れに乗って、穴の外へと出てきた。そして、全員が集まったことを確認すると、年老いた玉兔が前に出て演説を始めた。

『皆の者、知つての通り、この村に我らが宿敵デスフロッグの群れが来襲しようとしている。これはこの村創始以来の未曾有の危機。そこで長老衆は決断をした。デスフロッグを罠にかける』

話を聞いていた玉兔たちは騒ぎ始める。デスフロッグの群れを押しとどめるような罠をいかにして仕掛けるのか。

『デスフロッグが村を襲わんとしたそのとき、『兔爆石』を起動させるのじゃ』

ざわめきは急速に大きくなっていった。絶望するかののような悲鳴を上げ始める者まで出始める。

『ロバート、『兔爆石』ってなんだ？』

『村の長老が代々封印している石だよ。そこには膨大なフォースが蓄えられており、封印を解いたが最後、地を覆すような爆発を起こすとか』

『それって、村がふつとばね？』

村を犠牲にする覚悟があるということか。石は村の地下深くに固定されており、持ち出すことはできない。敵が村に殺到したそのときを狙って、村ごと爆破し、一網打尽にするという計画のようだ。

デスフロッグは地下に潜って移動する。地下の住民をすべて避難させ、からっぽになった村にデスフロッグを誘導できればかなり有利に戦いを進められる。

しかし、当然反対する者が大勢いた。自分たちが住んでいた村がなくなってしまうのだ。それに、封印を解くためには長老が『兎爆石』の傍にいないといけないという。つまり、長老の命を犠牲にする作戦なのだ。

『静まれ、皆の者。100体ものデスフロッグの群れに、我らが抗う手段はもうこれしか残っておらん。おそらく、この罠が成功したとしても、すべてのデスフロッグを殺すことはできない。生き残った奴らは地上に這い出し、我らに牙をむくだろう。戦士たちは戦いに備えよ。必ず、勝つのだ！』

俺が全力を出せば、デスフロッグを100匹倒すことができるだろうか。それは可能だろう。しかし、地下から襲い来る敵から村を守りとおせるかと言えば、それはできそうにない。俺は地下の敵の相手ができるスキルなんて持っていないのだ。戦士たちを全員守りきることもできないだろう。俺がここで出しゃばったところで、長老を説得なんてできない。あれは覚悟を決めた顔だった。彼らにとって、デスフロッグとはそれだけの存在なのだ。

俺が妖怪だからだろうか、それとも玉兎ではないからだろうか。薄情だと思わなくもないが、声高に自分の主張を垂れ流す気もない。長老の決断は、最善手だ。

『やれやれ』

俺は肩をすくめた。

* * *

地下の穴倉から最低限必要な物資を外に運び出す。クレーター丘の上に長老を除く玉兔の全員が避難し終わった。いつデスフロッグが来てもおかしくない状況だ。悠長に穴の中で構えていることはできない。

『大変なことになっちゃったね』

『まーな』

ロバートは無理に明るい雰囲気を保とうとしているように見えた。いつものうざったさが無い。

『はいこれ、ヨウリにあげる』

ロバートは何か差し出してきた。さっきの約束を律儀に守ったのか、プレゼントのようである。それは帽子だった。ベレー帽に似ている。漫画家がかぶっているというより、軍人の物っぽい。

『なんだこれ？』

『それは戦いで耳を失くした戦士のための帽子なんだ。デスフロッグの毒にやられて切り落とさないといけなくなつた戦士はたくさんいる。そんな戦士は最前線で戦った勇気をたたえられて、この帽子を贈られるんだ』

『そんな名誉ある帽子、恐れ多くてかぶれねえよ』

俺に似合いそうにないしな。でも、ロバートは俺にウサ耳がないことを気にかけて、この帽子をくれたのだろうか。変な気、遣いや

がって。

『ま、気が向いたらそのうちかぶる』

『そう』

ロバートは苦笑していた。俺は甲羅の中に帽子をしまっ。せっかの贈り物だ。大事にしないとな。

* * *

その日の夜、大きな地震が起こった。奴らが来たかと立ち上がったとき、さっき起こった地震がちっぽけに思えるほどの揺れが大地に広がった。そして、玉兎の巣穴があった場所に天を突くような白い炎が立ち上った。

19話「黒幕」

暗い空を染め上げる炎、それは妖力で形作られた幻だ。だが、その威力は本物である。『兎爆石』が起動したのだ。それはすなわち、デスフロッグの襲撃を意味する。

丘の上で、出撃の時を待つ玉兎の戦士たち。静まり返った戦場に、デスフロッグが現れた。ぼこぼこ土が盛り上がり、醜悪な力エルの姿を見せる。

『今だ！ かかれーっ！』

突撃の合図とともに、戦士たちが駆け出した。俺も一緒に走りだが、戦士たちの速いこと速いこと。ほとんどの戦士が『兎跳』を使っているのだ。俺はかなり出遅れてしまった。

『ガ、ガマアア……！』

地上に現れたデスフロッグは手負이었다。表皮が焼けただけ、苦しそうにうめいている。自慢の毒をまき散らす余裕さえないようだ。自爆作戦は成功していた。犠牲は無駄ではなかったのだ。

これは俺が手を出すまでもないんじゃないか。戦士たちは獅子奮迅のはたらきで次々に敵を屠っていく。と、そこで俺のすぐ横の土が盛り上がりを見せた。

『おっと』

顔を出す前に妖力弾を連射する。しばらく苦しそうにうごめいていたが、すぐにおとなしくなった。悪いね、同じ妖怪として多少は

心が痛むけど、妖怪の世界って強者が勝者だから。

敵はいないかと周囲を見渡すと、ロバートとジョージの姿が見えた。二人とも近くで戦っている。その傍へと向かった。

『ヨウリ!? 問題はない!?!』

『ないよー』

ロバートの実力でも、さすがに瀕死のデスフロッグには引けを取らなかった。的確に急所を狙って仕留めていく。

『……ふんっ!』

その横で、ジョージは無言で剣を振るっていた。剣先がかするようにデスフロッグの鼻先に当たる。はずしたのかと思いきや、ぱっくりとデスフロッグの頭が真ん中から二等分されていた。何をしたんだ?

『あれが達人の『兎狩』だよ。父さんは剣の扱いも一流だからね』

あれはやばいな。まるで不可視の刃だ。甲羅でなら防げるが、生身の部分に当たったら俺でも無事で済みそうにない。玉兎と俺との妖力は雲泥の差だっというのに、ここまでの脅威になるとは。玉兎三技。パネエ。

『なんだよ、玉兎も十分強いじゃん。デスフロッグとか余裕じゃね?』

『そうでもないよ。デスフロッグの毒は強力だからね、僕は近接戦闘を主体としているから毒に侵される危険が常に伴う。それに

奴らは地下を移動するから村を狙われないように色々考えないといけないし』

デスフロッグの毒は俺にとってさほど怖くない。これは妖力に起因する毒性である。デスフロッグよりも圧倒的に保有妖力が高い俺なら、体内で簡単に中和できる。だが、玉兔はそうはいかないのだろう。ちよつと触るだけでも呪いのように体を蝕んでいく。なるほど、確かに厄介だ。

『でも、今回の戦いは楽勝なんじゃないか？ もう地面から出てくる数も相当減つたみたいだし』

敵の勢いはもうほとんどなかった。妖力探知で地下を探ってみても、動きのある気配は……あれ？ なんだ、この馬鹿でかい妖力反応は？

そして、もかもこと盛り上がる地面。今までの規模とは比較にならない土が舞い上がり、紫色の巨大な物体が踊りだす。なんとそれはカエルの手だった。ということは、つまり……

『ジーザス』

戦士たちが後ろに下がる。飛び出したのは超ド級のデスフロッグだった。こんな話は聞いてませんが。

『な、なんでクイーンデスフロッグがここにいるんだ!?!』

ロバートの反応を見る限り、こいつはクイーン。つまり、デスフロッグの親玉ということか。まさかこんな隠し玉を持つてくるとは。体は傷だらけだが、どうにもピンピンしていらっしやる。

クイーンデスフロッグはガパリと口を開いた。その家一軒は丸こ

と飲み込めそうな口からピンクのぶにぶにした何かが飛び出す。それが逃げ遅れた戦士たちに襲いかかった。ぺろんつとアイスクリームでも舐めるかのように地面を一舐め。それで付近の地表は一掃されていた。粘液にからめとられた戦士たちは声を上げる間もなく女王カエルの口に消えた。おいおい。

『そんなじゃ、俺は行ってくるぜ』

『あ、ヨウリ、待って！』

俺は妖力弾をぶっ放しながら女王カエルに突っ込んでいく。それに気づいた女王カエルがこちらに向けて口を開いた。敵は不用心にも自分の体内に“毒”を取り込むつもりらしい。

『さて、このスペシャルポイズンに、お前は耐えられるかな？』

俺は甲羅に引きこもった。頭と手足を引っ込めて、腹側パーツを収納すれば、綺麗な六角柱のかたちに変形する。いいねえ、イカしてるぜ！ その直後、俺は女王カエルの口の中へと導かれる。そして、食道を通って、胃に押し込まれた。

『さあ、シヨータイムだ！』

俺は弾幕を盛大にばらまいた。

* * *

クイーンデスフログはしぶとかった。10分くらいは俺の内部からの攻撃に耐えたのではなからうか。ぴよんぴよん飛び回って大変だったらしい。途中俺を吐きだそうと努力していたが、俺はしぶ

と奴の胃袋に居座り、胃粘膜をズタズタにしてやった。

ひっくり返ってびくびくしているカエルの口から帰還するとロバートが泣き顔で迎えてくれた。俺が食われて死んだと思っただらしい。ジョージは無言だったが、呆れ顔をしていた。

改めて、獲物を見る。その全長は50メートルはあるだろうか。お尻から巨大な卵がにゆるにゆる出てて、ドン引きした。あの寒天ゼリーみたいなやつね。これがデスフロッグの卵かと思うと鳥肌が立つ。そして、俺は今、女王カエルの仰向けになった白い腹の上を歩いていた。

『なんかおかしいと思っただよね』

その腹に突きささる鉄の塊を引っ張りだす。それは、特大の大砲の弾だった。こんな兵器を玉兎が使用したとは考えにくい。ということ、あと残された可能性は一つしかない。

『人間の仕業だ』

20話「重なる不運」

『クイーンデスフロッグを倒したぞー！』

『もう怯えながら暮らす必要はない！』

玉兎たちは女王カエルを倒したことで、浮かれ気分になっていた。何人かの戦士たちは女王カエルにやられてしまったが、むしろ、全滅せずにたった数名の犠牲だけでこの局面を乗り切ったことになる。俺は敵の親玉を倒した英雄に祭り上げられる始末だ。こいつらは能天気でいいよな、まったく。

『どうしたの、ヨウリ。そんな難しい顔して。みんな、あんなに喜んでるのに』

『ロバート、クイーンデスフロッグは今まで姿を現したことはなかったんだよな？』

『そうだよ。クイーンがすべてのデスフロッグの母なんだ。奴らの巣穴の最奥にいて、外に出てくることはない。デスフロッグたちが守っている。だからこそ、こうして倒せたことが奇跡なんだ』

『じゃあ、そんな大事な女王様がどうして無防備にこのこ出てきたか、気にならないか？』

『まあ、それは気になるけど……何か巣穴から出なくちゃならぬい事情があったんじゃない？』

『それだ。つまり、女王カエルは何らかの危機的状況に陥って、危険を冒してでも巢穴の外に出ないといけない事情があった。そして、俺はその事情について、予想がついている』

『え！？ どういうこと？』

『犯人は人間だ』

『ニンゲン？ って、確か、前にヨウリが言ってたアースの種族だよな。うーん、信じられないけどなあ』

ロバートはいかにも眉唾といった表情をする。自分の目で見た物でなければ納得できないのだろう。俺がこいつらの立場なら、それもつなずける。いきなり、天国からやってきた使者が敵の親玉を攻撃しました、と言われても、ハア？ としか答えようがない。

『……だが、ヨウリの意見は無視できるものじゃない』

『父さん？』

そこにジョージがやってきた。手にはクイーンデスフロッグの腹に埋まっていた砲弾の一つを持っている。『金属を加工する程度の能力』を持つジョージに見せれば、これがどういう物が理解してくれるのではないかと思って渡しておいたのだ。

『この金属の塊は、玉兎ではとうてい持ちえない技術で作られている。複雑すぎて俺にも再現できそうにない。ましてや他の村の間がこれを作ったとは考えにくい』

『父さんはニンゲンって奴らがいるって、信じてるの？』

『樂觀視はできないだろう。それに、ヨウリはこんな嘘はつかない』

『ぼ、僕だってヨウリのことは信じてるさ！なるほど、ニンゲンね……』

今はこの程度の理解でもしかたないか。俺たちはいつか人間と遭遇するときがくるだろう。そのとき、どういう行動を取るべきか、あらかじめ計画しておく必要があるな。

『ヨウリちゃんーん！』

『ぶほっ！』

『お姉ちゃん心配したんだからね！』

モニカが胸で俺を窒息させにかかってきた。まあ、ここ宇宙空間だけど。真剣に考えようとするとこれだからな。変な気負いがないことは、いいことなのかもしれないが。

* * *

村を失くした俺たちは、集まって移動を始めた。元の巣穴は木端微塵に吹き飛び、デスフロッグの死体からあふれる毒で使い物にならない。他の村に移住するしか生き延びる手はない。これだけの数の玉兔を、一つの村に全員が収まるキャパシティはないはずだ。だが、それでも行くしかない。

しかし、玉兔たちに暗い感情は少なかった。クイーンデスフロッグを倒したという事実はそれだけ彼らの希望になっているのだ。俺

たちの一団はくぼんだ灰色の地面が連なる月面をひたすら歩いて進んだ。

そして、デスフロッグの襲撃から五日が経ったその日暮れ、俺たちは目的地へと到着した。

『な、なんだあれは……！』

玉兎たちは一様に目前の光景に見入っている。そこには銀色の塔が経っていた。サーチライトが辺りを照らし、異様な雰囲気にかまれている。その塔が経っている場所は、俺たちが目指してきた玉兎の村の真上だった。

こんなことができる連中なんて人間だけだ。その要塞のようなものしい警戒の様子から見ても、とても友好的に話ができるようには思えない。おそらく、地下の玉兎たちの村はすでに制圧されていると考えた方がいい。これはやばいことになってきた。

『とにかく行ってみよう！』

待て待て。なんでお前らはそんなに考えなしに首をつっこもうとするんだ。自分たち以外の文明との接触がなかった影響だろうか。こいつらの警戒心は薄すぎる。俺が制止する間もなく、玉兎たちは銀の塔に向かって駆け出していく。

『やめろ！ とまれ！』

見つかるのは思いのほか早かった。結構な距離はとっていたと思っただが、サーチライトがこちらに集まってくる。玉兎たちはその光を見て何を勘違いしたのかはしゃぎだす有様だ。

そして、塔から何かがやってきた。それは装甲車だった。どう考えても手加減なしだ。攻撃は唐突なものだった。塔から光の線のよ

うな物が放たれる。ライトかと思いきや、それに当たった玉兎は肉を焼かれて苦しんだ。ビーム兵器だ。その光の線は容赦なく雨のように浴びせられる。相手が仕掛けてきたことを知ったときにはもう遅い。何人もの玉兎たちがやられていた。

『ちっ！ えげつねえことしやがる！』

遠距離からの一斉放射にこちらはなすすべがない。いかに俊足で走る玉兎の戦士たちといえども、光り速さで襲い来るビームの槍には敵わなかった。俺は甲羅にもぐってガードし、近くにいたロバート一家の盾になった。俺の甲羅は三人も隠れられるほど大きくない、というか一人でもいっばいっばいだが、穴を掘ってなんとかした。これは早急に撤退するしかない。とにかくビームから狙われない位置まで離れないと全滅してしまう。

しかし、玉兎たちは未知の驚異的な攻撃を前に恐慌状態に陥っていた。

『……仲間を助けに行く』

この一方的な銃撃戦に、無謀にもジョージは身を投じようとしていた。ロバートとモニカが必死で止める。

『今、外に出たら八チの巢だぜ？』

『そうだよ、父さん、無茶だ！』

『いくらお父さんでも、あんな攻撃、どうにもできないわ！』

だが、ジョージはそれでも止まらなかった。後のことは任せたと一言だけ残し、別れの言葉もなく俺の甲羅の陰から飛び出していく。

俺はこの場から動けないので、加勢に行くこともできないしなあ。どうすりゃいんだ、この状況。ビームさえなんとかできればまだ手はあるんだが。

だが、その悩みは意外にもあっけなく解決した。レーザーの猛攻が突然、止んだのだ。

21話「逆襲」

なんで急に攻撃をやめたのか、不審だった。レーザー攻撃は長時間連続しての使用ができないのか。それとも別の理由があるのか。俺は敵の様子を探るため、甲羅から頭を出す。

塔との距離は離れていて、ここからでは何か変化が起きているのが見ることができない。その代わり、月面を走って来た装甲車には動きがあった。何か、準備をしている。装甲車の屋根に巨大なパラボラアンテナのような物が設置されていた。何をする気だ。まあ、いい。とにかく今のうちに逃げなくては。

『おい、さっさとここから離れ……』

キィィィン！

その瞬間、脳内に怖気が駆け抜ける。体中の妖力がぐらぐらと熱くなり、暴れ出した。血が沸騰するようだ。全身に激痛が走る。

『あがああっ！』

俺はすぐに甲羅にこもった。だが、謎の攻撃は依然として俺を苦しめ続ける。体の中で、妖力が振動していた。内側から内臓を針で串刺しにされるような痛みで何も考えられなくなる。なにより、肉体よりも精神への被害が甚大だった。妖怪は生物よりも魂に近い存在だ。精神はより密接に肉体に結び付いている。俺の頭の中で俺の妖力が細切れになってめちやくちやくちやくに飛び回り、俺の精神を傷つけていた。

ヤバイ。俺は生まれてこの方、感じたこともない最大級の危機に

戦慄した。これは何だ。自分が何をされているのかもわからない。だが、とにかく逃げないと死ぬ。精神がボロボロになる。気を抜くと意識が遠くなる。

「……………！！」

俺は気合いで立ち上がった。甲羅から手足だけを出した間抜けな格好だが、そんなことを気にしている場合ではない。攻撃が来ている方向はわかる。あの人間たちが乗っている装甲車からだ。たぶん、さっき見たアンテナを使っているのだ。ということは電波的な何か。

ロバートとモニカは俺の足元で気絶していた。俺は二人の体をつかむと、全力でその場を離れた。二人を引きずりながら走ったので地面にこすれたり石にぶつかったりしたりしたかもしれないが、この一刻一秒を争う状況で文句は言わせない。俺だって必死なのだ。

俺はなりふりかまわず、精神攻撃電波が届かなくなるまで走り続けた。

* * *

俺は岩場の陰にへたり込む。額には玉の汗をかいていた。壮絶な嘔吐感を抑えきれない。胃には何も入っていなかったが、気持ち悪さは一向に治まらなかった。

これまで、俺は強敵と闘いながらもどこか余裕があった。俺は強者だ。負けない自信がある。確かに俺はなんでもできるスーパーマンではないが、最低限、自分の身を守ることができる。この甲羅さえあれば、どんな攻撃だって防げると思っていた。俺は自分の保身に絶対の自信を持っていたからこそ、他人の戦いに手を貸す余裕があったのだ。

だが、今回はそうじゃなかった。あの精神電波は妖力を狂わせる。

甲羅ではどうにもできなかった。俺の自信は粉々に砕かれたといつてもいい。あれは対妖怪戦において恐ろしい威力を持った兵器となる。地球の妖怪は運がよかったのだ。あの兵器があれば、人妖大戦は俺たちの大敗、いや、戦いにすらならなかっただろう。

周囲には、俺たちの他に玉兎はいなかった。確認する暇もなかったが、おそらく全員気絶させられたのだろう。もしかしたら、逃げのびた玉兎がいるかもしれないがそれを確かめる方法もない。モ二カとロバートはしばらくして意識を取り戻したが、とても元気に動ける様子ではなかった。錯乱して意味のわからない言葉を口走っている。ようやく落ちついたころにはすっかり深夜になっていた。

『ごめ、ん、ヨウリ、僕……』

『いいから休め。人間の追手がいつ来るかわからない。今は体力の回復に専念しろ』

本当なら早くもっと遠くに逃げたいところだが、二人はまだまともに歩けない。本当にやばくなったら、また引きずってでも連れて行くが。重力があんまりないから楽に運べるし。

さて、困ったことになった。人間は俺たちより強い。ビームはなんとかなるとしても精神電波には太刀打ちできない。あの塔の要塞には精神電波装置がしかけてある。正面から挑むのは無謀だ。俺たちは逃げることしかできないのか。

『ヨウリちゃん、あれ』

『なんだ、どうした？』

『あそこ、に、なにか、いる……』

モニカが丘の上を指差す。まさか、追手がここまで来たのか。俺が目を凝らすと、そこには確かに何かいた。だが、人間ではない。デスフロッグだった。気味の悪いガマガエルたちがこちらに向かってくる。しかも、一匹や二匹ではない。その数はうじゃうじゃいた。

『まったく、こんなときに！』

俺は妖力弾を威嚇射撃する。しかし、デスフロッグは止まらない。すぐさま弾幕を張って近づけさせないようにする。地面も揺れているので、地下からも進んできているのだろう。そちらにも注意を怠らないようにする。

『ん？　なんだ、何か変だ』

だが奴らは、これまで戦ってきたデスフロッグとは違う態度を取った。攻撃した俺に見向きもしないのだ。試しに妖力弾を撃つのをやめてみたが、俺たちのことなど眼中にないと言った様子で横を素通りしていく。他のデスフロッグも全部が一方向に顔を向け、ひたすら前に進んでいくだけである。

『こいつらは何がしたいんだ』

意味がわからず頭が痛くなってきた。だが、そのデスフロッグ達が進んでいる方向に気がつく。そちらは俺たちが今しがた逃げた場所だ。つまり、人間たちの要塞がある。もしかして、こいつらは人間を襲おうとしているのか。

無謀な気もするが、やれるのではないかという希望もあった。地下から一斉に攻めればなんとかなるかもしれない。人間が対策を講じている可能性が高いが、何にしてもこれは好機だ。デスフロッグが攻め込む隙に乗じて、要塞の内部に入り込めるのではないだろう

か。仮に精神攻撃電波を食らったとしても、カブクでアンテナを壊せばいいじゃないか。

反撃の糸口が見えてきた。これは逆襲のチャンスだ。

22話「のちの諏訪子である（嘘）」

『なんじゃこりゃ』

俺がロバートとモニカに肩を貸しながら、銀の塔が見える場所まで来た時、そこにはグロテスクな惨状が広がっていた。

地面を埋め尽くすほどのデスフロッグの死体が積み上がり、そこからじゅうに毒の粘膜の池ができています。そして、一番驚いたのは銀の塔に突進するような形で力尽きているクイーンデスフロッグの姿である。そいつは俺が倒したはずの、あの女王カエルだった。なんとあれだけの攻撃を食らいながら生きていたのだ。信じられない生命力である。どてっばらに穴が開いていたというのに、こんなところまでやってくるとは、いったい何がこいつをそこまでの執念を抱かせたのか。

戦いはすでに終わっていた。人間側もデスフロッグ側もどちらも動かない。まさか、ここまでの軍勢が攻撃してくるとは人間も想定していなかったのだろう。両者ともに全滅していた。玉兎の生き残りはいいかしばらく探し回ったが、見つけ出しことはできなかった。ジョージの姿もない。ロバートとモニカはひどく気を落としていた。俺は二人を肩に担ぐと、できるだけ毒を踏まないようにデスフロッグの死体の上を飛び継ぎながら銀の塔へ近づく。

塔の中も悲惨だった。内部にまでデスフロッグが侵入して、人間ともども死体の山と化していた。分厚い隔壁も突破され、奥深くまで侵入を許している。一応、警戒はしてみたが、本当に生存者は一人もいない。人間は確かに強いが、その強さはひどく偏っている。デスフロッグの死体の数に比べて人間の数は圧倒的に少なかった。せいぜい100人くらいしか、今のところ見当たらない。たったそれだけの数でデスフロッグの大群と渡り合ったのだから、脅威と言

つていい。だが、無敵ではなかった。

デスフロッグは塔の上階を目指すように折り重なっていた。塔は上に向かって建てられる物なので、上を目指すのは当然のことと言えるが、それだけの理由にしては必死すぎる気がした。まるで産卵のため上流を目指して滝を登る鮭のごとくである。

塔の機能はほぼ停止状態で、セキュリティが作動している様子はない。照明の電気は、壊されていない箇所だけ明かりが灯っていた。だが、どこの電灯も、点滅を繰り返していて目がチカチカする。電気系統がイカれているのだろうか。

最上階近くに行くと、眼下に屍累々と積み重なるデスフロッグの毒沼が見える。そこには、いつの間にか黒い霧が発生していた。それはデスフロッグ達の怨念が集結してできあがった呪いの瘴気だった。もともと、デスフロッグの毒には呪いに近い特性があった。それがこれだけ大量に集まれば、本物の呪いになってもおかしくない。俺ならあの中でも平気だが、玉兎は無事ではすまないだろう。

俺は何か使えるような武器はないか物色しながら進んだ。さすがは人間様の拠点だけあり、さまざまな兵器らしきものがある。実にSFチックだが、ほとんど俺には使い方がわからないものだらけだった。とりあえず、銃らしき形をした物を中心に漁って、それ以外にも手ごろな物を見つけたら甲羅の中にしまっておいた。

そこで発覚したのだが、俺の甲羅は四次元ポケットのように何でも無限に収納できるといっわけではなかった。見た目に反した収納力を持っているが、スペースには限りがあったのだ。新事実である。甲羅の中がいつぱいになって、これ以上詰め込めない状態になった。これでは自分の体も入れることができないので、しかたなく必要なさそうな物を外に出した。腐ってカビが生えた蜜柑とかな。

『これがニンゲンの巣なんだ。すごい……』

『まるで、夢の中いるみたいだわ。このふわふわしたものは何？』

ロバートとモニカも人間の科学技術に心底驚いているようだ。特に、建物内に空気があることに興味を持っていた。塔はいたるところが破損していて、空気漏れは確実なのだが、いかなる技術か、まだ空気のほとんどが逃げずに塔の中に残っている。そういつたことに關心を持てる程度に、二人はだいぶ体の調子も良くなって来たようである。塔内に危険はないようなので、個別行動を試みるようになった。

俺が面白そうなメカがないか探していると、ある部屋にデスフロッグが殺到して死んでいた。上階に行けば行くほどデスフロッグの死体の数はだんだん減って行ったのだが、ここだけ以上に密集している。ここに何かあるのか。俺はデスフロッグを押しつけて、その部屋に入った。

『何かの研究室みたいだな。ん？ 妖力の気配を感じる』

そこは様々な機材が置かれた部屋だった。白衣を着た人間がデスフロッグに潰されるようにして、何人も床に転がっている。デスフロッグは研究室の奥へと進もうとしていたようだ。そこには、チューブのような水槽に入れられた紫色の丸い玉が浮かんでいる。妖力はこの玉から感じた。取り出して手に取って見る。

『うわ、なんかブニブニして気持ち悪い』

どうやら、ナマモノのようである。生きている……ような、そうではないような、なんとも曖昧な気配。これは卵だ。命よりももっと未分化な、力そのものに近い状態である。俺には劣るが、かなり良質で大量の妖力を内包している。この卵が孵れば、生まれながらにして強い妖力を持つ妖怪となることだろう。

よく見たら、これデスフロッグの卵だな。だが、クイーンデスフロッグを倒したときに見た卵とは明らかに質が違った。あれは黒色だったが、こいつの色は毒々しいバイオレット。おそらく、これは次代のクイーンとなるデスフロッグの卵ではないだろうか。普通のデスフロッグは緑と紫が混ざった体の色をしていたが、クイーンは紫一色だった。

なるほど、だいたいあらずじが読めてきた。人間たちはデスフロッグのクイーンがいる巣穴を襲い、調査した。月に移住する計画をしているのなら、デスフロッグのような妖怪は危険極まりない。排除しようとしたことは容易に想像がつく。そこで、このクイーンの卵を発見し、回収した。そのことに母親エルが激怒して、卵を取り返しにここまで来たという結末だ。どこの世界でも母は強い。

結局、欲の皮を突っ張った人間の自業自得という話じゃないか。

『ま、俺の知ったこつちゃないが』

俺は卵をチューブに戻そうとして、思いとどまる。デスフロッグは全滅した。少なくとも、この場所には一匹も残っていない。この卵をここに置いて行ったところで、どうせ人間にまた回収されて、いいように実験の材料とされるに違いない。この塔が陥落した情報は人間側もすぐに知ることになる。いや、もう知っていると考えた方がいい。すぐにここはまた人間に占拠される。俺は機能が停止した要塞に立て籠もって人間と今すぐ徹底抗戦する気はないのだ。むしろ、逃げ場のないこの場所で、包囲されて精神攻撃電波を浴びせられたら目も当てられない。

これが人間の手に渡るのは癪だ。だったら、俺がここで食っちゃまえばいいじゃね？ さすがに六島苞には断然負けているが、これを食べれば結構な量の妖力が手に入る。強くなることはいいことだ。

『でも、これ、まずそうだな』

だが、それはカエルの卵。色合いから、ジャンプタニシの卵のさらにジャンボ版と言われても信じられる。俺はグルメを気取るつもりはないし、チビガメ時代はたいそうな悪食だったが、最近の主食は植物ばかりだったので、なんか抵抗がある。人型になったせいで、人間に近い感性が強まった気がする。

それに、見るからに毒あるぜ、って色してるしなあ。味見に、一舐めしてみる。

『ぺろっ！ こ、こいつは……ストロベリー味！』

俺は、黙って卵を甲羅の中にした。まあ、こいつの処遇についてはあとで考えよう。今は他にやることがたくさんある。断っておくが、これはネコババではなく、保護だよ。

23話「月の少女」

『ヨウリちゃん！』

モニカが俺を呼んでいる。クイーンの卵を拉致げふんげふん、保護した俺は研究室から出て、モニカの声がする方に向かった。

『どうしたんだ？ そんなに慌てて』

『あの、何か聞こえるの。今まで聞いたことのないような不思議な声が……』

声がある、ということは人間の生き残りがいたのか。これはなかなか危険な状況である。俺はすぐにモニカに案内を頼んで声らしきものがするという場所へ向かった。

そこは塔の最上階に位置する部屋だ。ロバートが近くに待機していた。剣を抜き、油断なく構えている。

『ヨウリ、あの部屋だよ。何か聞こえる』

ロバートもその声を“おかしな音”と評した。いったい、どんな化け物が待ち構えているのか。妖力探知を仕掛けて見たが、特に反応はない。俺は物影に隠れ、静かに耳を澄ます。

「……た……て、おか……」

『これは』

久しぶりに聞く肉声だ。なるほど、玉兎は念話でしか会話をしないから、この音が何なのかわからなかったのだ。俺はその声がよく聞こえる位置まで慎重に近づいて行く。

「たすけて……わたしを、おいていかないで……」

やれやれ。またS Sを求める声だ。経験上、こういう事態に遭遇すると、ろくなことがない。

俺は危険がないと判断し、警戒を解いた。一応、攻撃されたら応戦できる用意はして部屋のドアをノックする。

「だ、だれ？」

どう返事をしていいかわからないので、何も言わずにドアを開けた。中は、ありていに言って病室だ。ベッドが一つ置かれ、その上に少女が寝ている。長くきれいな黒髪の美しい少女だった。成長すればたいそうな美人になるだろう。だが、今はまだ幼い。それに、一目見て重病患者だとわかった。ベッドの周りには用途のわからない機械の箱がいくつも置かれ、そこから伸びる点滴の線がいくつも少女の体につながっている。

たぶん、襲撃があった間、ずっとこの部屋で恐怖に震えていたのだろう。真っ青な顔色で、クマのぬいぐるみを抱きしめている。突然、部屋に入って来た俺を見て、びくびくと震えて怯えている。よし、ここは一発ギャグでもかまして明るい空気に変えてやろう。

俺は甲羅の中に頭だけ収納した。

「怪奇！ 首なし人間！」

「きゃあああ……」

少女は布団をかぶって亀のように閉じこもってしまった。和ませるはずが、逆に怖がらせてしまったようである。失敗失敗、てへっ。

『ヨウリ、中はどうなっているんだ？』

そこにロバートとモニカがやってきた。俺が緊張していないので、二人も危険はないと判断したようだ。俺は、人間の子どもがいることを説明した。

どうやら病気のように、ここに一人で隠れていたことを伝えると、モニカはベッドの方へと歩いて行く。布団の上からでもわかるほど、少女の体は恐怖に震えている。その上から、モニカはやさしく手を置き、ゆっくりと撫でた。最初は縮こまっていた少女だったが、こちらに敵意がないことがわかったのか布団から顔を出す。

『怖かったわね。でも、もう大丈夫よ』

モニカが微笑みかけ、少女の頭を撫でる。ようやく力が抜けたのか、どつと疲れたように少女は相好を崩した。表情もほぐれている。

『姉さん、そいつから離れるんだ』

しかし、もう一人の玉兎は違った。ロバートは剣を抜き、人間の少女にその切っ先を向ける。少女は向けられた殺気に、再び身をこわばらせる。

『やめなさい、ロバート！ 怖がっているわ』

『それは人間だよ、姉さん。ヨウリだって言ってたじゃないか、人間は悪い奴らだって。姉さんも知ってるだろ？ 父さんたちが誰にやられたのか！』

『この子が悪いわけじゃないわ！ そんなことをしたところで、何の解決にもならない！』

モニカは毅然とした態度でロバートから少女をかばうように抱きしめた。

『ロバート、少し落ちつけ。モニカの言うとおりだ』

『……わかったよ』

戦争する側される側、どっちが悪くてどっちが正しいなんて、さして意味のある問題じゃない。別に俺はこの場でこの少女が殺されたって気にしないが、どう考えても利口な手じゃないことは確かだ。

『まあ、人質にはなるかもしれないからね。……僕は外を見張っているよ』

ロバートは剣を収めて、部屋から出ていった。感情的な年頃ですな。

「うっ、うぐっ……」

静かになった部屋に、嗚咽が響く。少女はモニカの服を握りしめ、その胸の中で泣いている。モニカは少女が泣きやむまで、ずっと抱きしめ続けていた。

* * *

「お姉ちゃんたちは、だれなの？」

少女はモニカから離れたが、手は握ったまま、ベッドに寝ている。話しかけられたモニカは困った顔をして俺の方を向いた。

『ねえ、私にはこの子の言葉がわからないのだけど、ヨウリはわかる？』

そういえば、少女は日本語を話している。モニカは念話を使えるので、少女にテレパシーで意思を伝えることができるが、少女の話す言葉は理解できないので、一方通行のコミュニケーションしかとれない。俺が通訳してやろう。

『俺たちのことが知りたいみたいだ。せっかくだから自己紹介しようぜ』

『それはいいわね。でも、その前にヨウリは頭を出しなさい。この子が怖がっているわ』

『失礼』

ウィーン、ガシャン。首あり人間モードへ移行します。

『俺は葉裏だ。それで、こっちがモニカな』

「葉裏と、モニカ……ねえ、ふたりは妖怪なの？」

『そうだ。妖怪だ』

首が収納されたり、テレパシーが使えるような奴らだ。少女にも俺たちが妖怪であることがわかっているようである。

「わたしは、輝夜っていうの。妖怪を見るのは、はじめてでびっくりしちゃった。葉裏はなんだか変だけど……モニカは頭にウサギさんの耳がついててかわいい」

『妖怪を見るのは初めてかー。あと、モニカのウサ耳がかわいいうって言うてるぞ』

『あら、褒めてくれてありがとう』

「お父さまは、妖怪はとても怖いものだって言ってたけど、あれはウソだったのね。モニカはこんなにやさしいもの」

輝夜の表情は笑顔だ。こうして見ると、年相応のあどけない少女である。妖怪に関する知識もない。それに病人だ。どうして、こんな子どもが危険な戦場にいるのか気になった。

「ねえ、外で何があつたの？ ものすごい音がして、がががーって建物がゆれたんだよ。お医者さまも、お父さまも、絶対ここから出るなっって言ってた。みんなどうしてるの？」

『外で何があつたかつて？ え、あー、それはなあ』

俺は答えに詰まってモニカに目くばせする。妖怪に襲撃されて人間は全滅しました、なんて正直に言えるわけない。

『大丈夫よ、私たちがいるから、心配いらないわ』

「ほんとに？ 輝夜がねむくなるまでずっといてくれる？」

『ああ、お前が寝るまで一緒にいてやるよ』

よかった、と輝夜は安堵する。まさか、この要塞が陥落したとは思っていないのだ。この少女にとって、ここは安全な場所であり、気にするべきは安心して眠りにつけるかということではない。だが、もう一つ、輝夜には気がかりなことがあるようだ。

「……さっき、もうひとり妖怪さんがいたよね？」

『ああ、忘れてた。あいつはロバート。モニカの弟だ』

「なんであんなに怒ってたの？ 輝夜、なにか悪いことしちゃった？」

『気にすんな。あいつはいつも怒ってるんだよ』

「でも……」

『いいから、もう寝ろよ。また首なしお化けがくるぞ』

「やだ！ 輝夜、もっとおはなししたい」

わがままなお嬢様は目がさえてしまったようだ。なんで月まで来て子どものお守なんかしなきゃならんだと自問していると、突然、部屋の照明が点滅し始めた。やっぱり電気系統が壊れているようだ。

「きゃあつ、な、なに？」

『ほら、お前が寝ないからお化けが来ちまったじゃねえか』

「いないもんっ、お化けなんかいないもん！」

『ヨウリ、怖がらせすぎよ！ まったくもっ』

ベッドから体を起こした輝夜をモニカが抱きしめる。そのとき、輝夜の腕につけられていた点滴の管が抜け落ちてしまった。

「あつ、これお医者さまが、はずしちゃだめって言ったの」

そう言われても点滴のつけ方なんて知らないぞ。だいたい、この医療機材らしきものはちゃんと動いているのか。確認してみると、止まっていた。ディスプレイに「ERR R」の文字が表示されたまま、動く様子がない。なんかいっばいっばいっばいってボタンを押してみたら、うんともすんとも言わない。完全に壊れていた。これって、大丈夫じゃ、ないよな。

『……もうその管、全部はずしちゃえよ。邪魔だろ』

「だめだよ。お医者さまがダメって言ったもん」

『今日くらいいいじゃん。はずさないで、モニカにだっこしても
らえないぞ』

「えっ……そ、そうね。今日は輝夜、ちゃんとお薬も飲んだし、
怖いのでいっばいガマンしたし、ちよっとくらいならはずしてもいい
かも」

俺とモニカは輝夜の体から点滴の管をはずした。ベッドの上に座
ったモニカは、膝の上に輝夜を抱えた。

『もう寝る時間だから、電気、消すぞ』

「うん」

チカチカと点滅する照明の電源を切った。暗くなった部屋は、窓から入る光に淡く照らされた。窓の外には地球があった。青い地球が光っていた。

24話「最後の夢」

輝夜の元気はどんどんなくなっていった。命の灯が燃え尽きようとしているのがわかる。本当は、一目見たときからわかっていた。その脆弱な命は消えかかっている。もともと、助からない命だったのだ。彼女の病は命を食いつぶし、終わりを迎えようとしていた。

「かぐやね、さみしかったんだ、とうさまも、かあさまも、おしごとがいそがしくて、すぐにどこかにいっちゃっ」

モニカの腕の中で、輝夜は話しつづけていた。体調が崩れたことに自分でも気づいているだろう。それを悟らせないように話し続ける。バレバレだが。

『さっき友達が来てくれるから寂しくないって、言ってたじゃん』

「そう、えーりんが、きてくれるの。えーりんは、かぐやのいちばんの、ともだち。あたまがすっこく、いいんだよ。けほっ！ けほっ！」

咳きこむ輝夜の背中をモニカがさすった。モニカは笑顔だが、ぎこちない。こっちもバレバレだ。

「でも、えーりんは、かぐやのびょうきをなおす、おくすりをつくるっていつて、さいきん、あつてくれないの。えーりんは、かぐやのこと、きらいになっちゃたのかな？」

『そんなわけねえだろ。お前はこんなところに来ずに、えーりん

と一緒にいればよかったんだよ』

「そう、かも。かぐや、わがままいって、ここにきたの。ここはとうさまの、しごとばだから、つきにいきたいって、わが、ママ、いって、とうさまと、いっしょにいたかったから……」

輝夜の父親も娘の死期が近いことを知り、最後の時間を共にすごそうと思っていたのかもしれない。死ぬ前に月の景色を見せてやりたかったのかもな。

「だから、さみしいのは、いや、なの、いっしょに、いて……」

『安心しろ。お前が眠るまで一緒にいてやるって、約束しただろ』

「そうだ、ね。かぐや、もう、ねむくなって、きちちゃった。おやす、み……」

あっけなかった。すうつと輝夜の体から生命の力が抜けていく。モニカは気づいていなかったが、その瞬間、輝夜の体はただのモノになっていた。輝夜はモニカの腕の中で、眠るように息をひきとった。

* * *

俺とモニカは、輝夜の体をベッドにもどして部屋の外に出た。泣きじゃくるモニカを慰めるのは大変だ。それにしても、自分の一族を危機に追い込もうとしている種族にこれだけ愛情を注げるモニカは、大物なのか、馬鹿なのか。たぶん両方だ。

モニカの泣き声を聞きつけて飛んできたロバートにも事情を話す。ロバートは微妙な顔をしていた。

『さて、もうここにこれ以上とどまり続けるのは危険だ。すぐにもここを離れよう』

まだ調べたいことは色々ある。輝夜にも人間に関する情報はあまり聞き出せなかった。特に軍事的な情報についてはもっと集めたいところだが、それよりも今は一刻も早くここを出るべきだ。

窓の外を見ると、朝日が地平線の向こうに昇りかけている。随分と長い時間ここにいたことになる。まったく、やけに感傷的になってしまったものだ。

ふと、外の風景の中に、何かうごめく物がいた。まさか敵が来たのかと注視すると、そこにいたのは玉兔だった。クレーターの丘の向こうから、ひよこひよここと数え切れないほどの玉兔たちがこの塔を目指してやってくる。

『仲間たちだ！ どうしてここに来たんだ？』

『ここはもともと玉兔の村があった場所なんだろう？ 仲間を引き連れて取り返しに来た、とか？』

考えてもわからない。とにかく、外に出て聞いてみよう。ああ、もし人間のことを知っているのだとしたら、耳のない俺は人間と疑われるかもしれないな。そうだ、ロボットにもらった帽子をかぶろう。これなら玉兔の戦士に……幼い戦士に見えないこともない。人間は野外で活動するときは宇宙服を着なければならぬので、耳が生えているかどうかなんてわからなかったかもしれないが。

『もしかしたら、あのなかに父さんもいるかもしれない！ おーいー！』

塔から出た俺たちは毒の霧に注意しながら玉兎たちの方へと走る。しかし、妙な格好をした玉兎たちだ。規格化された軍服のような服装を、全員がしている。ロバートたちがいた村の玉兎はもっと原始的な服装の者ばかりだったが、他の村では技術が進んでいるところもあるのだろうか。

『いや、待て、何かおかしい』

あの玉兎、銃を持っているぞ！

気づいた時には手遅れだった。周囲を銃器を持った玉兎たちに包囲されていた。玉兎に銃を生産できるほどの技術力はないはず。だとすれば、この銃は人間が玉兎たちに与えた物になる。もしか、人間と密約を結び、協力している玉兎たちがいたということか。

だが、あの妖怪嫌いの人間たちがそんなことを考えるだろうか。

『降伏セヨ。抵抗スル場合八武力ヲモツテ殲滅スル』

いや、もつとおかしなところがある。この玉兎たち、表情がない。どいつもこいつも能面のように無表情だ。そして、一番おかしい点はウサ耳だった。明らかに作り物じみている。まるで取ってつけたかのような違和感しかない。ぬいぐるみの耳を縫い付けたような印象だ。こいつら、本当に玉兎なのか？

『父さん……父さんがいる！』

『なに！？ どこだ！？』

ロバートが指差した方向に、見えた。その顔は確かにジョージのものだった。だが、ジョージではない。俺の知っているジョージは寡黙でしゃべるのが苦手な奴だが、自分の息子に銃を向けるような

男ではない。その頭には、やはり作り物の耳が生えていた。

こうなったらしかたがない。強行突破だ。俺は妖力弾を放つため、精神を集中させる。

だがそのとき、わずかに俺の頭上から殺気を感じた気がした。頭上って、空だぞ。いや、まさか……！

『ちくしょう、そこまでするか』

俺たちの真上に三機の小型宇宙船が飛んでいた。この位置からじや、妖力弾はとどかない。だが、やるしかあるまい。俺は上空に向けて弾を放つべく手を構える。

だが、それをあざ笑うかのように、天から狂気の電波が放たれた。精神攻撃電波。それも、俺が前に食らったものとは比べものにならないほどの強力な電波だった。俺は体を駆け抜ける激痛に逆らうことができず、膝をつく。脳が痛覚という感覚のみによって占領されていく。

倒れ伏す俺たちの周囲には、軍服を来た玉兎たちが平然として立っていた。そいつらは俺たちを拘束する。その記憶を最後に、俺の意識はかすんでいった。

25話「運命の出会い」

ぼんやりと意識が浮上する。ここはどこだ。俺は確か、人間に捕まった。俺は死んだのか。いや、まだ死んではない。俺は俺自身の命を感じる。ゆっくりと目を開けると、万華鏡のように回る視界が焦点を結び始めた。

「あら、お目覚めのようね、妖怪さん。ああ、月の妖怪は言葉が通じないのだったわね。でも、そんなことは些細な問題だわ。人間に捕まった気分はどうかしら？」

目の前にいるのは、小さな女の子だった。輝夜と同じくらいの歳だろうか。それにしても小賢しい雰囲気がぶんぶんしている。その少女は赤と青の二つの色をした変わった服装だった。

「月の妖怪はウサギとカエルだけだと思っていただけ、あなたみたいな新種もいたのね。解剖して調べるのが楽しみだわ。ギリギリ死なない程度で許してあげるから安心してね」

「うるせえ、全部聞こえてんだよ」

俺の体はかたいベッドに固定されていた。それも当然か。これは手術台だ。甲羅は脱がされ、部屋の隅に置かれている。手足は四方に伸ばされ、頑丈な金具で固定されていた。俺が本気を出せばこれくらい壊せないはずはないんだが、どうにも力が入らない。何をしやがった。

「あら、あなた私たちの言葉がわかるの？ 興味深いわね。あと、

あなたの体に特性の痺れ薬を打つておいたから。5時間は効果が続くと思うわ」

「そいつはご丁寧にとーも。だが、そんなこと言われたからって、諦めきれるかよッ！」

俺は力の限り手足を踏ん張った。奥歯がつぶれるくらい食いしばって力を込める。だが、いけるかと思った瞬間、しゃれにならない電流が俺の体を通って行く。

「あびやびやびやびやあああー!!」

「あははは、言い忘れてたけど、無理に動かそうとすると柵から高圧電流が流れるようになってるから」

「ごおお……オーマイガッ！」

なんてこつたい、万事休す。こいつは俺をどうする気なんだ。実験のモルモット？ 冗談じゃない。そんなことをさせるくらいならひと思いに殺された方がましだ。

「ねえ、助けてほしい？」

「ほしいです！ まじで！」

「うふふ、ダメよ」

このクソガキが。手足が自由なら泣いて謝らせるところだ。だが、それよりも俺はこいつの醸し出す空気が気に入らない。ただならぬい負の感情が見える。とうてい子ども一人が抱えるには重すぎる闇。

「……お前は何者だ？」

「自己紹介が遅れたわね。私は、そう……八意永琳とも呼んでちょうだい」

「えーりん？」

その名前には聞きおぼえがあった。輝夜が言っていた友達だ。確か、輝夜の一番の友達の名前だったはず。

「お前がえーりんなのか？ほんとに？」

「そうよ。どうしてそんな反応をするのかしら？」

「はあ、輝夜の友達って聞いてたからどんな人間なのかと思ったら、とんでもねえアバズレ……うぬぐあああ！！」

それ以上言葉は続かなかった。永琳が手元にあったコントローラーのスイッチを入れた。そして、俺は電撃を食らう。俺が暴れなくても、任意に電気で痛めつけることは可能なのか。10秒くらいは電撃が続いただろうか。体中がガクガク痙攣して歯がカチカチ鳴った。くそが、これじゃこんがりグリルにされちまう。

「なにすんじゃコラア！」

「うるさい、黙れ。下賤な妖怪の分際で、そのきたならしい口で輝夜の名前を呼ばないで」

永琳は今までの張り付けたような笑顔を止めていた。血も凍るよ

うな無表情、だが、その奥には激しい憎悪の炎が燃えている。

「今回の作戦でたくさんの人が亡くなったわ。あなたたちが襲撃したせいだね。その罪は重いわよ」

「勝手に人のせいにすんな。人間がやられたのは、人間の自業自得だ」

「そうね。確かに人間は傲慢だわ。私だってこんな一方的な侵略であたたたと接することになったことを憂いている。正直言つて、上層部のやり方は気に入らないわ。もっと穏便な方法があったでしょう」

永琳は感情のない瞳でゴミでも見るかのように俺を見下している。だつたら俺も同じように見返してやるだけだ。互いのボルテージがだんだんと高まっていく。

「でもね、私にも守りたいものがあつた。たとえば、あなたたちを滅ぼすことになつても譲れないものが。そのためならどんなことだつてやる覚悟があつた。その私の至高の目的をあなたたちが奪つた」

「輝夜のことか？」

永琳がぎりつと歯をくいしめる。もはや心のうちの憎悪を隠す様子はなかった。永琳が電撃のスイッチを押す。俺は激痛を気合いで押し込めた。こんな奴のために悲鳴をあげて喜ばせてやる気はない。

「そうよ！ あの襲撃がなければ輝夜は生きられた！ 全部あなたたちのせいでしょ！？」

「ぐうつ！ 輝夜が死んだのは病気のせいだつ！ 俺のせいじゃない！」

「違うわ！ あの子の病気を治す薬を私は研究していた！ もう少し時間があれば、あの子を助けられた！ その時間をあなたが奪ったのよ！」

「適当なこと言ってんじゃねえよ！ あの病気はもう治せないほど輝夜の魂に食い込んでいた！ だったら、あと何日あれば薬は完成したんだ！？ 何時間！？ 何秒！？ 言ってみるよ！？ おらあ！」

永琳は答えられない。それが何よりの返答だった。永琳は悔しさにうめき、涙を流していた。結局、間に合わなかったということしかない。それを永琳自信が納得できないのだ。どれだけ頭が良くても、こいつはまだ子どもだ。自分の感情を制御できずにいる。

「黙りなさい！ そもそもなんであなたは輝夜の名前を知っているのよ？ どうして私の名前を？ 輝夜から聞き出したの？ どんな方法で？」

「話をした、だけだつ！」

「……嘘よ。嘘に決まってるわ。輝夜はね、とつても臆病なのよ。人見知りする子なの。あなたみたいな妖怪と普通に話ができるわけないでしょう？ そんな見え透いた嘘について私を騙そうとしても無駄なの！ どうせ、身の毛もよだつようなむごたらしい拷問をして無理やりしゃべらせたに違いない！ ただでさえ、弱ってる輝夜に、ひどいこととして殺したに決まってるのよ！」

いい加減、俺も頭に来た。こちとらガキの戯言に付き合わされて、無実の罪をでっち上げられ、その上電撃パーティーの真っ最中だぞ。俺は輝夜の最期を見届けてやった。それも俺に出来る限りの最大級の配慮をした上でだ。そのお礼がこの罵倒か？ 反吐が出る。

「……知りたいか？ 輝夜の最期」

「ッ！！ ああああああッ！」

永琳はコントローラーを床に叩きつける。その衝撃で壊れたのか、電撃は止まった。だが、永琳の憎しみの炎は先ほどに増して熱く燃え上がっている。無表情から怒りをあらわにし、その次は笑顔にもどっていた。怖いくらいの笑顔。

「やれやれ、手加減してくれよ。人間だったらさっきの電撃で30回は死んでるぞ」

「あはははは！ このくらいでへこたれてちゃダメよ。あなたにはもっと苦しんでもらわないと。輝夜が受けた分の苦痛をあなたにも味わってもらおうわ。そうじゃなきゃ、不公平でしょう？」

くそ、今度はどんなびっくりどつきりマシーンが飛び出してくるんだよ。俺はいつまでガキのお遊びに付き合えばいいんだ。

「実はもう、あなたをどう痛めつけるか、その方法は最初から決めてたの。あなたの頭の上にあるソレよ。ああ、首が動かせないから見えないわよね。今、鏡に映してあげるわ」

永琳はそう言って手術台の上の大きな鏡を動かす。俺はそこに移動する俺自身の姿を見た。そして、俺の頭の上あたりに置かれた装置の

存在についても。

「な、なんだ？　これはウサ耳か？」

それは、作り物のウサ耳だ。そう、俺が捕えられたとき、俺たちを包囲していた玉兎たちが耳につけていたあれだ。

「これはねえ、『ウサギ型月妖怪用インターフェイス』って言うのよ。急ごしらえだからこんなデザインになっちゃったの」

「は？　何の話だよ？」

「あなたも受けたことがあるでしょう、妖怪の妖力を狂わせる電磁波。これはその応用で作ったものよ」

俺が苦しめられたあの電波の正式名称は『妖力過活性化電磁波』というそうさ。妖怪の妖力を特殊な電磁波によって外部から操作できないかという研究のもと作りあげられた。もともとは妖力を不活性化し、妖術を封じるための兵器を作る研究だったが、逆に活性化させることしかできなかった。

だが、その効果は思わぬ結果をもたらす。普通の妖怪ではこの妖力の活性化に順応できず、精神が壊れて発狂するのだ。こうして完成した兵器が『妖力過活性化電磁波』である。そして、人間は月に玉兎という特殊な妖怪のサンプルを入手した。玉兎は妖力の活性化にある程度順応できるという体質を持っていたのだ。

（なるほど、それが“フォースの循環”か）

それについては心当たりがあった。玉兎三技を使うために必要な妖力の運用法だ。フォースの循環とは、妖力の活性化のことだった

のだ。だから、玉兎は少ない妖力で高い威力の技を使うことができたのである。

「このインターフェースをウサギ妖怪の頭に移植することによって、適度に調節された妖力過活性化電磁波を脳内に発信できる。すると、ウサギ妖怪は常に軽度の“発狂状態”を維持できるようになるの。そうやって精神が程良く摩耗する状態を作り出し、その隙間にこちらが用意したプログラムを書き込むことで、何でも言うことを聞く操り人形となるのよ」

「おいおい、なに平然とトンデモナイ説明してくれちゃってんの！？」

「だいたい、それは玉兎だから耐えられるって話だろう。俺の精神が妖力活性化に順応できる保証はない。いや、確実に精神を殺される。あんな痛みに耐えられるはずがない！」

「待て！　いくらガキだからって、やって良いことと悪いことの区別くらいつくだろ！　これはぶつちぎりに悪いことだ！」

「ごめんなさい、私、まだ子どもだからわからないの」

永琳が手元の機械を操作する。すると、ゆっくりとウサ耳が俺の頭に向かって近づいてくる。あれが頭に植え付けられれば、あの地獄の苦しみをこれからずっと味あわせられ続けることになる。俺はこれ以上ないくらいに焦った。

「ふざけるな！　お前は自分が何をしているのかわかってるのか！？　あの電波はマジでやばいんだよ！　今すぐやめろ！」

「うふふ、知ってるわよ。実験に使った妖怪の末路は何度も見てきたから。怖いでしょう？ それにね、このインターフェースは私が特別に調整したのよ。通常の100倍の強さの電磁波が発生するように、ね」

俺は暴れた。手枷足枷から電流が走るが、そんなことどうでもいい。こいつは俺を殺す気だ。しかも、最も残虐な方法で。

「やめろ、死ぬ！ そんなことされたら死んでしまっ！」

「大丈夫、私の計算だと一日くらいは持つはずよ。簡単に調べてみたけど、あなたって結構頑丈みたいだから」

「一日！？ 嫌だ！ そんなことするくらいだったら普通に殺せ！ 今すぐ殺してくれ！」

「あはは、それじゃあ罰にならないでしょう？ あなたには罪を償ってもらわないと」

ウサ耳が俺の頭に迫る。なんだこのアホみたいな状況。そんなかつこ悪いもの頭にくつつけて俺は死ぬのか。笑えない。

「頼む、なんでもする……謝れって言っんならいくらでも謝る！ お前の言うことを聞く！ お願いだからこれを止めてくれ！」

「……輝夜もあなたにそんなふうになんかに命乞いしたのかしら？ もしあなたが私の立場だったら、そんな願い、聞き入れると思う？」

「俺は輝夜を殺していない！ 輝夜の最期を、あいつが安心できるように見守ってやった！ お前は勘違いしているんだ！ 俺は何

もしてな、あ……！」

頭頂部にウサ耳がくっついた。その瞬間、脳みその中を何かに蹂躪された。視界が歪む。視覚が変わる。色とりどりの極彩色で展開していく。激痛を通り越した先にあつたのは絶望だった。

「ソうだ、云いワスれてTAW。セツカくUサギさんRASIKUなつたンデスもNO、尻尾もTYAんとツケてAGENAITO

ずぐんとケツに何かが食いつく。その衝撃で俺の目の前は砂嵐になった。もう何も見えない。聞こえない。深く深く、意識が沈む。どこまでも下に落ちていった。

26話「アナザー・サイド・永琳」

輝夜の訃報を知らされた。私は自分の研究室に閉じこもり、ひとりきりで泣いた。

先日完成したばかりの月に作られた第一調査基地。輝夜はそこで働く父親に連れ添われ、地球周回上に位置する宇宙ステーションから月へと向かった。昨日のことだ。本当は、病状が悪化の一途をたどる輝夜をステーションの外に出したくはなかった。新造の基地よりこちらの方が設備もそろっている。輝夜の体のことを何もわかっていない彼女の父親を恨みもした。だが、彼は政府の長官だ。私が意見できる相手ではない。それに、今回の外出は輝夜自身の意思でもあった。

万が一のことを考えなかったわけではない。そのための対策はされていたはずだった。だが、悲劇は起きた。妖怪の群れに基地は襲撃され、全滅した。原因は不明、生存者なし。襲撃時に基地からステーションへの増援要請はあったのだ。だが、軍の上層部は基地の防備を過信していた。ことの重大さに気づいたときには、すでに基地は陥落寸前の状況だった。その惨状にしり込みした上層部はさらに兵の派遣に手間取り、結局、軍が動き出したのは襲撃発生から6時間が経過した後のことだった。

私の権限で知り得た情報はここまでである。上層部は他に後ろめたい事情を何か隠しているはずだ。一般市民には、情報統制によって不幸な事故があったとしか伝えられていない。悔しさで涙が止まらなかった。

私は今まで輝夜を救うために頑張ってきた。彼女だけが、損得なしに私のことを友人として受け入れてくれた唯一の理解者だった。私は自分の異常性を知っている。私の技術者としての才能は異常だった。年齢にそぐわない頭の良さ。それによって得られた物は今の

地位くらいのものだ。失った物は多すぎる。輝夜は掛け値なしの私の親友であり、希望だった。

私は一番大切な友達を失った。研究室にならぶ、薬の資料。すべてを輝夜のためにささげてきた。全部、無駄になった。あれだけ燃え盛っていた、研究に対する情熱がなくなっていく。糸が切れた人形のように、私は無気力だった。

基地から帰還した宇宙船は亡くなった人たちの遺体を回収してきた。聞いた話では、どの遺体も無残なもので原形をとどめているものは、ほとんどないという。私はとても輝夜のところへ行く気にはなれなかった。ぐちゃぐちゃになった彼女の死体を見て、正気を保てる自信がない。

そこで得た情報の中に、戦地で確保したという妖怪がいるというものがあった。基地を襲撃した妖怪はカエル型月妖怪の群れだということとは知っていた。兵が基地内と周辺の確認を行った際、それらの妖怪はすべて死滅していたという。しかし、その中でウサギ型月妖怪二匹と新種と思われる月妖怪一匹の生存が確認された。軍は戦闘の状況を聞きだすために、その三匹を捕獲していた。

上層部は私にこの妖怪たちの処理を命じた。新種妖怪の調査とその後の処分を任された。思えば、あのときから私の心はおかしくなっていた。

妖怪とは人間をエサにする獣である。彼らが人間を襲うことは種族的な本能であり、それは種としての正しい反応だ。だから、人間はそれを真つ向から叩きつぶすことに罪悪感などもたなくてよい。だが、私はその単純で淡泊な関係を越えた感情を抱いてしまった。憎しみだ。妖怪が基地を襲い、輝夜を殺した。それは紛れもない事実である。私を無気力から引き揚げた原動力は憎悪という感情だった。

妖怪は別の部門で簡単な検査をされて運びこまれてきた。新種妖怪は危険度最高ランクにあたるレベル5の妖力を保有していた。まずはこの妖怪から尋問することに決める。

「……？」

焦点が定まらない目つきで部屋を見渡す妖怪に声をかける。月妖怪が地上の言語を理解できないことはわかっている。これは話しかけているというよりも、自分を冷静にさせるための無意味な行動だ。なるべく感情を表に出さないように心がけた。

だが、気がついたときには悪魔のような思考を行っている。それでも私は逡巡した。これは私の個人的で身勝手な感情だ。その赴くままに暴走することは間違っている。調整済みの三つのインターフェイスを使用するつもりはなかった。この妖怪がある言葉を発するまでは。

「お前がえーりんなのか？　ほんとに？」

本当は違う。私の名前は八意×××という。永琳の名は輝夜がつけてくれたものだ。発音しづらいと文句を言った輝夜が私にくれた名前。私の一番の宝物だ。輝夜がいなくなった今、その想いはいつそう強くなる。だから、この名前を名乗ってしまったのかもしい。だが、なぜこの妖怪がそんな反応をするのか気になった。そして、その事実私の心をかき乱す。

「はあ、輝夜の友達って聞いてたからどんな人間なのかとと思ったら、とんでもねえアバズレ……うぬぐあああ！！」

妖怪が何を言ったのか、理解できなかった。永琳という名前は私と輝夜の間でしか交わされない言葉だ。それをなんでこの妖怪が知っている。それに輝夜から聞いたと言った。こいつは輝夜と話したのか。そのとき輝夜は生きていた。こいつは輝夜に何をしたんだ。

妖怪は何もしていないと言い張っている。輝夜は病気のせいで死

んだという。信じられない。何もかも嘘としか思えない。仮に本当に病気が原因で死んだとしても、襲撃は輝夜に負担をかけた。襲撃さえなければ輝夜は生きながらえ、輝夜を救うための薬を私が完成させていたのだ。

「適当なこと言ってるじゃねえよ！ あの病気はもう治せないほど輝夜の魂に食い込んでいた！ だったら、あと何日あれば薬は完成したんだ！？ 何時間！？ 何秒！？ 言ってみろよ！？ おらあ！」

言い返せない。悔しい。もう後戻りできないほどに、激情が私を支配していた。インターフェースをこの妖怪に取り付けないと気が済まない。

それまで余裕を残していた妖怪は急に焦り始めた。いいがまだ。輝夜も、こうして苦しめながら殺したに違いない。許せなかった。生まれてこの方、ここまで感情をあらわにしたことはない。私は、やめてくれと泣きながら懇願する妖怪を見捨てる。装置を止めることはなかった。

それからは、いつも通り。実験で精神が壊れた他の妖怪と同じだ。物言わぬ人形になった。しかし、私の心は晴れることがない。

「ははは……」

乾いた笑いがこぼれる。それは自嘲だった。自分の浅はかさに嫌気がさす。それでもとまらない憎しみ。私はどうすればいいのかわからなかった。

インターフェースを取り付けた妖怪は、静かに目を閉じて動かない。今頃、終わることのない悪夢を見ているはずだ。しかし、その体はインターフェースから送られるプログラムによって、こちらの思い通りに動かすことができる。

「あなたが悪いのよ……私だってあの子と最後のお話をしたかったのに……もつと、たくさん一緒にいたかったのに……」

ただの八つ当たりだ。枯れたと思っていた涙がまたあふれ出す。妖怪の少女はほとんど人間と変わらない容姿をしている。深い眠りについたその顔は美しかった。まるで、王子様のキスを待つ眠り姫のように。だが、その双眸は唐突に、ひとりでに開かれた。

「オレハヤツテナイ」

「ひっ……！」

勝手に口を開く妖怪。私は心臓が縮みあがる思いをした。そんなことはありえないのだ。この妖怪の意識は完全に掌握している。だから人形。人形はひとりでにしゃべらない。

「オレハコロシテナイ」

無機質で抑揚のない声。だが、はつきりと喋っている。私は床にぺたんと尻もちをついていた。血の気が引いて行く。気味が悪いなんてものじゃなかった。

「だ、黙りなさい！ 話していいと命令はしてないでしょう!？」

「オレノセイニスルナ」

妖怪の体がボコボコと膨れ上がる。それまで可憐な少女の形を持っていたソレは、異形の物体へと変化していた。威圧を実体化させるほどの妖力があふれている。それはまるで樹木のお化けだった。

体のところどころに緑の葉が生えている。

拘束具から発生する電流などもせす、強引に破壊して脱出された。その物体の膨張はなおも止まらず、あっという間に研究室を覆い尽くすほどの勢いで成長していく。壁には蔦が張り巡らされ、肉なのか植物なのかわからない怖気の走る物質が脈動しながらぶよぶよと膨らんでいく。

『コロシテヤル』

もはや私にどうにかできる状況ではなかった。私に向かって蔦が伸びてくる。足に絡みつこうとするそれを必死で振りほどいて研究室の外に出た。半泣きで扉を閉めて緊急警報のスイッチを押した。すぐさま武装した兵士が駆けつけてくる。

事情を説明して後はここを兵士に任せようとしたが、まだ詳細な状況がわからないので、ここにいると言う。一般の兵士風情が誰に向かって命令しているのだ。私はこんなところに1秒でもとまっていたくはなかった。私の慌てぶりを見てただ事ではないと感じたのか、兵士たちも緊張し、余計に私を開放してくれる様子がなくなった。

研究室は危険な実験を行うことも想定されている。もしものときは隔離できるように、その扉は内部と外部の空間を完全に遮断できる構造になっている。扉を閉めた今はさっきまでの悪夢が嘘のように静かだ。とにかく扉を開けなければ中がどうなっているかわからない。兵士たちは意を決して封印を解いた。

その途端、中からあふれ出すナニカ。半固体状のうごめくナニカが我先にと外に出てこようとする。扉を開けた兵士はあっけなく飲み込まれ、音もなく姿を消した。他の兵士は銃弾を撃ち込むが、めり込むだけで効果がない。レーザー兵器で焼き切ってもすぐに再生する。

幸運だったのは、最初に飲み込まれた兵士が生きていたことだろ

う。彼は最期の力を振り絞って扉を再び閉めたのだ。降りてきた扉に引きちぎられ、ナニ力はようやく活動を停止した。

私は迷わず制御室へ連絡を入れた。研究室の区画をステーションからパージする。言うまでもなく最終手段だ。一応、その権限は有しているが、お咎めはあるだろう。だが、そんなことを言っている場合ではなかった。なによりも恐怖という感情が先行していた。

そして、その命令は実行された。

* * *

私は何をしているのだろうか。

後に残ったのは、心を埋め尽くす空虚だけだ。

取り返しのつかないことをしてしまったと、事が終わってからようやく認識する。私を手を下した哀れな妖怪は、大気圏中で燃え尽きながら地上へ落ちていったことが確認された。

今、私は遺体安置室にきている。会議を終えた私の足は自然とそこへ向かっていた。

輝夜に会いたかった。あの妖怪が言っていたことを確かめたかったのだ。

「輝夜……」

その体は私の記憶にある輝夜のまま。誰にも蹂躪されたあとなど残っていない。そして、その表情は安らかな笑顔だった。

輝夜が眠るその傍らで、膝をついて泣き崩れた。私は、これまでにない、本当の意味での妖怪に対する罪悪感を抱いていた。

「ごめんなさい……」

27話「ウサギは何を見て跳ねる」

俺は森の中を歩いてきた。ドスグロイ森。

たぶん、森。木らしきモノがたくさん生えているからな。それにしても、へたくそな木だ。クレヨンで塗りつぶしたみたいな色をしている。もっと丁寧に色づけしてやれよ。

こんなところにいたら気が滅入る。俺は休むことなくこの森を歩き続けていた。一日も休まない。しかし、ここには太陽の光がとどかないので、いつが昼でいつが夜かわからないのだが。早く出たい。俺はシヨンベンしたいのガマンしてるんだよ。さっさと出してくれないか。

『げろげろげろ』

どこからともなく笑い声が聞こえてくる。いつものことだ。それより、俺の体はどうなっているんだ。テキストな色付けしやがってだから、丁寧にやれって言っただろ。見る、腕のところの肌色はみ出してる。ちゃんと線に沿って塗れ。お前は塗り絵も満足にできないのか。

『げろげろげろ』

『うるせえなあ』

この笑い声、上から聞こえてくるんだよな。俺は上空を見上げる。その視界の遙か上まで伸びあがる木の幹。遠近法の原理に従って、天を突くその先端はかすんで点になる。光はとどかない。

見あげていると、何かが落ちてきた。わざわざ俺の真上にだ。俺

はぶつからないように急いで移動する。

それはさつきまで俺がいた地面に叩きつけられた。赤い汁が飛び散る。なんだこれは。

『げおRげるGREENO』

それは卵だった。赤い卵。魚卵のやわらかな膜が破れ、中からどろりとヘドロが出てくる。じっと見ていると、大きな目玉が二つあることがわかった。しっぽがあつて、オタマジャクシのよう。孵化の直前だったのだらう。今にも死にそうなツラしてるくせに、俺のことを見て笑つてやがる。

『お前がずっと笑つてたのか。ん？ うおっ！？』

また上から卵が降つて来た。べちゃりべちゃりと地面に落ちて、熟れ過ぎた柿のように散乱する。運悪く、その一匹が俺のすぐ近くに落ちてしまったために、汁がひっかかってしまった。

『汚ねえ、汁飛ばすんじゃねえよ！ クソが！』

俺は潰れた卵を蹴り飛ばす。いけない、足にも汁がくっついてしまった。

『あーもー、最悪だ………』

べちゃり

足元を確認していた俺の頭の上に何かが直撃した。吐き気を催すほど生臭く赤黒い粘液が俺の頭上から垂れてくる。最悪だ。

俺は頭の上からやわらかい肉の塊を引きずり降ろした。そいつは

『げろげろ』

いっぱいいる。無数にいる。木の枝に実っている。新たな生命を
実らせる樹。そして、その命を冒瀆する。

『落ちてこい！』

俺は跳ねる。ジャンプジャンプ。

赤くて丸い月見て跳ねる。

でも、とどかない。奴らは俺の遥か高みにいる。俺を見下して笑
っている。

『そうかヨそうか！ なら、俺がお前らのところに行つてヤル！

一匹ノコラずもぎ取つてヤル！』

俺は木の幹に手をかける。つかまりどころのない真っ直ぐな木。

爪を食いこませてでもしがみついた。そして登る。ひたすら昇る。

その俺の顔面に向けて赤い月が落ちてくる。登っている最中だ。

避けることはできない。月がぶつかることに、俺の体が赤く染まる。

俺の定義がわからなくなる。

『チクシヨウ！ フザケヤガツテ！ イマニミテロ！』

どこまで登っても終わりが無い。地上はかすんで見えなくなった。
それでも木は上へ上へと続いている。いったいつまで登ればいい
んだ。このままじゃ、頂上にたどりつくより先に俺が俺でなくなっ
てしまう。

そのとき、俺の行く手に何かがぶら下がっていた。今まで一本も
なかった横枝がある。そこに、ウサギの首が吊り下げられていた。

真っ赤に塗れて、輪郭しか残っていない。

【ヨウRI、無理DAYお。キミは地上NIもどツタ方GII】

『ウルセエ！ オレハイク！』

【不可NOだ。僕たちMITAI二なRIタイノ？】

お前の言うことは聞き取りづらい。

俺は気にせず登って行く。しばらくすると、またウサギの首がいた。

【やめたHOUがいいWA。今SUぐ引き返シテ】

吊り首を引きちぎって捨てた。ウサギの首はみるみる下へ落ちていき、すぐに見えなくなった。

それから何時間経ったか覚えていない。何日か経ったかもしれない。あるいは、何秒かだったのだろうか。

なんでたどりつけない。もう十分登ったはずだ。頭は赤く染まっていた。もうそこは“俺”じゃない。これは毒だ。俺という存在を殺す毒。早くしないと俺のすべてが毒に染まる。そうすれば、あのウサギみたいに意味のわからないナニカにされてしまう。

俺を突き動かす力の源は憎悪だった。ひたすらにあの赤い月が憎い。怒りではらわたが煮えくりかえって口から飛び出そうだ。必ず俺の手でもぎえる。

『オチ口』

もぎりとする。

『才子口』

永琳、俺はお前を。

『才子口！』

28話「起きたら花畑」

俺はあれからどうなったのだろうか。

永い悪夢を見ていた。終わりのない悪夢。だが、俺はそこから抜け出した。

依然として俺の妖力は電波によってかき乱されている。一瞬でも気を抜けば、あの悪夢に逆戻りだ。それだけはなにがなんでも避けなければならぬ。二度とあんな夢はみたくなかった。

俺が目覚めると、そこは花畑だった。天国にでも来たのかと思っただが、すぐにその考えは否定できた。空に月があったのだ。ということは、ここは地球である。俺は、どういう経緯かまた地上へもどってきていた。

ここが月ではないという事実には俺は落胆した。いや、落胆なんてものじゃない。絶望した。永琳は月にいるのだ。地球からどうやってあいつのところへ行けばいいのだ。

俺の姿は一本の大きな木になっていた。まるで六島苞である。体に残る妖力の性質が、無意識にこの形をとっていた。そして、その妖力の量を見て愕然とする。とんでもない増量だった。それはつまり、俺がとても長い年月を生き証である。その量は、千年や万年というレベルの増加量ではなかった。

まったくもって嬉しくなどない。永琳は人間だ。この億にも届くつかというほどの歳月を今もまだ生きているはずがない。俺は絶望を通り越して発狂しかけた。悪夢と現実との間を何度もさまよった俺がこうして正気を保っていられるのは、ひとえに永琳という存在がいたからである。あいつへの復讐心が俺を悪夢からの解放へ導いたのだ。やり場のない憎しみは、それでも消えず、静かの俺の心の奥底に沈澱していった。

「今日は気分が悪いみたいですね。大丈夫ですよ、私がついていきますから」

そんな俺の心の支えとなったのは、一匹の妖怪だった。彼女は俺が悪夢にうなされていると、俺の傍にずっと一緒にいてくれた。別に一人が心細かったわけではないが、彼女はどうかやら植物に関する能力をもっているようで、傍にいてくれるだけで俺の精神はいくらか和らぐ。

彼女は珍しい人型の妖怪だった。緑色の髪で、赤いチエツクの柄のベストとスカートを着ている。人の形をとれるということは、それなりに力をもっていると推測できた。俺を中心として円のように作られた花畑も、この妖怪が世話をしているようだ。彼女は植物の世話をすることが好きらしい。

「えへへ、今日も人間さんたちにやられちゃいました……」

だが、彼女は好戦的な性格をしていなかった。そればかりか、妖怪として致命的なほどにお人好しである。人間をおどかさどころか、薬になる薬草を提供する始末である。提供というより無理やり強奪していると言った方がいい。彼女が強気に出ないことにかこつけて、人間は執拗に薬草を寄こせと迫ってきた。渡さなければ退治すると脅してくる。お人好しの彼女は断るということを知らないのか、言われた通りにしていた。

害がないのでお目こぼしされているが、彼女も妖怪であることに違いはない。ときには人間から攻撃を受けて、傷ついて帰ってくるときもあった。

彼女は人間を襲うことはしないので、自分で妖力を調達することできない。その代わり、植物たちから微量の妖力を少しずつ分けてもらい、飢えをしのいでいる。なんとも情けない限りだ。だが、世話になっっている身なので、俺もケチらず渡している。求められる

分よりも多く妖力を渡していた。

「こんなにたくさん……いつも、ありがとうございます！」

億年生きた俺からすれば、髪の毛の先ほどもない微々たる妖力だ。使いどころもないし、いつそのこと全部渡してしまっても構わないのだが、彼女が受け取ろうとしない。

俺は妖力をもった木の妖怪として彼女に認識されているようだ。妖力の大半は根っこの下にある甲羅に溜まっているので、妖力がダダ漏れというわけではない。しかし、俺の妖力によって、この辺り一帯の大地は肥沃なものへ変化しているようである。これも六島苞の妖力のなせる業か。いつも感謝されるのだが、俺は何もしていないので困る。

俺は自分から彼女に話しかけることはなかった。念話を使えば木の姿でも話是可以する。だが、最初はそんな余裕はなかった。狂気に思考がもって行かれないようにするのに精いっぱい、彼女の話に付き合っている暇はなかった。しだいに安定してくると、鬱陶しくて仕方がないと感じるようになった。いちいち木に話しかけてくる変な女である。無視し続けていた。

それでも、彼女は俺に話しかけ続けた。最低、一日に一回は声をかけてくれた。それは、悪夢に苦しむ俺を助けようという彼女のやさしさだ。俺はそのうち、彼女の話に耳を傾けるようになっていた。つまらない世間話ばかりで面白みはないが、それでも一人で考え込むよりましだ。復讐という生きる目的をなくした俺は、それ以外の何かに目を向けていなければ、すぐに狂気に取り込まれてしまう。彼女がいたからこそ、これまで俺は自分ではない“ナニカ”になることなく、今もここにいらることができるのだ。

「そろそろ季節は冬ですね。見てください、今日はこんなにいっぱいドングリ拾いました！」

俺は彼女の名前を知らない。たぶん、最初に自己紹介したのだから。そのときの記憶が俺にはない。

俺はそれからしばらくの間、名前も知らない妖怪とともにゆったりとしたあてどない時間を過ごしていた。

29話「お話しよう」

「おい、花妖怪！ 言っておいた薬草はちゃんと用意したんだろ
うな？」

「は、はい！ 今もってきます！」

ある日、人間たちが俺たちの花畑に来た。小汚い着物を来た山賊のような連中だ。俺の世話を焼いてくれている花の妖怪は、以前に頼まれていたのであろう薬草をもっていく。

「なんだこれだけか？ もっとねえのかよ！」

「も、もうありません……」

季節は冬。木々は葉を落とし、雪化粧をしている。緑など生えて
いるはずもない。彼女がもっていた薬草は、夏のうちに乾燥させて
保存していたものだった。

「ちっ！ これだけじゃ全然足りねえ。お前、妖怪なんだろ？
なんとかしろよ」

「そんなの無理です」

「使えん奴だ。あのなあ、お前みたいな弱小妖怪いつでも退治で
きるんだぞ？ もっと人間様に誠意をもつてだな……」

「アニキ！ こっちになんか草っぱいのが生えていますぜ！」

人間の一人が花畑の雪をかき分けて、新芽を探す。春夏とにぎわいを見せたこの花畑も雪が積もり、さびしいものだった。ただ、地中には種が埋められている。春になればまた元気に育ち、美しい花を咲かせるだろう。その前に摘み取られなければの話だが。

「そ、それは薬草ではありません！ 採らないでください！」

「まあ、薬草なんて誰も見分けつかないだろ。余計な草で水増しして売りつければ、なんとかなるか。よし、全部採っちゃまえ」

「やめてください！ ひどいことしないでください！」

「うるせえ！ お前は黙ってる！」

人間の一味の親玉らしき者が花の妖怪を蹴りつける。彼女は身を丸めて防御するだけで、反撃しようとはしなかった。そのうちに、手下の人間たちが花畑の芽を摘み取ってしまう。新雪の白い絨毯が敷かれていた畑は、人間たちに踏み荒らされて見るも無残なものだった。

「春になったらまた来るぜ」

人間たちは好き勝手をはたらくと、足早に引き返していった。起き上がった妖怪は、体についた雪をほらいおとす。そして、自分が丹精込めて育ててきた畑の惨状を見て、目に涙を浮かべた。

「うぐっ、ひぐっ、なんでこんなことするのぉ……！」

彼女は俺のもとへとやってくる。その根元でうずくまって泣き続

けた。人間がここまで来たのは初めてだ。この場所は知られていなかったはずだが、いつの間にか彼女はあとをつけられていたのかもしれない。

腹が立った。俺は今まで一度も彼女と口を聞いたことがない。彼女は最初から俺のことを言葉が話せないものと思っっているようだ。俺も最初は彼女のことを無視していたから、話しかけるタイミンクを逃したということもあって、これまで何も言わなかった。だが、今日ばかりは腹にすえかねる。

『おい』

「っ！？ だ、だれ？」

『俺は木だよ。木さんとも呼べ』

「もしかして、あなたなの！？ お話できるのね！」

彼女はまだ泣きつ面だが、嬉しそうな笑顔になる。そんな顔している場合じゃないだろう。

『お前は馬鹿か』

「へ？」

『なんで人間にやり返さない』

なによりもイラつくのは、こいつの態度だ。さっききた人間連中に言うことは、特にない。人間が妖怪を敵視することは当然だからだ。あいつらがやったことは間違っていない。問題はこいつにある。

『妖怪は人間を襲うものだ。人間は妖怪を恐れるもの。それが俺たちの存在意義だろう。なのに、お前は人間を恐れている。ちゃんちゃらおかしいぜ』

「で、でも、私、みんなと仲良くしたいんです。最初から理由もなく闘おうとするなんて、おかしいと思いませんか？」

『お前の頭の方がおかしい。俺たちは理由なく人間を襲う。それが妖怪つてもんだらう。前提が間違ってるんだよ』

「確かに、そうかもしれません。でも、私、思うんです。お花を見ると幸せな気持ちになりませんか？生きていける元気をもらえるとと思いませんか？そんな気持ちにさせてくれる花たちは、すばらしいものだと思うんです。私は花畑を作って、いろんな人にこの気持ちを伝えたい。だから、人間さんとも仲良くしたいんです」

『くだらん』

一言で切り捨てられた花の妖怪は、しゅんと背中を丸めて見るからに落ち込んだ。花なんてただの花だろう。それを見てどんな気分になるかなんて、見た本人の主観次第だ。それで、幸せになれるかなんてわからない。

「なれますよ！ 幸せになれます！」

『それはお前のエゴだ。そんな押しつけがましい幸せなんて、俺だっただけ願っただけだ』

泣きやんでいた彼女の目に、また涙が浮かんできた。

「でも、私はっ、お花が好きなんですっ！ そんなこと言われたっつて、諦めきれませんよお……！」

『だったら、お前は考えを改めるべきだ。他人のためになにかしようだなんて思うな。お前は、お前のために花畑を作れ』

「え……？」

『妖怪がなんで人様に気を遣ってやらなきゃなんねえんだ？ やりたいことがあるんなら、自分のためにやれよ。それで、それを邪魔する奴は片っ端から排除しろ』

他人のためにやることなんて、あとでいくらでも言い訳がきく。

自分のためにやらないことは、いつまで経っても報われない。むしろ、彼女はその“幸せ”を押し付けるべきだ。妖怪は理不尽の象徴。それが妖怪らしいってものだ。

『だが、そのためには力がある。力がないと何もできない。何も守れない』

「私にそんな力なんてありません……」

『だったら、一生人間にこき使われる生活を送るだけだ。花畑も諦める』

「……」

彼女は黙り込んでしまった。これで何かが変わればいいが。柄にもなく説教垂れてしまった。俺が言える筋じゃないのにな。

30話「希望の光」

春になったら来ると言っていたが、約束通り、また人間がここへ来た。

最近は俺の考えを受け入れ始めたのか、花の妖怪は人間との接触を拒むようになった。まだこちらからけしかけるほどの度胸はないが、後は本人の成長次第だろう。

冬の間は草木が育たないので人間側との関わりは薄かったが、春になって啓蟄がごとく人間も活動を始めたようだ。

「木さん！ 木さん！」

こいつは何を言ってるんだ？ 奇声の練習か？

「木さん！ 返事をしてください！」

『ああ、そうか。木さんって俺のことか』

そういえばちゃんとした名前を覚えてなかった。まあ、別に困らないので今のままでいいか。俺もこの妖怪の名前知らないし。

「この森に人間たちが入ってくるのを見ました！ この花畑の方向に向かって来ています。私、どうすればいいのか……」

『普通に追い払えよ』

「それができたら苦労しません！」

元気に断言するな。彼女は人型の姿をとれるだけあって、相応の妖力をもっているはずなんだが。

ほどなくしてやって来た人間たちは団体と言っていていくらいの数がいた。警備の兵のような格好の奴らが多い。その中に、冬に一度ここへやってきた人間もいた。そいつらがこの団体の道案内をしたようだ。

「ここが噂の妖怪が棲む地か」

「へい、そうでございます」

一人だけ、馬に乗っている人間がいる。そいつだけは着物の質が他とは違って豪華だった。この中で一番偉い奴なのだろう。

ただ豪華とは言ってもちよつと色がついた程度の着物だ。花妖怪の話聞くうちに前から気になっていたのだが、どうもこの時代の人間たちの文明レベルは低すぎる。俺が眠りにつく以前の地上の人間の文化はもつと発展していた。あれからとてつもない年月が経ったのだから、今頃はSF映画のようなスーパー未来都市があふれかえっていてもおかしくない。もしかして、それこそSF映画のように地球の文明は一度滅亡して、再び人間の発展が起き始めているということなのか。

「おほん！ 我は藤原不比等様の使者である。お前が都で噂になつておる花の妖怪で相違ないか？」

「は、はいっ！」

「聞けばおぬし、妖怪でありながら人に施しを与えるとか。なにを企んでおるのか知らぬが、ちよつどよい。我が主が求める品、
“蓬萊の玉の枝”を差し出せ。さすれば、今日のところは見逃してし

んぜよう」

「ほうらいのたまのえ？　なんですかそれ？」

「隠しだとしても無駄であるぞ！　早く渡すのだ！」

まったく滅茶苦茶なこといやがる。花妖怪は本当にそれが何なのかわからないと言っているのだが、偉そうな人間は一向に詳細を説明しようとしなない。ただ差し出せと迫るばかりだ。

「ここには陰陽師も連れてきておる。嘘をつけばお前など一ひねりだぞ？」

「ほ、本当に知らないですよー！」

なんか厚ぼつたい服を着た連中が札をかざしながら前に出てくる。札からは嫌な気配がした。妖怪とは相いれない代物だということはすぐにわかる。妖力とは異なる、別の力が宿っている。あれはなんなのだろうか。

花妖怪もその札の力に気押されているようだ。泣きべそをかいて知らないと言呼する。その様子を見た人間は、陰陽師たちを下げさせた。

「浅ましき妖怪よ。すでに調べはついておるのだ。そこに生えている木こそ、“蓬萊の玉の枝”のなる木であろう！」

そう言つて人間が俺を指差す。いや、違つし。俺はそんなわけのわからん名前はしていない。

「その木を切り倒させてもらつぞ」

「ダメです！ この木さんはこの土地に恵みをもたらす大切な木なんです！」

「そのようなこと、陰陽師の占いには出ておらぬ。おとなしく譲渡せば、お前の命は助けてやってもよいのだぞ？」

花妖怪は怯えていたが、俺の幹にしがみついて一步も引かなかった。斧を持った人間たちが近づいてきても、頑として動かない。

「ええい、そこをどけ！ これは藤原不比等様よりたまわった命であるぞ！ それに逆らうとは、なんと不届きな妖怪よ！」

「どうして木さんを切り倒さなくちゃならないんですか！？ 納得がいきませんか！？」

「我が主はかぐや姫様への求婚の約束として、“蓬萊の玉の枝”を差し上げることを誓われたのだ！ 期限はもう間もない。なんと少しでも用意せねばならんのだ！」

勝手な言い分だな。しかし、かぐや姫か。月で会ったあいつの名前を思い出す。

俺は永琳のことは憎んでいるが、あいつのことは好きでも嫌いでもない。仮にあいつが生きていたとしても、ただの人間とただの妖怪というだけの関係でしかなかっただろう。

かぐや姫への求婚……たしか、高校のとき古典で竹取物語を読んだな。もうほとんど覚えていないが、そんな内容の話があったはず。五人の貴族がかぐや姫に求婚したが、その課題として伝説上の宝物を持ってこいとパシられる。火ネズミのなんとかとか、仏のあれとか、もう思い出せん。その中に“蓬萊の玉の枝”もあったはずだ。

当然、貴族たちは本物を用意できずに贋作を持って来てごまかそうとするが、すべて見抜かれてしまうという話だったと思う。

と、いうことは、今は前世の世界でいう平安時代に当たるのか？
そもそも竹取物語なんておとぎ話だ。ただ、ここは妖怪が実在する世界である。かぐや姫みたいに月からやってきた宇宙人の話が本当だったとしても、今さら驚かな……

さて、月から来た、だと？

「その木から離れるのだ！ お前も一緒に切り倒されたいか！」

「嫌です！ どっちも嫌ですっ！」

「しかたない、陰陽師たちよ、この妖怪を始末……っ！？ な、なんだこの揺れは！？」

かぐや姫は竹から生まれ、絶世の美女へと成長する。様々な男性から求婚を受けるが、それをすべて断る。なぜなら、彼女は月の世界の人間であり、月へ帰らなければならぬからだ。

これははたして偶然の一致か？ 確かに俺はあるとき、輝夜が死ぬところを見た。だったら、ここで話題が上がっているかぐや姫はまったくの別人なのか？ そうだとしても、月の世界となんらかの関係をもつ人物なのかもしれない。そいつとコンタクトがとれれば、俺に植え付けられた狂気を取り除く方法がわかるかもしれない。

そして、もしもかぐや姫が輝夜本人だったとすれば、彼女は死んでおらず、億もの年月を生きることになる。つまり、永琳も生きている可能性がある……！

「なんだ、何が起きているのだ！」

「ひええええっ！」

ああ！ もう考えてもわからねえ！ 自分の目で確かめなければ！
俺は、全身の力を振り絞って体を起こす。巨木の根の下に封じられた甲羅から手足を伸ばし、思いつきり地面を突き飛ばした。

轟音とともに体が軽くなる。俺の甲羅から生えていた木がへし折れて倒れたのだ。土の中から這い出た俺は、甲羅に絡みつく根っこを引っかく。

久しぶりの外気だ。そこには、あごが外れそうなくらい驚愕した表情の人間たちと、花の妖怪がいた。まあ、気持ちはわかるが、今はそれどころじゃない。かぐや姫のことだ。

「……アア……ウガ…ヒイ！」

くそ、喉が詰まって声が出せん。俺は息を思いっきり吸い込むと、喉の調子を整えるために叫び声をあげる。

「……ガアアアアアアアアアッ！」

痰が取れた。よし、これでたぶん普通に喋れる。

だが、人間たちに俺の叫び声は刺激が強すぎたようだ。得体のしれない妖怪の絶叫を聞いて恐れをなしたのか、我先にと蜘蛛の子を散らすように逃げ出してしまった。

残ったのは、俺と花の妖怪と、腰を抜かした偉そうな使者を名乗る人間一人である。一人いれば十分だ。俺は人間の方へ近づいて行く。

「ひいつ！？ だ、だれかおらんのか！ 陰陽師はどうした！？
はやくこの妖怪を退治しろ！」

「妖怪としてここまで恐怖してもらえることは実に気分がいいの

だが、俺はただ話を聞きたいだけだ。かぐや姫はどこにいる？」

「な、なんだと！？ なぜそのようなことを聞く！？」

「お前は聞かれたことに答えりゃいいんだ。かぐや姫は、どこにいる！」

俺は人間の着物をつかんで、怒鳴りつけながら揺さぶる。人間は目を白黒させて慌てている。あんまりやると気絶しそつだな。もどかしい。

「み、都だ！」

「詳しい場所は！？」

「口では説明できん！」

めんどくせえ。俺はひょいと人間を肩の上に担ぎあげる。

「な、なにをする！」

「お前は道案内人兼人質だ。かぐや姫がいるところまで案内してもらつぞ」

「そんな！」

こいつが身分の高い奴なら人質の価値があるのだから、使者だからな。どれくらい牽制効果があるかわからない。まあ、そんなときは力技で押し通るしかない。

「あ、あの、木さん！」

俺が人間の都まで駆け出そうとすると、後ろから声をかけられた。花の妖怪だ。俺のことを心配そうな表情で見てくる。

「あとで事情を話す。お前は人間に見つからないように隠れていろ」

俺は花妖怪を無視して、背中の人間の絶叫を森に響かせながら章駄天のごとく走りだした。

31話「アナザー・サイド・輝夜」

私は屋敷の縁側に座り、月を見上げていた。

今はまだ新月から生まれたばかりの細い三日月だが、じきに満ちる。悠久の時間を生きる私にとって、次の満月が訪れるまでにかかる時間などあってないようなものだ。

だからこそ、時間は貴重。幾千の金にも代えられぬほどに、この一瞬には価値がある。だが、私は退屈だった。こうして月を見ながらわが身を憂うほどには。

私は月人だ。月の世界の住人。この穢れた地上に生きる者たちとは違う。生にも死にもとらわれず、ただ無為なる存在となることを望むやんごとなき月人のあり方は理解できるが、それは私にとってあまりにも味気ない。だから、私は地上へ来ることを望んだ。煩惱への執着に溺れ、穢れに満ちたこの世界は実に面白い。

永琳に作らせた“蓬莱の薬”によって、私は不老不死の体を得た。月人は不老の肉体を持つが、不死ではない。不死となることを求めるは、すなわち生への執着、すなわち穢れ。それは月人の思想に反する。それがゆえに、私はあえて蓬莱の薬をあおった。不死となることなどどうでもよいことだが、私が望んだのはこの身に穢れを宿すことだ。

穢れたこの身に与えられた罰こそ、地上への追放である。要するに、私は地上へ行きたいがために禁忌を犯した。後悔などしていない。おじいさんとおばあさんに育てられたこと、言い寄ってくる男たちをあしらうこと。地上での体験は、どれも私にとって新鮮で好奇心を満たしてくれることばかりだ。

だが、楽しい時間はあっという間に過ぎていく。次の満月がくれば、私の地上への追放期間は終わる。それを思えば、ため息の数も多くなるというものだ。最近は何を見ながら物憂げな顔ばかりして

いる。おじいさんとおばあさんにも心配をかけているようで忍びない。だが、センチメンタルなお年頃の娘だと思って諦めてほしい。

「はあ……」

家庭教師の永琳は私のために蓬莱の薬を作ってくれた。つまり、私が地上に残りたがっていることを知っていることになる。永琳はなぜか私に甘いので、私が地上にとどまりたいと言えば手を貸してくれるだろう。切れ者の彼女のことだ。すでにその準備を進めているだろう。

しかしそうだとしても、もうこの場所には残れない。月の監視の目を避けながらの逃亡生活を余儀なくされる。退屈していた私に一時のエンターテイメントを提供してくれたこの場所には、それなりに思い入れもある。なんとも、ままならないものだ。

『くせものじゃー！ ものどもであえー！』

『妖怪がでたぞ！ こつちへ向かって来ている！』

『悪霊退散 陰陽師マダー？』

なにやら、今夜は騒がしい夜だ。静かに月を見る夜もいいが、都の穢れにまみれた喧騒に耳を傾けながら見る月も、また一興……

ドドドドドドドド……ドカーン！

そして、唐突に屋敷の塀を突き破って現れた得体のしれない妖怪と出会うのも、一興というものだろう。

その妖怪は人型だった。全身土まみれでよくわからないが、おそらく少女の形をとっていると思われる。鬼のような形相を浮かべ、

背中に大きな岩のような物を背負い、さらに身なりからして貴人と
思わしき人間を抱えている。人間の方はぐったりしているが死んで
はいないようだ。妖怪は体中に陰陽道の力が込められたお札が貼り
つき、紫電を発している。これだけ派手にやられておきながら、倒
れる様子など毛ほども感じない剛毅さ。かなりの力を持った妖怪な
のだろう。

「おう、輝夜。久しぶりだな。やっぱり、俺の考えは間違っ
てなかつたぜ」

「？」

妖怪から敵意は感じない。禍々しい気を放っているが、それが彼
女の自然体らしく、こちらに殺気を向けるようなことはなかつた。
近頃は私の噂を聞きつけ、さらいにくる妖怪も多かつたのだが、彼
女はその類ではないようだ。

それに、なんだか私のことを知っているような様子である。こん
な妖怪と以前にどこかであつただろうか。いや、記憶にない。

「俺もこんなところに長居はしたくねえ。お前に聞きたいことが
あるんだよ」

「私に答えられることなら」

「永琳は生きているのか」

……驚いた。まさか、ここで永琳の名前が出てくることなど、誰
が予想できよう。

月となんらかの関係がある妖怪なのか。それこそありえない。

「あなたは何者？　どこで永琳の名前を聞いたの？」

「一億年前にお前の口から聞いたのさ」

意味がわからない。しかし、嘘をついている様子もない。

一億年前になど、私は生まれてもいないのだ。そのころと言えば、永琳ならぎりぎり生きていたかもしれない。ということは、この妖怪は永琳と同じ年ということになる。頭が痛くなってきた。到底、信じられる話ではない。

「お前のその反応を見て、確信したぜ。永琳はまだ生きているんだな」

妖怪は笑った。だが、その笑顔は邪悪だった。何かにとりつかれたような狂気の笑み。鳥肌がたつた。これは稀にみる洒落にならない相手だ。今の私は服役中のため、能力が封印されているので、この妖怪とまともに戦えそうにない。まあ、不老不死なので死ぬことはないのだが。

「……仮にそうだとして、あなたはそれを知ってどうする気なの？」

「お前とは色々話がしたかったんだが、俺にはあんまり時間がな
い」

屋敷のまわりに人が集まり始めた。それは、これだけの騒ぎを起こせば当然だろう。妖怪退治を生業とする陰陽師が、都にはぞろぞろいる。扉に開いた穴から入って来た陰陽師が、印を結んで結界を作り始めた。

この妖怪もさすがにここにとどまり続ければ身が持たないだろう。

一方的にやってきて、一方的に質問し、一方的に帰っていきうとしている。まったくもって理解ができない。
が、面白い。

「待ちなさい」

私が一声かけると、妖怪は律儀に立ち止まってこちらに振り返る。もうほとんど結界は完成しているというのに、まるで堪えていないようだ。もっと上位の陰陽師でないと対抗できないだろう。

これほどの妖怪が今ここに現れたということに、私は少なからず喜びを感じている。私の退屈を紛らわしてくれたお礼だ。彼女には、私のさらなる余興になってもらう。

「次の満月の夜、ここに来なさい。あなたが探している人と会えるわ」

妖怪はニヤリと笑った。その口元は今夜の月のような三日月の形。ただし、赤い。

底冷えするような妖気をばらまいて、妖怪は風のように去って行った。結界はあっさり破られている。抱えていた貴人を残して、影も形もなくなっていた。

「さて、これは面白くなってきたわ。ふふ、あの永琳の驚く顔が見られるかもしれないわね」

32話「瞬間享楽」

俺は来た道を引き返し、森の木々に身を隠しながら走る。ここま
で追いかけてきた妖怪退治人も、森の中までは追ってこれなかつた
ようだ。

空気がすがすがしい。晴々とした思いだ。輝夜が生きていた。そ
して、永琳が生きていたのだ。俺の不安定だった憎悪が再び燃え盛
る。これで狂気を抑え込むことができる。憎悪という感情で狂気を
塗りつぶせば、一応の正気を維持できる。それは、自分の中に封じ
こんだバケモノを鎖でつないだ紙一重の状態。狂気という犬を憎悪
の鎖につなぐのだ。

表面上は俺の人格が、なんとか性格を形成しているが、一步内面
に踏み込めばズタボロの精神が顔を出す。傷は膿み、腐り、いつま
で経っても治らない。俺の頭の中の犬が暴れるからだ。だが、こい
つを保健所にブチ込む算段がようやくついた。永琳が生きていた。
この狂気もようやく終わる。

「はやくしてくれええ！ えーりん！ えーりん！」

俺は輝夜に永琳の生死について聞くつもりだった。俺の思った通
りだ。月に行った人間のテクノロジーは常軌を逸していた。たぶん、
寿命をながく延ばす技術によって、永琳はまだ生きているのだ。
輝夜は、そうだな……死体を冷凍保存して、あとはオーバーテクノ
ロジーで生き返らせたとか、そんなところだろう。いや、輝夜のこ
となんでどうでもいい。とにかくえーりん！ さらに輝夜は親切に
も永琳が次の満月の夜に地上にやってくることを教えてくれたのだ。
俺は走る。頭頂部にくっついたウサギの耳を両手で引っ張りなが
ら走る。次の満月まであと何日だ。もう一分も待てない。永琳、早

く来てくれ。よぼよぼのおばあちゃんになっていてもいい。お前が生きていてくれれば俺は救われるんだ。

本当は殺してやりたい。八つ裂きにしてハラワタを引きずり出して、痛みに苦しむ様を見ながら少しずつ腸を食うんだ。名付けて内臓ポツキーゲーム。大腸と小腸は長いからならぬ。ちょっと時間がかかるかもしれないが、その待ち時間さえ愛おしい。そして、ついに十二指腸にたどりつき、俺は永琳の血まみれのおなかに顔をうずめながら濃厚なキスをするのだ！

「だめだああああ！ それじゃ、えーりん死んじゃうよおおおお！？」

永琳を殺したら俺の狂気は治らない。他の月人間にも治せるかもしれないが、もし永琳にしか治せなかつたらどうするんだ！ だいたい、このウサ耳をはずす手術を永琳以外のだれに任せられる？ 見ず知らずの他人に「ちょっとウサ耳ははずしてください」なんて頼めるか？ 手術中に麻酔をかけられている間に変なことされるに決まってる。

「え、でもさ、永琳だって俺に変なことするかもしれないよ」

しえねえよ！ 永琳はそんなことしねえ！ 俺は永琳のことを信じてんだよ！

「絶対するって。俺が手術台に寝そべってる間に俺のあたまなかもつとグチャグチャにされるぜ」

だめだ。不安になってきた。

このウサ耳、自分ではずせないかな。案外、ひっぱったらスポンって取れたりするんじゃないかね？ やってみよう。

『コノ行動ハ許可サレテイマセン』

なんか頭の中に声が響いた。この行動は許可されていません、だと？ 腕に力が入らず、それ以上ウサ耳を引つ張ることができない。つまり、俺は自分でウサ耳をはずすような行動をとることができない。

「なんでだああああああ！？ ちくしょおおお！ えーりんのやろっ絶対許さん！ 絶対許さん！ ゆるさなえ」

どうすればいいんだ。どんどん不安になってきた。

あの輝夜って俺が知っている輝夜だったのだろうか。もしかしたら、そっくりさんで全くの別人だったらどうする。そうだ、クローン人間とか。あれ、クローン輝夜だったらどうよ。ヤバイ、この仮説はテクノロジー的に達成難易度が低い。月の世界には輝夜MK？とかMK？とかいっぱいいるんじゃないか？ だったら、永琳MK？とか永琳MK？もいるはずだ。

「うへへ、えーりんがいっぱい、殺しほうだいだー！ って、そんなこと言ってる場合違う！」

GEROGEROGERO！

あいつらの声が聞こえてきた。まずいな。ちょっと興奮しすぎた。落ちつかないと、狂気が暴れ出してしまふ。なんだこの厨二設定。とにかく、まずは永琳本人に会ってみないと。話はそこからだ。俺なら本物の永琳を見分けられる。そして、永琳に交渉して俺のウサ耳をとってもらおう。

ソシテ、コトワラレタラ、コロソウ。

* * *

追手を振りきったので、俺はゆっくりと森を歩く。途中、見つけた小川で体を洗い、土を落とした。春の川の水は冷たい。甲羅は断熱効果があるのか、中身はあつたかいのだが、むき出しの手足が寒い。一応、服は着ていた。モニカに作ってもらったゴワゴワのベストと短パンだ。どちらも袖と裾がないので、やっぱり寒い。それにしても、この服、丈夫だな。あれから一億年も経つたのに。もはや俺の体の一部と化しているようだ。

とりあえず、俺は元いた花畑にもどって来た。そこに花の妖怪もいた。

「あつ！ 木さん！」

俺の背中から生えていた木が倒れている。その上に腰をおろしていた花妖怪がこちらに駆け寄って来た。

さて、こいつには何と説明しようか。念話を使うようになってからは、ちよくちよく話をしていたのだが、まだ俺の身の上話については何も教えていない。

「大丈夫でしたか？ 怪我はありませんか？」

「大丈夫だ、問題ない」

馬鹿正直に本当のことを話しても、信じてもらえないだろう。こちらもあるときのことは口にしたくない。適当にごまかすか。だが、その前に言っておかないといけないことがある。

「あと、俺は木さんではない」

「え？ だって自分のこと木さんって呼べって……」

「あれは嘘だ」

「ええええ！？」

「俺の名前は葉裏。カメの妖怪だ」

花の妖怪は、俺のことを本当に木さんだと思っていたようだ。木
って、お前、普通おかしいと思わないか。かなり純粋な奴みたいだ。

「お前の名前も教えてくれないか？」

「あ、はいっ！ 私は風見幽香です。花の妖怪です！」

こうして、俺たちは出会って数十年目にして、ようやくお互いの
自己紹介を済ませたのであった。

33話「ゆづかりんといっしょ」

「そういうわけで、俺の体は悪のマッドサイエンティスト、ドクター・エーリンの手によって改造されてしまった。俺は復讐を胸に誓い、復活の時を待つて深い眠りについた。しかし、俺が目覚めた時、すでに途方もない年月が経過し、エーリンの消息もわからなくなった。俺は絶望し、この地に根を下ろし、ただ死を待つのみ。運命をたどるはずだった……しかーし！　そこに現れた偉大なる花の精霊ゆづかりんの力によって、俺は再び目覚めることができたのだ」

「そ、そうだったんですか！」

「そして、物語は急展開を迎える。ドクター・エーリンの行方を知る唯一の人物、プリンセス・カグヤ。彼女がこの時代にいることがわかった。彼女の話によれば、次の満月の夜、エーリンは人間の都に現れるという。はたして、俺は復讐をなすとげることができるのか、エーリンの真の目的とは一体何なのか、カグヤの過去に秘められた衝撃の真実……次回、最終回『放て！　闇を切り裂く拳！　死闘の終焉を越えて』。こっご期待！」

「おおお！　続きが気になります！」

幽香は俺の言うことをあっさり信じた。これなら月云々のことを正直に話しても信じてもらえたかもしれん。一応、俺の過去に関する話であることに違いはないので、他言無用だと言っておいた。幽香は誰にも言わないと約束してくれた。

「しかし、ゆうかりんのおかげで俺はこうして正気でいられる。本当に感謝してるんだ。ありがとな」

「い、いえ！ 私の力は『花を操る程度の能力』です。こんなことでしかお役に立てませんが……」

幽香がこの森で俺を見つけたとき、俺は全身から呪いを噴き出し、枯れる寸前まで病気が進行していたという。彼女の力はあくまで『花を操る程度の能力』。樹木である俺にも多少の応用は聞くとは言っても、専門外であることにはかわりない。だというのに、ここに住みこんで俺のために献身的な看護をしてくれたのだ。頭が下がる思いである。

「でも、病気が……呪いが噴き出してたんだよな？」

それについては心当たりがない。俺の負の感情が呪いとして現実化したということなのか？

「今も、うつすらとですが、葉裏さんの体から呪いの気を感じます」

「え？ そうなの？」

そういえば、なんだか目が覚めてから頭痛がするし、喉が痛いし、鼻が詰まるし、咳が出るし、風邪気味だなあと思っていたのだ。俺は病に冒されているのか？

自分の健康不調の原因がなんなのか、調べてみる。意識を内面に向けて、病巣を探る。妖怪はよつぼどのがない限り病気になどかからないものだ。かかるとすれば、妖怪の命の源たる妖力に原因があるはず。自身の妖力を探れば何かかわかると思う。

そして、その考えは正しかった。俺の妖力の中に異質なモノが混ざっている。ヘドロのように粘着質の沈殿物が、俺の妖力のプールの底にへばりついていて。これはなんだ。尋常でない呪いの瘴気を放っている。これだけ濃い呪いを体の中から食らっていれば、そりゃ体調も悪くなるわけだ。だが、この瘴気、なんだか見覚えがあるぞ。

「そうか！ これはデスフロッグの……！」

月でデスフロッグの大群が人間の要塞にしかけた戦い。そこで戦死したカエルたちの屍からあふれ出した瘴気と同じものだ。しかも、あのおとき見たものより断然濃度が高い。今の俺の状態は、人間にしてみれば液状の硫化水素を丸飲みしたようなものだ。よく風邪の諸症状程度で済んでいるな。

おそらく、この瘴気は肉体よりも精神に影響する性質がある。狂気に長年耐え続けた俺だからこそ、平気でいられるのだろう。つまり、俺はウサ耳の怪電波とデスフロッグの呪い瘴気の二重苦を味あわされていることになる。なんとというバッドステータス地獄。

さらに原因を探ると、この瘴気の出どころは俺の甲羅の中にあつた。要塞の内部で拾ったデスフロッグの卵である。こいつが腐ってドロドロに溶けだし、瘴気を発していた。激辛蜜柑も腐ってカビが生えたし、同じナマモノの卵もこれだけ放置すれば腐りもするだろう。しかも、最悪なことに甲羅の優秀な密閉性によって、卵に蓄えられていた妖力を逃さず閉じ込めていたのだ。そのせいで、半ば癒着する形で腐った卵が俺の体と融合してしまっていた。

「あー、なんかさあ、妖怪の卵を拾い食いたんだけど、それが傷んでみたいで、中っちゃったみたいなんだよね」

「ええ！？ それで呪われたんですか！？」

幽香によると、自分と比べて妖力が高すぎる相手を食べた場合、呪われることがあるらしい。妖怪各々が個人でもつ妖力には、千差万別の性質が宿る。俺の持つ妖力と幽香の持つ妖力も一緒のようで違いがあるのだ。妖力は妖怪にとつてのエネルギーなわけだが、自分の持つ性質と異なる妖力を体に取り込んでも、それを100%自分のものにできるわけではない。それをいったん消化して、自分の性質と馴染ませただけ取り込むことができる。その消化による口スは大い。食事によって得られる妖力はそれほど高いわけではない。

そうして、消化しきれなかった分の妖力はもつたないが、体外に排出することになる。自分と異なる性質の妖力は異質なモノであり、それをいつまでも体内にとどめておくと言をもちたらず。それゆえに、自分よりも巨大な妖力を持つ相手を食うようなとき（普通、そんなことは滅多にないが）、取り込んだ妖力の消化処理が間に合わず、異質な妖力に体を冒されて中毒を起こすのだという。それがここでいう呪いだ。

ちなみに、食われる側が自分から妖力を譲り渡したときは、この拒絶反応はあらわれないようだ。そんなことを進んでする妖怪なんているとは思えないが。

以上、ゆうかりんの妖怪講座でした。へえー。

「ということは、だ」

それを踏まえて考察するに、次のような仮説を立てた。

俺が最初に他の妖怪から妖力を得た機会は、六島苞との出会いだ。最終的に、あいつは俺の体に乗っ取るうとして、自分の妖力をすべてそこに集めたが、結局そのもくろみは失敗する。さらに長年肉体同士を融合し続けた結果、俺と六島苞の妖力は同質性を持ち、拒絶反応を起こさなくなっていたのではないだろうか。そういうわけで、

奇跡的に妖力の譲渡が問題なく成立した。これは極めて稀なケースだろう。

次に、デスフロッグの卵に含まれていた妖力は膨大だった。しかし、俺がもともと持っていた妖力に比べれば小さい。よって、普通に拾ったときに食べていたなら、こんな中毒を起こす結果にはならなかったはずだ。そのときは、俺が消化しきれなかった分の妖力は体の外に捨てていただろう。

だが、俺はあるとき甲羅の中に卵を入れ、それを放置した。この点が曲者だ。俺の甲羅の中の空間は、一応、俺の体内と定義づけられるようである。その劣悪な環境（？）の中で、卵は死に、腐敗した。だが、その腐った妖力は甲羅の密閉性により外に漏れ出さず、ずっと甲羅の中にとどまった。その結果、卵だったモノが甲羅の中で俺の体と癒着。腐敗した妖力を消化処理もせず、丸ごと腹の中のため込んだ状態になってしまった。

生まれてもない卵に意思があったのか、定かではないが、こいつは俺のことを拒絶している。徹底的に俺の妖力と馴染もうとしない。にもかかわらず、俺と無理やり合体してしまったために、俺から離れることができないでいる。A型の血液の人間に、B型の血液を輸血してしまったようなものだ。

俺は立ち上がり、息を深く吸い込む。

「すううー……げっほん、げっほん、げっほんほん！」

思いつきり咳を試みた。喉の奥から黒い霧状の瘴気があふれ出す。瘴気はいくらでも俺の体から湧き出してくるが、その瘴気を生み出している肝心の腐った妖力は、俺の中にへばりついて出てこようとしない。これを取り出すことは今の俺にはできそうにない。血の中に混じった毒が体を巡っているようなものである。どうやってそれを抽出するというのだ。妖力の人工透析のしかたなんて俺は知らない。

さらに、腐った妖力は億年もの間、俺と一緒に狂気の電波を浴び続けた影響か、そこから発する瘴気はすさまじい“二オイ”をさせていた。歯が溶けそうなくらい甘ったるい匂いだ。意識して嗅ぐとするだけで、頭がクラクラして何も考えられなくなる。もともとデスフロッグが持っていた妖力の性質である“呪毒”に狂気が組み合わさったもの、名づけて“狂呪毒”！ 試しに、幽香に息を吹きかけてみた。

「ふうーっ！」

「……ふにゃあ〜！」

一発で目を回して倒れ込んだ。

これは俺自身、気分が悪くなるので使いたくない技だが、何かの役に立ちそうだ。うえっ、胸やけがひどい。

34話「自傷行為」

「葉裏さんのそのウサギさんの耳って、かわいいですね」

「ああん!？」

「ひうつ!」「ごめんなさい!」

いかん、つい殺気を放ってしまった。このウサ耳のせいでこっちは毎秒頭の狂う思いをしているのだ。褒められてもうれしくない。あれから俺たちは森の中をうろろしながら気ままに生活を送っていた。元いた花畑は陰陽師が来て結界を張ってしまったのだ。別に簡単にぶつ壊せるのだが、この大事な時期に人との間に問題を起こしたくない。わざわざ自分から厄介事の種をまく必要はないだろう。

幽香は自分の花畑がめっちゃくちゃにされてしまったわけだが、意外と気にしていないようだ。また別の場所に作るつもりだと言う。俺の背中の木が、この地に恵みを与えていたようで、その木がなくなった結果、ここは元の痩せた土地にもどりそうだと言っていた。しばらくは、俺と一緒にここにとどまるが、いつかここから離れて畑に向いた土地を探すそうだ。ふらふらと森の中を歩き回る俺の後ろを、いつも雛鳥のようについてくる。

「はっ! そうだ! ゆうかりん、俺のウサ耳をつかんでくれ!」

そういえば、まだ一つ可能性を残していた。俺はウサ耳インターフェースから直接脳に下されるプログラムによって、自分でこのウサ耳をはずすような行動を取ることができない。

しかし、他人である幽香になら俺のにつくきウサ耳をぶち抜いてくれるかもしれん！

「えっと、これでいいですか？」

「もつと強くにぎって！」

俺はあれから毎晩、悪夢にうなされながら眠っている。いつのまにか、気がつけばウサ耳を触るくせがついていた。いつもいつもウサ耳を揉みまくっているうちに、耳はよれよれになり、もはやウサ耳なのかなんなのかわからない形になっている。

さらに最悪なことに、俺のケツにはウサギの尻尾までついていて。これは、短パンの中に隠している。これもインターフェースの一部なのだろうか。

「いいか、いちにのさんで、思いっきり引つ張ってくれ！」

「ええ！？　そ、そんなことしたら痛くないですか？」

「痛くてもいいんだ！　手加減なんかせずに引っこ抜け！」

「ほ、ほんとにいいんですね？」

「ああ、やってくれ。……中途半端に力を入れるのだけはやめてくれよ。ひとおもいにブチッとやれよ！」

「わかりましたっ！」

俺は腰をかかめ頭を突きだし、幽香は俺の耳を両手でつかんでいる。緊張の一瞬。なんか、失敗する雰囲気バリバリ出てるが、俺

はやる。やってらんよ！

「いち、この……さん！」

「えいつ！」

その瞬間、俺の脳内がショートする。原色ギトギトの極彩色が視界を埋め尽くし、世界がぐにゃぐにゃと秩序を失くした。

『へでゆあべおQVBR YくおWX2べBbあRばせおしずびい
いいいいい！！』

これは、シャンパンボトルのコルクだ。ウサ耳はコルク栓。抜けば、頭蓋ボトルから脳サケがしぶきを上げて噴き出してしまふ。受け止めるグラスなんてない。俺の能天気な自我が、外気に触れて劣化してしまふ。

【DAいじよブデSUKあ！？ シツカRISIてください！】

俺は頭を押さえてうずくまる。頭頂部にはウサ耳がある。抜けなかつたようだ。抜けていたら、俺は死んでいただろう。やっぱり、力技でこいつをどうにかするのは無理なようだ。

* * *

月人は強い。

その科学技術は俺の前世とは比べものにならないほど進んでいる。一億年前で、それだけの技術をもっていたのだ。月人も文明が地上と異なる発展を遂げたのなら、今頃月にどんな世界が広がっているのか想像もつかない。

俺はたまに人間のもとへ近づいた。情報収集するためだ。都に近づくと陰陽師に妖力を察知されるので、姿を隠しながら森に面した道の近くに潜み、通りかかる人間の話を盗み聞く。それによると、かぐや姫は次の満月の夜に、月からの迎えが来て、月の世界へ帰ってしまうのだという。それを知った帝が、かぐや姫の月への帰還を阻止すべく、兵を集めているようだ。

このあたりは、俺の知っている昔話と内容が一致する。次の満月それは永琳が地上へ来る日だ。つまり、永琳は輝夜を月へ連れ戻すためにここへ来るということなのだろう。竹取物語では、人間は月人の力の前に無力化される。それを可能にする技術があるのだ。

その月人に、俺は一匹で立ち向かわなければならぬ。普通に考えれば、無謀である。だが、やらなければならぬ。なんとしてでも永琳との接触を果たさなければならぬのだ。

そのためには、力が要る。月人に対抗するだけの戦闘力が要る。

「ふう、せいっ！」

俺は妖力弾の練習をした。妖力の量は無尽蔵だ。一日中、全開でぶっ放しても妖力切れは起きないだろう。

だが、これだけではだめだ。威力が弱すぎる。何発撃てようが、一発にこめられる威力には限界がある。これでは月人のシールドに阻まれてしまうだろう。

妖力弾はあくまで補助的に使うことになる。やはり、肉弾戦を主体に考えるべきだ。妖力の増加に伴って、筋力も増した。素手で岩を砕くことなど造作もない。当たればいかに月人といえども、致命傷は避けられない。当たれば、の話だが。

そこで、俺が考えたのは、かつてロバートに教わった月のウサギの武術『玉兎三技』を使えないかという案だった。

「……」

まずは精神を集中し、妖力の動きに意識を向ける。

“フォースの循環”が可能となれば、爆発的な効率をもったエネルギーの運用ができる。三技のすべてをこの短期間で習得することはできないだろうが、その運用法だけでも使えるようになれば多少は使えるようになるはずだ。

フォースとは、すなわち妖力。それを体内で回転させる。かつての俺は、ロバートに教えられてもこの技を身につけることができなかった。体の中の妖力は緩やかに対流するばかりで、エネルギーからエネルギーを生み出すことなど不可能だと思っていた。

だが、その考えは誤りだ。“フォースの循環”とは、言いかえれば、妖力の活性化現象。つまり、妖力は通常ではそのエネルギーを完全に使用可能な状態になっていないのだ。いや、妖怪はあえて活性化を無意識のうちに封じ込めている。そうしなければ、開放された力に精神を壊されてしまうからだ。

「ぐ、おおお……！」

月のウサギは活性化に伴う精神への影響に耐性があった。だから、少ない妖力でもそれを何倍にも増幅させ、使用することができる。

俺が妖力を活性化できない理由は簡単だ。ビビっている。妖力のプールで水遊びする程度の度胸しかないから使えない。本気で活性化しようと望むなら、そのストッパーをはずさなければいけない。水槽は肉体。水は妖力。回転の力は妖力を回す。水槽の外にこぼれるくらいの勢いで臓物をかき回さなければならぬ。そうでなければ、体外に自分の妖力を実体化させ、自在に形成させることなどできるはずがない。それはつまり、自分という殻を自ら破壊する行為だ。精神の崩壊と循環のエネルギーとの狭間で、己を律することができるのみが、この力を得ることができる。

妖力弾はただの妖力の排出行為でしかない。おしっこをひっかけ

るのと一緒だ。膀胱に尿が溜まっていけば、猿でもできる。それと異なり、妖力の活性化は内面から精神を破壊する。その結果、自己意識の破壊によって、自分という存在の定義があいまいになる。そこをうまく利用し、自己の定義を拡大解釈するのだ。それによって、肉体という縛りを超えて、体外に自己の妖力の影響を及ぼすことができる。妖力で肉体が形成されている部分が大きい妖怪という種族だからこそできる、規格外の荒技だ。

こうして改めて原理を考えてみると、どうあがいてもできそうにない。だが、俺は幸か不幸か、いや、不幸にも妖力過活性化電磁波を思い出すのも億劫になるほどの長期にわたって浴び続けた。そのせいで、活性化が精神に及ぼす影響を、嫌というほど味わっている。あとは、自己意識の破壊に慣れ、存在の拡大解釈ができるようになれば、活性化の力を自分のものにすることができる。

俺はそれから毎日、狂気と闘いながら瞑想を繰り返した。

34話「自傷行為」(後書き)

儂月抄のwikiを今さら見て愕然とする作者。

月夜見に關しましては、後付けですが設定を作りました。機会があるときに記載します。

35話「粗品ですが」

「うおえええっ！」

「葉裏さんっ！」

吐き気を催した俺のもとへ幽香が走ってくる。俺の額に流れる汗を手ぬぐいで拭いてくれた。幽香は俺が何の特訓をして自分を追い詰めているのかわかっていないが、いつも俺の傍にいて見守ってくれた。

自分という存在を壊さなければ力を扱えない。しかし、完全に破壊すれば俺という存在が消滅する。適度にその中間を保たなければならぬ。言うなれば、精神をスラスカのスポンジ状態にしなければならぬのだ。そのスポンジに水、つまり妖力を吸わせた状態に保つ。そうすれば、水をスポンジの外にじみ出させることができる。だが、当然スポンジなので、ちよつとした衝撃で簡単に凹み、水をどばどば吐き出してしまう。自我が垂れ流される。その工程は筆舌に尽くしがたい。

さらに面倒なことに、俺が妖力を活性化させると、例の腐れ卵が悲鳴をあげるのだ。他人様の妖力なので、そっちは俺の管轄外である。だが、俺と融合しているので俺自身でもある。アパートの隣人が深夜に轟音をまき散らしている状態といえようか。

腐れ卵は液状化して、妖力そのものに近い形になっているようだ。普段は俺の妖力と決して混ざることなく、プールの底に沈殿しているのだが、循環回転させることでその性質が表面化する。つまり、大量の瘴気をまき散らす。活性化中の俺は体中から黒いオーラを醸し出すようになった。すげえ、悪役設定。

そのせいで俺は活性化を行うと、頭を狂気で冒されるだけでなく、

全身を駆け巡る瘴気の毒のせいで強烈な体調不良を起こすようになってしまった。幽香はこんな俺でも嫌いにならずに付き添ってくれる。ええ子や。

満月の夜まであと少ししか日は残っていない。俺はほとんどの時間を瞑想に費やしたが、三技を使えるようになるには程遠かった。やはり、付け焼刃ではダメか。

「ちくしょう、これだけやってもダメなのか。自己破壊はギリギリできるようになったけど、拡大解釈ができない。その自己破壊でさえも、気を抜くとすぐに状態を維持できなくなるし……」

「えっと、葉裏さんが何をしているのかさっぱりわかりませんが、気を落とさないでください。なんか、そのオーラだけでも私、近づくだけで気絶しそうなくらいですよ。葉裏さんは十分強いです」

オーラというのは、瘴気のことか。なるほど、これは“呪毒”だ。それ単体でも周囲に悪影響を及ぼす。その効果の対象は妖怪や人間にとどまらないだろう。息抜きに、ちよつと技を開発してみるか。

俺は軽く妖力を活性化させ、瘴気を発生させる。セットで内臓までぶちまけそうな吐き気もついてくる。それは気力で飲み込むとして、俺は特に拳に集まる妖力を活性化させた。拳から黒い瘴気が噴き出す。えっと、技名は何にしよう。よし、これだ。

「はああああ！ 暗黒殺法・呪闇拳！」

叫ぶと同時に、近くの木を殴りつけた。その衝撃で木はへし折れ、そして俺の拳から感染した呪毒が全体に広がっていく。若々しい青い葉を茂らせていた木は見る見るうちに枯れていき、砕け散った。おいおい。

これはただのパンチであって、玉兎三技は使っていない。俺が受

けた呪いの副作用だ。いまいち、自分では納得いかないが、今はこの技で我慢しよう。殴るだけです。人間にとっては致命傷なので、そこにさらに呪毒を投与するなんて嫌がらせをすることに意味はない。だが、月人に俺の純粋な筋力による攻撃が通用するかわからない今、少しでも手数は増やしておきたい。月人の妖術に対抗する技術は高いので、おそらく防がれてしまっただろうが。

さっき殴りつけた木は極端に呪毒の影響を受けたが、普通の妖怪なら自身が持つ妖力である程度抵抗できるので、ここまでの効果は望めないと思う。人間には効くだろうが、霊力という力をもった陰陽師なら妖怪と同じ理由で抵抗されるだろうな。そういえば、つい手ごろだったので木に攻撃を当ててしまった。幽香は植物を大切にするので、怒っているかもしれない。

「ゆうかりん、ごめ……」

幽香は俺から10メートルくらい離れた木の陰に隠れて、涙目で震えていた。マジでごめん。

* * *

俺は甲羅の中の物を整理した。

月で要塞に入ったとき、いろんな物を突っ込んでおいたことを忘れていたのだ。ぱくった物の中には、月人の兵器もあつた。もしかしたら、大幅戦力増強もありえる。なんでこんな大事なことを忘れていたんだ。

とりあえず、甲羅の中に入っている物を全部引っ張り出す。大量のガラクタがどんどん出てきた。カチカチになった激辛蜜柑も出た。お前のもういいよ！ 確か前に全部捨てたと思ってたのに、なんでまだ入ってたよ！

「何をやってるんですか？」

「んー？ ちょっと持ち物の整理をな。くそ、どれもこれも使えねえもんばっかしだ」

兵器はあった。ハイテクなレーザー銃だ。だが、どれも燃料切れ。一億年もメンテナンスしてないので、錆ついて鉄クズ同然だった。比較的状态がいい物を一つだけ取っておき、後は穴を掘って埋めた。月人に突きつければ、コケ齎しには使えるかもしれない。

「ん？ なんだこれ？」

かさばる兵器類はすべて捨てたが、他にも何か入っているみたいだ。取り出してみる。

それは、一本の短剣だった。刀身を鞘から抜き放つ。そこに錆はなかった。どこまでも黒い刃が冷ややかに光っている。これをくれたジョージの顔が頭に浮かんだ。ジョージは俺と同じく、頭に偽ウサ耳をブチ込まれ、人形となった。人間のやり方は気にくわないが、方法としては冴えた手だ。楽に月面での労働力を手に入れることができるのだから。俺が人間の立場だったら、迷うことなくその手を選ぶだろう。ただ、ほんの少しの感傷は俺の心にもあった。

そして、もう一つ。くすんで茶色くなったベレー帽が出てきた。ロバートもいい奴だった。モニカもだ。ふたりはあの後、どうなったのだろうか。永琳に改造されてしまったかもしれない。だが、今となってはすべてが過去のことだ。遠い記憶の奥に隠れてその片鱗をのぞかせるにすぎない思ひ出。

俺は短剣を腰に差し、帽子をかぶった。帽子の中にウサ耳を隠す。ロバートはこの帽子を、戦いで耳を失くした戦士に贈る名誉の証だと言った。だとしたら、滑稽なものだ。俺はくつつけられた耳を隠すためにこの帽子をかぶるのだから。自嘲の笑いがこぼれた。

「葉裏さんの甲羅って、いろんなものが入ってるんですね。魔法みたいですよ」

「そうか？ ゆうかりんにもなんかやろうか？」

幽香にはお世話になったからな。月の珍しいお土産でもプレゼントトしてやろう。お、なんかちょうどよさそうなものが……

『月人お酒の友シリーズ？ ヒマワリの種』

「……」

なんで持ってきたし。ご丁寧に真空パックされており、未開封の袋を外から見ると限りでは、食べられそうな気がしないでもない。だが、無論、食うつもりはない。

「ゆうかりん、これあげる」

「え！？ いいんですか！？ ありがとうございます！」

幽香にあげた。花の種だと思っているようだ。まあ、そうなんだけど、たぶん炒ってあるよね。でも、幽香なら能力でどうにかできるかも。

「ヒマワリっていうんですか？ どんな花なんでしょう？」

「黄色くて、太陽みたいな花だよ」

「わあ、すごいです！ 絶対、この子たちを育ててみせますね」

「う、うん。頑張って」

なぜか節分の鬼の話を思い出してしまった。

36話「ガール・ミーツ・ガール」

満月の夜が来た。俺は一昨日から一睡もできなかった。だが、絶好調だ。空に浮かぶ丸い月。その光を見るだけで、俺の心は高鳴った。嬉しくて、嬉しくて、思わずジャンプしたくなる。

「ゆうかりん、行って来る。俺は行くぞ！ 永琳に会うんだ！」

「は、はい……気をつけてくださいね……」

幽香に見送られて俺は森を飛び出した。鳶のサンダルを踏みしめて、夜の森を駆け抜ける。甲羅を装着し、腰のベルトには短剣と壊れたレーザー銃をねじ込んだ。そして、頭にはベレー帽。装備は完璧だ。

都の門の前の木陰に隠れる。都はぐるりと堀に囲まれ、出入りのための門が四方に四つある。この囲いそのものが結界になっており、妖怪が侵入するとすぐに陰陽師に発見される。うまくいかいくぐるには、小さな妖力しかもたない妖怪であるか、相当うまく妖力を隠し通せる者でなければならぬ。俺は妖力を隠すのが苦手だ。甲羅に押し込めば結構ごまかせるが、それでも元の妖力が大きすぎるため、すぐにバレてしまう。

乗り込むタイミングはまだ後だ。今日は都中が月人の襲来に備えて殺気だっている。そのため、月からの使者が来れば、ここにいてもすぐにわかるだろう。本番の前に余計な体力を使いたくはない。月人はあなどれない相手だ。万全の態勢で挑まなければ。

本当は今すぐ輝夜がいる屋敷に乗り込んで、陣取っていたい。我慢だ。我慢我慢我慢。我慢しろ。

俺はこれ以上なくらいに興奮していた。飛び出しそうになる体

を何とか理性で押さえつける。徹夜で血走る赤い目で、瞬きもせず
に月を見つめ続けた。月人はあそこからくる。一瞬たりとも目は離
せない。月がゆっくりと中天にさしかかる。時間の流れが遅すぎる。
早く来い！ 早く来い！

そして、そのときは来た。

「来た……！」

月の光の中に点が見えた。その点はだんだんと大きくなる。俺は
笑顔になった。だめだ、もう笑顔にしかねない。ようやくだ。よ
うやく、永琳に会える。俺の悪夢が終わる！

俺は理性の縛りをかなぐり捨てて。頭で考えるよりも早く、体が
動いていた。都の塀を飛び越えて、家々の屋根の上を走り抜ける。
俺の甲羅の重量はとんでもない。そんな体重の俺が藁でできた家屋
の屋根の上に飛び乗れば、すぐに陥没して落ちてしまう。だが、俺
は踏み出した足が沈み込むよりも速く反対の足を踏み出して先に進
んだ。水面に荒波を立てるかのように屋根を破壊しながら走り抜け
る。

俺は一直線に輝夜の屋敷へ駆けつけた。屋敷の前に降り立つと、
警護の兵士たちが一斉にこちらに振り向く。

「いーっひひっひふへはほあほあほあひゃああっはふあああ！」

笑い声を抑えきれない。もつと静かに登場する予定だったのに。

「よ、妖怪だ！ 妖怪が出たぞ！」

「よりもよって、こんなときに……！」

「しかも、この妖気、ただものではないぞ！」

兵士たちが刀を抜いて俺を包囲する。俺は妖力を活性化させて、体から瘴気を噴き出した。その禍々しさに恐れをなしたのか、構えるばかりで斬りかかつては来ない。

そうするうちに、天からの使者の全容が見えた。形式ばったことに、空飛ぶ巨大な牛車での登場だ。その牛車から、癪に障る力があふれ出た。電磁波だ。その波長に触れた者は、事切れたように眠りに落ちる。警護の兵士たちは全員、一瞬にして無力化されてしまった。

俺も眠くなつた。強烈な催眠電波によって、思考がシャットアウトされそうになる。発狂電波の次は催眠電波かよ。月の宇宙人は、つくづく毒電波攻撃が好きな連中だ。

俺は妖力をさらに活性化させた。“眠気”を“狂気”で押さえつける。さらに、腰から短剣を抜き、自分の腕に根元まで突き刺す。妖怪の体は頑丈だ。このくらいで死にはしない。痛みで眠気を吹き飛ばした。

すぐさま輝夜の屋敷に乗り込む。縁側には、輝夜とその隣に立つ、え、ええ、え、

「えーりん」

永琳がこちらを見た。きょとんとした表情で、俺の顔を見つめる。そして、その表情は次第に驚愕の色に染まっっていく。

俺の顔はそれに合わせて、どんどん笑顔になった。たぶん、ひきつってうまく笑えていないと思うけど、笑顔だ。歓喜した。永琳は俺のことを覚えている。億年経った今でも、俺のことを覚えていてくれた！

この感情をどう表現すればいいのかわからない。俺の全身の細胞が湧きたち、震えている。そう、これは神と対峙した信者のよう。永琳は俺を悪夢から解放してくれる神なのだ。

「あ、ああ、えり、た、け」

声がうまく出せない。ほら、早く言わないと。

俺は一步一步かみしめるように前へ進み出た。永琳はなぜか、それに合わせて後ろに下がる。逃げなくていい。俺はお前と話がしたいだけなんだ。

だが、俺の前に何かが立ち塞がった。永琳が見えないじゃないか。邪魔だ。消える。

「……………」

血しぶきが舞う。なんか邪魔な物があると思ったら、人間だった。月人だ。俺があんなに恐れていた月人。それが俺の腕の一払いで肉塊になった。結局、こんなものなのか。がっかりしたよ。何のために強くなるうとしたのかわからない。でも、いいんだ。永琳に会えたんだから、すべてはどうでもいいことだ。

「えーりん、俺だよ。覚えてるんだろ？」

「いや、来ないで」

永琳の声だ！ 永琳は幼かったあのころと比べて、随分と大人っぽく成長していた。永琳が綺麗に育ってくれて俺もうれしい。

「ほら、見てくれ。お前が俺に植え付けた地獄だ」

俺はベレー帽を取り、ウサ耳を見せる。永琳の顔が青くなった。

永琳はきつと、俺にこんな物を取り付けたことを後悔しているんだ。だから、頼めばきつとはずしてくれるはず。俺の狂気ひょうめをきれいさつ

ぱり治してくれるに違いない。

俺は永琳を怖がらせないように、エガオを心がけながら、ゆっくりゆっくりと近づいて行く。

「ひい……来ないでって言ってるでしょ!？」

『命令認識。待機シマス』

俺の頭の中に声が響いた。その途端、俺の足が動かなくなる。あれ? おかしいな。これじゃ、永琳のところに行けない。永琳が何かしたのか? 永琳の奴、きつと照れてるんだ。だから、俺にいじわるするんだ。

俺は脳内に直接下される命令を無視して、足を踏み出す。

『“エラー”ガ発生シマシタ』

まだ命令は有効なのか、俺の足は棒のように固まって動かない。でも、無視した。コンクリートで固められたみたいに動かしにくい足を前に踏み出す。一步あるだけで、プレス機で脚を粉碎されているような感覚が走る。でも、気にしない。ぎこちなくだが、前に進む。そのうち脚の感覚がなくなってしまった。しかたがないので、四つん這いになって、前に進む。

「……………永琳、これはどういうことなの? この妖怪は何? なぜ、あなたはそんなに怯えているの?」

「ち、違うの! 私は悪くない……………! 私は輝夜のことを思っただからそんなつもりはなかったの……………!」

もう、腕の感覚もなくなった。匍匐前進もできない。腹ばいの格

好で寝そべったまま、首を動かして何とか前に進めないか試してみ
たが、ダメだ。口の中に土が入るばかりで、進めやしない。

「えーりん、もういじわるはよしてくれよ。たすけてくれよ。た
すけて、えーりん」

「やめて……もうやめて……」

大丈夫、俺は永琳を信じている。永琳ならできる。もう俺は、怒
つてないんだ。だから、はやく、はやくはやく、はやくしてくれ。
そうしないと、もうおさえきれそうにない。いまのうちに、おれが
じっとしているうちに……はやく。

「まさか、こんなことになるなんて思ってもいなかったわ。ちょ
っとしたサプライズになれば、くらいのつもりだったんだけど……
永琳、しっかりしなさい。まあ、玉兔が地上にいるのはびっくりし
たけど、たかが妖怪一匹程度に怖がりすぎよ。それに勝手に自滅し
てるじゃない」

「……」

「まったく、しょうがないわね。私たちは、こんなことに時間を
取ってられないのよ。さっさとここから逃げないと……永琳？」

「……」

どうしたんだ？ 俺は気になって首を動かした。永琳の方を見上
げる。

永琳は俺に向けて、銃を構えていた。

37話「贖」

「うそ、だよ、えーりん、なんで……」

「あなたの病は私には治せない」

永琳は泣いていた。泣きながら、銃の引き金に手をかける。おそらく、レーザー銃だ。いくら妖怪といえども、頭部を焼き切られれば死ぬ。

「なにをいつているんだ？ たすけてくれよ、えーりん」

「あなたの悪夢はあなた自身が生み出したもの。その苦しみを癒す方法は、ただ一つ」

嘘だ。俺は永琳を信じている。永琳ならできるはずなんだ。

「ごめんなさい。これはすべて、私の責任。だから、私が決着をつける。その悪夢を終わらせてあげる。私の手であなを」

…このクソアマ。

「殺す…」

引き金が引かれる寸前、俺は四肢と頭部を甲羅の中へ引っ込めた。憎い。

殺したい。

もう我慢できない。

狂気を集める。

感情が振り切れるまで。

怒り狂え。

『“エラー”が発生しました』

『GEROGEROGERO!』

「アガアアアアアッ！」

感覚なんてものに頼るからおかしくなるんだ。すべて怒りに任せ
てしまえ。憎しみを力に変えろ。愛と正義と友情と裏切りと悪と憎
悪だよ。

俺は甲羅から飛び出した。視界を極彩色が埋め尽くす。モザイク
だ。世界がモザイクにしか見えない。目の前にある二つの物体。青
と赤の色をした棒と、黒色の棒がある。たぶん、永琳は前者だ。俺
はすべての殺意をそこへ注いだ。

【XXXXXXXXXXXX!】

もう、なんて言ってるのかわからねえよ。とにかく殺す。

全身全霊、頭の前から足の先まで、すべての力を拳に集める。間
違った。すべての憎しみだ。

思えば、最初から俺はこうしたかったんだ。永琳を見た瞬間から、
ずっと殺意を殺していた。この状況はそれを解き放った帰結にすぎ
ない。水が高いところから低いところへ流れるのと同じだ。

ああ、至福のとき。俺は永琳を殺せるんだ。例えるなら、仕事上
がりにゆっくり風呂に浸かって、その後冷えたビールを飲み干す感
じ。たまらない。このときが来るのをずっと待っていた。俺が殺し
た初めての人間は……そういえば、さっきの月人だった。俺の童貞

「うそだあああああああ！！」

俺の周りには、いつの間にか、白い棒がたくさん立ち並んでいた。なんだお前ら、今それどころじゃない。永琳を追いかけないと。白い棒は俺の行く手を遮ってくる。へし折る。片っ端から棒をへし折って行く。細切れにして食う。食べる。食する。

うまい。

38話「後夜祭」

俺は永琳の後を追って山に入った。永琳たちは歩いて移動した。ということはまだ月には帰っていない。今なら間に合う。早く追いかけるんだ。追いぬけ。俺が一等賞だ。お前らになんか渡さん。でも、五等賞も捨てがたい。

知らないうちに俺は血まみれになっていた。体中傷だらけだ。腕には俺の愛剣が突き刺さっている。だれがこんなひどいことしたんだ。俺は剣を抜いて、鞘にしまった。そして、右の眼空に鞘ごと突き刺す。血と肉が飛び散った。よし、しっくりきた。でも、穴が小さくて奥まで入らない。これではすぐに外に出してしまう。念入りに深く突き刺しておこう。ぐりぐり。

山の中を進んでいると、何かが俺の前に飛び出してきた。妖怪だ。俺は颯爽と腰に差していたレーザー銃を構える。

「手を上げる！ お前は完全に包囲されている！」

俺の前に現れた妖怪は、鬼だった。人間の太男のような体格で、頭に角があり、皮膚が赤い。間違いなく鬼だ。それか、セールスマン。

とりあえず、射殺する。

「ばきゅーん ばきゅーん お前は死んだ」

「なんだお前？ 俺に喧嘩売ってるのか？」

鬼が拳をパキパキ鳴らしながら近づいてきた。俺のレーザー銃の光線を受けて死なないとは、この鬼、かなりのテダレだ。俺の編み

物教室レベルでは、もはや通用しないと云っても過言である。

「はっ、まさかお前は、えーりんの手下なのか!？」

「はあ？ 俺はこの山に住む鬼だ」

やはり、永琳の配下の者であるようだ。どうりで強いと思った。これは俺も本気を出さなければ。俺はレーザー銃を腰に戻した。空手のポーズで迎え撃つ。

「鬼さん、暴力はいけません。お互いの見解が食い違ふときは、手を上げて自分の主張を発表すべきです」

「ごちゃごちゃウルセエ奴だ！ 鬼に喧嘩を売るってことがどういうことなのか、お前にもわかってるだろ？ さっさと始めようぜ」

鬼は先手必勝とばかりに、こちらに向かって来た。それに対し、俺は土下座からの前転キックを繰り出す。鬼は俺の蹴り足をつかんだ。そのまま持ち上げようとする。

「お、重っ!？」

鬼が体勢を崩した。今だ！

俺は鬼の腹にしがみついた。そのたくましいお腹を、舐める！

ペロペロペロペロ。

「……なにしてた、お前」

ペロペロ、ん、このお腹……腹筋が六つに割れている、だと!？
一個もらおう。

俺の家族に謝れ！」

倒れた鬼の体を、瘴気を纏った拳で殴りつける。筋肉をはぎ取る。筋繊維をむき出しにする。これで、水中でも呼吸できるようになった。

「はあ、はあ、はあ……！」

鬼は死んだ。きつと仲の良い友達がドライブスルーまで死体を運んでくれるだろう。

俺は鬼を殺すと、踏みつけられた銃を確認する。幸いにも、銃はやわらかい土の上に落ちていたので、踏まれても壊れていなかった。これで俺はまた、戦える。

俺は飛んでいった短剣を回収し、右目に突っ込みなおした。そのうちに、あたりが騒がしくなる。なんと、そろそろと鬼たちがまた現れたのだ。さっきの鬼の悲鳴を聞きつけてきたか。さすが、永琳配下の特殊部隊、勘が鋭い。

「おうおう！ 喧嘩か？ 俺たちも混ぜろ……あ？」

「な！？ ひでえ殺し方しやがる！ お前がやったのか！？」

俺はすぐにレーザー銃を構えた。鬼たちに向けてレーザー弾幕を放つ。

「トトトトトト トトトトトト シュビーンシュビーン」

「聞く耳持たねえか。どこの妖怪か知らねえが、この山にはこの山の掟がある。俺たち鬼の一族に刃向かう奴は、誰であろうと力でねじ伏せる！ 覚悟しろ！」

やはり、レーザー攻撃が効かない。強敵だ。
どうやら、こいつらを倒さない限り、先には進めないようである。
さっさと殺して永琳を追いかけよう。

* * *

軽く鬼を全滅させた俺は、山の頂上目指して走っていた。

月は中天を過ぎ、山の向こうに消えようとしている。急がなければ。

そして、山頂に到着した。木々がなく、開けた場所に出る。永琳はいない。どこに隠れているんだ？

「なーんか、今日は山が騒がしいと思ってみれば、とんでもない来客もあつたもんだ」

声が聞こえた。広場の中央に転がる大岩の上に誰がいる。それは少女だった。ひらひらした服を着て、頭に大きな二本の角があつた。ひょうたんを手に持ち、それに口をつけてあおる。中身は酒だろうか。変な飾りのついた鎖をも体に巻きつけている。

彼女は誰だ。頭に角があるから、鬼？ でも、小さい女の子だし、もしかして、校長先生かもしれない。だったら、挨拶しないと。

「こんばんわー、校長先生ー」

「ぶはー！ 今日も酒がうまい！」

しかし、どうして永琳がない？ どこへ行った？ ここには校長先生しかいないし……

はっ！ もしや、この校長も永琳の手下！？ 永琳め、校長先生

まで配下にもつとは、底が知れない。

「なるほど、ということは、校長はさしずめ中ボス。校長を倒さなければ、永琳は姿を見せないということか」

「お前も酒飲んでくかー？」

校長先生……こいつは強敵だ。ザコの特殊部隊とはわけが違う。なんとたつて校長だ。おそらく、レーザー光線は効きそうにない。本気を出さなければパイナップルにされてしまう。

「その手は食わんぞ！ ぱきゅーん ぱきゅーん くそう、やっぱりレーザーが効かない！ 肉弾戦で決着をつけるしかない！」

「まあ、そうだな。酒盛りの前に、一勝負やるとするか」

校長は岩の上に立ちあがった。校長先生だからって生意気だ。俺のこと見下しやがって。この高給取りが！

「あたしの名前は伊吹萃香。ま、せいぜい楽しく殺ろうじゃないか」

39話「アナザー・サイド・萃香」

酒呑童子として人間に恐れられ、この山に居座るようになったのはいつのことだったか。仲間の鬼たちを集めて、勝手気ままにやってきた。酒盛りをしてはしゃぎ、気に入った人間をさらっては勝負を挑む。最近では人間たちが鬼の扱いを心得てきたようで、どうにも面白みがないが。

満月の夜のことだった。雲もかからない月見酒にうつてつけの良月だ。この山に客が来た。どこぞの馬の骨とも知れない迷子の妖怪だ。調子に乗って勝負を挑んだ鬼が殺された。その後が続いてのこのこ出ていった連中の残らず皆殺しだ。怒りを通り越して笑ってしまう。なんともわかりやすく、すがすがしい奴じゃないか。

仲間が殺されたことには腹が立つ。だが、鬼が力比で負けて殺されたのだ。憤慨以前に興味がわいた。

鬼とは妖怪の上に立つ妖怪だ。その象徴は絶対的な力である。普通の妖怪では真正面からぶつかっても勝つことはできない。妖怪最強の種族だと自負している。その鬼の一族を複数相手にして殺したとなれば、異常も異常、とんでもない大妖怪に違いない。

妖怪は頂上目指して山を登ってくるようだ。ちょうどいいので、酒でも飲みながら待つことにした。どんな奴がやってくるのか、楽しみである。仲間を殺したおとしまえばきつちりつけるつもりだ。だが、勝負に負けただけの勝ったのだ、きつたりはったりは手前の勝手。そんな腕っ節のいい妖怪がいるのなら、ぜひともに酒を酌み交わしたい。命までは取らずにおくかと思っていた。

だが、こいつはだめだ。一目見て思った。やばすぎる。

「こんばんわー、校長先生ー」

そいつは、私と同じくらいの背丈の少女の姿をしていた。粗末な服と帽子を身につけていたが、鎧だけは巨大でものしい有様。鎧から突きでたむき出しの手足は、関節がおかしな方向に曲がっており、骨折しているのは一目瞭然だ。どうして平然と立っていられるのか不思議である。肌は傷だらけで全身血まみれだった。そして、右目は潰れ、その穴に剣の鞘を突き刺している。だが、鬼を相手にしたのだから、その程度の負傷で済んだことの方が驚きである。容姿に関しては、多少奇抜だが、妖怪なんてそんな奴ばかりだ。特に気にならない。

問題はそいつの放つ気迫だ。ここまで強烈な殺気は感じたことがない。妖力もでかい。私より遙かに上だろう。肌を焼くように突き刺さってくる。厄介な相手だ。だが、それもいい。これは私も手を抜いてられない。本気で命のやりとりをすることになる。まったく、勝負の後の酒がうまくなりそうだ。

「その手は食わんぞ！　ぱきゅーん　ぱきゅーん　くそう、やっぱりレーザーが効かない！　肉弾戦で決着をつけるしかない！」

相手もどうやらやる気のようにである。私は立ちあがって宣戦布告した。

さあ、楽しい勝負の始まりだ。

* * *

手始めに、私が座っていた大岩を片手で持ち上げ、投げつけてみた。

「なんて怪力だ！　さすが校長先生！　俺も負けてらんねえ！」

すると妖怪は、避けるどころか自分から岩に飛び込んできた。そ

のまま頭からぶつかり、大岩を頭突きで粉碎する。大した石頭だ。

「食らえ必殺！ 暗黒殺法・呪闇拳！」

その勢いのままこちらに突っ込んできた。妖怪の体から黒い霧が噴出する。なんの技だろうか。様子見に、避けずに防御してみる。受け止めた腕に衝撃が走る。みしりと骨がきしむ音がした。

「……！ なるほど、呪いね」

黒い霧は私の体にまとわりつくように浸食してきた。これは生ける者すべてに無差別に害を与える呪いだ。しかも、強力極まりないむせかえるような甘い匂いをさせ、容赦なくこちらの思考能力を奪おうとしてくる。えげつない神経毒だ。

私は浸食が進む前に、体内から妖力を発して呪いをはねのけた。一発ならどうということはないが、連続で当てられると厄介である。まあ、それなら避ければいい話だ。

「はあああ！ 呪闇連衝拳！」

それは相手もわかっていているようで、連続で高速の拳を撃ってきた。息を飲むような速度でいくつもの黒い拳が壁のように迫ってくる様は見えていてぞつとしないものがある。私はその一つ一つを落ちついてかわしていく。

「な、なぜ当たらない！？ 貴様、エスパーか！？」

妖怪は動揺した。その隙は大きい。連撃の攻撃を見切り、蹴りを胴に差し込む。

「え、なんで？ 何が起きた？」

内臓を潰す気で蹴ったのだが、まったく効いていないようだ。多少よろけはしたが、平然としている。それよりも、私の攻撃が入ったことに驚いているようだ。鎧は見た目どおり、頑丈か。ならば、手足か頭を狙った方がいい。

「やるな！ 校長！ さすが中ボスだ！」

「さつきからあたしのことをコーチョーって呼んでるみたいだけど、あたしの名前は萃香だよ」

「萃香さん！」

「そうそう」

妖怪は、またもや黒い拳で殴りかかってくる。もう決まり手が見えてきた。私はあくびをしながらその攻撃をかいくぐる。それにしても、ひじの関節が逆方向に骨折しているのに、よくこんな無茶な正拳突きをぼんぼん撃てるものだ。可哀そうだから、関節を元の方向に戻してやろう。

ばきっ

「あっ」

私の手刀が妖怪の腕にきまる。おっと、普通ならここで痛みを怯むところだが、こいつはそんなこと気にならないのかも片方の手で構わず殴りつけてくる。それを受け流して脇に挟み、後ろに回ってひねりあげる。そのまま引っ張って肩を壊した。

「あれ？ あれれ？ おかしい。なんで？」

「はあ、思ったほどじゃなかったね、あんた。動きがド素人だよ」

確かにこいつの攻撃は速いし、重い。鬼たちがやられた理由も納得できた。だが、動きが読みやす過ぎる。牽制も何も無い真っ直ぐの攻撃しかしてこないと、構えを見た時点で予測できる。

こつという始めから力が強い妖怪というのは、すべての闘いを真正面からの力技で片付けようとする。そして、その方法を通用させるだけの実力がある。格下の相手ならそれで問題なく倒せるだろう。だが、実力が均衡してくると、途端に泥仕合になってしまう。相応の技術を身に付けた相手なら、実力の差を覆して勝利をつかみとることも不可能ではない。

鬼がいい例だ。最初から力をつけて生まれたばかりに、いつも決まった一つ覚えの闘い方しかできないのだ。鬼の私が言えた義理ではないが。この妖怪もたぶんそうだ。実戦不足が如実に攻撃にあらわれている。

はつきり言って拍子抜けだ。こんなんじゃ、全然物足りない。勇儀とじゃれあっていた方がまだ楽しい。やっぱり、考えが変わった。こいつと酒を飲んでも楽しくなりそうにない。ここで殺してしまおう。

「お、俺は強い！ こんなところで死ぬわけがない！ だってまだ中ボス戦だよ！？ えーりんもまだ出てきてないのに！」

「ああ、あんたは強いよ。でも、相手が悪かったのさ」

一撃で仕留めよう。私は妖力を練り上げ、拳にこめる。一息で相手の懐へもぐりこんだ。このまま顎を撃ち抜いて脳天まで砕く。さ

すがにこの頑丈な妖怪でもただでは済むまい。

「い、いやだ！ えーりん！」

「おおお？」

だが、私の思惑はずれた。なんと、相手の頭が鎧の中にすっぽりと引っ込んだのだ。目標を失くした拳が空を切る。大きな隙ができてしまった。追撃に備えて空中で体勢を整える。だが、相手からの攻撃はない。妖怪は、カメのように手足もすべて鎧の中に隠れてしまったのだ。なんとも芸の多い奴。

しかし、これでは手が出せない。試しに殴ってみたが、案の定こちらの手が痛くなるほどかたい。持ち上げようとしても、尋常でない重さだった。鬼に言わせるのだから大したものだ。

「おーい、でてこーい」

無反応。つまらない。

私は大きいため息をついた。ここは向こうが顔を出すまで気長に待つか。

何かぶつぶつと小さな呟きが聞こえてくる。カメ妖怪は甲羅の中で何か独り言をつぶやいているようだ。私は能力で音を『萃めて』聞いてみた。

「なんで俺の攻撃が効かないんだ！？ 俺は負けるのか？ ここでゲームオーバー？ そんなの嫌だ！ あいつはおかしい！ 強すぎる！ ゲームバランスが狂ってる！」

なにやら、私に対して文句を言っているようだが、聞きなれない言葉ばかりで何の事だかわからない。自分が敵わない理由がわから

ないらしい。哀れなものだ。

「たすけて、たすけて、たすけて」

最後は命乞いだ。本格的に興味がなくなった。こんな言葉を盗み聞きする価値もない。勝負の最中に逃げ出すなど、妖怪の風上にも置けない奴だ。さつさと殺して、終わらせたいところである。

ひょうたんの蓋を開け、酒をあおる。早く出てきてくれないものか。

「んあ？」

それは酒を口に含んだほんの少しの隙だった。甲羅に目をやる。心配がない。甲羅はそこにあるのだが、そこから先ほどまで感じていた殺気を読み取れない。

そのとき、ぞくりと背筋に悪寒が走った。背後にいる。いつの間に移動したんだ。甲羅の鎧を脱ぎ捨てたのか。よしよし、少しは楽しくなりそうじゃないか。

「不意打ちなら、もっと殺気を隠しなよ」

私は後ろへすぐさま振り返る。だが、そこには誰もいなかった。そんなはずはない。さつきまで確かに背後に心配が……

「Usagittobi」

その声は、私の後ろから聞こえた。どうやった。なぜ、そこにお前がいる！？

私は舌打ちしながら振り向きざまに回し蹴りを入れる。相手の体勢もわからないまま放った蹴りは、上体をそらすことで簡単にかわ

された。それはいい。この蹴りは牽制にすぎない。相手の姿を視界に捉えた。もう逃がしはしない。

そこで相手は拳を突き出してきた。またもや正拳突きだ。いい加減、こいつには学習能力というものがないのだろうか。何度やろうと無駄だ。その攻撃は見切っている。

「Usaggiari」

「な、にいつ!？」

だが、私はその攻撃をかわしきれなかった。正確には拳には当たらなかった。しかし、その拳に纏わりついていた呪いの塊がはじけとんだのだ。呪いの飛沫に触れることくらい、なんでもない。私の身に起こったことは、それとは関係なかった。

気づいたときには、内臓をやられていた。せりあがってきた血が口から吹き出す。何をされたのか、全然わからなかった。今までの闘い方とは次元が違う。

「ぐ、お……!」

しかも、ただの打撃じゃない。体の中に異物を埋め込まれた。呪いだ。呪詛が肉体を侵食していく。視界が揺らぎ、頭がうまくはたらかなくなる。

この呪いは、さっきからずっと見せてもらっている黒い霧状のものである。これが体表にとりつく分には、簡単にはらうことができる。しかし、体の中に埋め込まれたとなれば話は別だ。内部の深くにまで打ち込まれた毒は、用意には取り除けない。

油断した。これだけの力があるのなら、なぜ最初から本気を出さなかったのか。いずれにしても、考えている余裕はない。敵の攻撃の正体がわからない以上、足を止めるのは危険だ。

私は能力を行使する。『密と疎を操る程度の能力』だ。あらゆるものの“密度”を操る力。それは事物の構成要素の“集合”と“分離”を自在に操ると言い換えてもいい。あいにく、相手の体をバラバラにするなんてことはできないが、こと自分の体をいじる点においてはかなりの融通がきくのだ。

私は切り離された左腕を『萃めた』。時間を巻き戻したように腕が元通りになる。

ニヤリと口もとをゆがめ、地を踏みしめて気合いを入れる。

「うおおおおあああああああー！」

「A h a - h a - A h a !」

私は突進した。一寸足りとも怯んでやるものか。

妖怪が刀を振り上げる。その筋を読み、腕を差し込んだ。斬り飛ばされる。構わない。そのまま残った方の拳で腹を殴りつける。鳩尾に叩き込んだ拳を振り抜く。妖怪は枯れ葉のように宙を舞った。軽い。鎧の守りを失くした妖怪の体は脆かった。

吹き飛ばされて地面を転がる。ふらふらと立ちあがった妖怪は口から大量の血を吐きだす。これでお相子だ。その顔に苦しみはない。狂ったように笑っていた。そうこなくつちゃ。私は斬られた腕を元に戻す。

元に戻すと言っても、完全に再生することはできない。外傷はなくなり、一応問題なく機能するが、こんな反則的な技を使い続ければ色々と不具合がでてくる。ここまで精密な能力の行使は久しぶりなので、疲労も半端ではない。痛みも蓄積していく。なにより注意すべきは、あの呪いだ。効果は地味だが、確実にこちらの体力と精神力を奪っていく。

だが、楽しもう、この命のやりとりを。力の限り、な。

40話「嵐が過ぎれば」

なんでこんなに強いんだよ。反則だろ。腕も脚も胴も切り落とし
た。でも死なない。目の前の鬼の少女は、どれだけ致命傷を与えよ
うとも復活する。

俺の精神はこの闘いの中で、自己破壊の次の段階へと進むことが
できた。存在の拡大解釈だ。俺という存在の破壊と再生が繰り返さ
れる。その不安定な状態こそが“俺”だ。その感覚をつかめば、玉
兎三技の使用は簡単にできた。俺の体の周囲に妖力を形成する。つ
まりそれは、“一瞬先の俺”を作り出すことだ。そのヴィジョンを
明確に頭の中に描き、妖力を操れば、そこに現実と理想の齟齬が生
まれる。後はその二つが統合されるまで待てばいい。自然な修正力
によって、妖力の形成が現実化する。そのとき生まれるエネルギー
は計り知れない。

この力があれば、どんなことだってできる。目の前の敵を容易く
排除できる。そのはずだ。なのに、どうして。

手が砕かれて、もう短剣をもつことができない。原形を失くした
腕をがむしゃらに振るって殴りつけるだけだ。二回に一回はかわさ
れる。当たっても倒れない。逆に反撃されてこちらが吹き飛ばされ
る。相手もだんだんと動きにキレがなくなってきた。傷は回復して
いるが、ダメージは与えているはず。もう少し耐えれば俺が勝つ。

拳を打ちにいった俺の前で、少女の体が二つに分かれた。またか。
分身だ。二人になった少女は左右から俺に攻撃してくる。いったい
どんな妖術だ。分身って、単純に戦力二倍だろ。ふざけんな。俺は
二方向からの攻撃に、ポコポコ殴られるしかない。めくらめっぼう
に腕を振り回す。やめろ。どっかいけ。俺の前から消えろ。

「はあはあはあ!」

「g-i-g-i-g-i……」

俺は勝たなくちゃならない。こいつを倒して永琳に会いに行く。こんなところで死ぬわけにはいかない。この中ボスを倒せば、きつと永琳が……

そういえば、永琳はどこに行ったんだろ。

「よそ見い、すんなああっ！」

また殴られる。いや、それどころじゃない。永琳はどこだ。俺は、こんなところでこんな奴と闘っている場合か？ 違うだろ。永琳を探さなくちゃ。早くしないと、月に帰ってしまう。帰らせてなるものか。永琳は俺のものだ。誰にも渡さない。

「A - r i g e n , A - r i n n ごほっ！ / A - r i g u b n A - r i n , A g i a a ! - r i n n , A - g a r i n n」

「てめえ、はあはあ！ 勝負の最中に、はあ！ どこに行こうとしてんだっ！」

鬼の少女は俺に馬乗りになって顔面に連打を食らわせてくる。俺も殴り返した。互いに防御なんてしない。一発一発に全力をこめた一撃を相手の顔面に叩き込む。鈍い衝撃が頭部を揺らす。一秒ごとに意識が白む。目の前が白く染まっていく。

いや、違う。これは光だ。光が森の闇を取りはらっていく。朝日が昇った。

空に、月は、もうない。

「……えーりん……」

ぶつりと糸が切れた。腕が上がらない。今までずっと感覚を殺していた。限界を超えた肉体を憎悪で無理やり動かし続けた。燃料切れだ。心が空っぽになっている。

鬼の少女は動かなくなった俺を、なおも殴り続けた。もう、攻撃を食らっても、痙攣するくらいの反応しかできない。それでも殴られる。

「『まいった』って、いえ！」

殴られる、殴られる、殴られる。

「まけを……はあ……みちよめろっ！」

そうだ、とつくに永琳はここにはいない。逃げられた。もう追いつけない。あの女、逃げやがった。俺がどれだけお前のことを求めてきたと思ってるんだ。どれだけ焦がれてきたと思ってる。ちくしょう、逃げられた！ あいつは逃げて、俺はまたひとり。

俺は……

「……ま、け、た……」

もう、永琳を殺せない。

「あたちの、かちだあああっ……！」

鬼が吠える。俺の体を踏みつぶし、勝利の鬨をあげる。俺の口もとが歪む。への字に歪む。悔しい。涙がとまらない。情けない嗚咽を我慢できない。俺は泣きじゃくることしかできなかった。

* * *

てつきり殺されるかと思っていたのだが、どっこい俺は生かされた。

鬼は俺の肩を持って、どこかに運ぼうとしているようだ。獲物は巢穴に持ち帰ってゆっくり食らう主義なのか。

「はあ、ふう、まっちえろ、もうすぐ、らから、はあ」

だが、不思議と悪いように扱われてはいなかった。むしろ、彼女は俺の体をいたわっている。ぴくりとも動かない俺を、気遣うように丁寧に運ぶ。だが、彼女の体力も限界のようだ。足はふらつき、かくかくと震えている。甲羅を背負っていない俺の体なんて、ただの人間の少女と変わらないほどしかない。鬼の力があれば羽のように軽々と持ち上げるはずだ。それができないということは、くたばる寸前まで追い込まれているということ。そんな状態になっても、俺のことを見捨てようとはしなかった。

ついに鬼は、倒れた。ばたりと地面に寝転がる。俺の体も動かない。二人して枯れ葉のにおいのする地面に横たわった。

「ふひい、らめら、ちよっと、きゅうけい、ひよう……」

「うぐっ、ぐすっ、ふああ」

俺はまだ泣いていた。これじゃ、本当にか弱い人間の女の子みないだ。だが、どうにも涙がとまらない。

妖怪の体というのは常識外に頑丈である。このまま休んでいれば、体力はすぐに回復するだろう。即死するような致命傷でないかぎり、どんな深い傷も案外すぐに回復するのだ。

だが、ここは鬼がはびこる山。そこらじゅうに妖怪の影がある。

傷つき、動けない俺たちを狙う輩がいるということは、当然予想しておくべきだった。

「ケケケ！ 何事かと思えば、お山の大将がこんなところでへばつてるぜ！」

「まさか化け物に化け物呼ばわりされる、あの酒吞童子がこの様とは」

「珍しいこともあったもんだ！ こいつはまさに千載一遇って奴だ！」

小妖怪たちがわらわらと集まってくる。極上の妖力を持った大妖怪が二匹もまな板の上の鯉状態なのだ。放っておくわけがない。

「にやんだあ？ おまえら、あたちとやろうつてのわか！？」

顔面を何十発も殴られ、腫れあがった青あざだらけの鬼の少女は呂律が回らない。それでも気合いで起き上がり、ファイティングポーズをとる。

「へぶうつ！？」

しかし、小妖怪が撃ってきた妖力弾を避けることもできず、顔面で受け止める。そのまま、後ろに倒れて動かなくなる。

「やったぞ！ 鬼の大将を倒した！」

「げへへ、こりゃ一生もののうまい飯だぜ」

「何言ってやがんだ！ あれは俺のもんだ！」

「なんだあ？ 一人占めする気が!？」

「俺が倒したんだから俺のもんだ！」

「じゃあ、そのお前をぶっ殺せば俺のもんだな！」

だが、頭の悪い小妖怪たちは、誰が食べるかで喧嘩になり、俺たちをそっちのけで戦いはじめた。

「すーいーかー!!！」

そのとき、遠くから聞こえる誰かの声。その声は徐々に大きくなりながらこちらへ近づいてくる。どかんどかんと轟音のする方を見れば、森の木々が紙切れのように伐採されながら宙を飛んでいる。

「や、やべえ！ 隣山の星熊童子だ！」

「逃げろおお！」

一目散に逃げていく小妖怪たち。今度は何が来るって言うんだ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5878z/>

東方 亀兎忍

2011年12月23日02時47分発行